市道山陰本線北沿線設置予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書

天　神　遺　跡

（第10次発掘調査）

2002年3月

島根県出雲土木建築事務所
出雲市教育委員会

天神遺跡（第１０次調査）正誤表

ページ	行・図	誤	正
例言	29行	（文化財コンサルタント）	（文化財調査コンサルタント）
3	11行	旧石器時代の遺跡は発見おらず	旧石器時代の遺跡は発見されておらず
	13行	矢野遺跡では、遺構は	矢野遺跡でも、遺構は
１６	18行	古墳時代後期に当たることから、	古墳時代後期以降に当たることから、
２７	1行	ＳＤ３４　（第７図）	ＳＤ３４　（第２１図）
	3行	遺構であり、０．９ｍ	遺構であり、幅０．９ｍ
１０９	参考文献	(9)	(9)『平成１２年度　古志本郷遺跡現地説明会資料』2000　島根県教育委員会
２７６	参考文献	(11)	(11)『平成１２年度　古志本郷遺跡現地説明会資料』2000　島根県教育委員会

１６９Ｐ　第１０７図中で「○－△」と示されている番号

○は第１０９～１１６図で図標題「ＳＤ３３　出土木製品○」の番号に対応

△は各図面に付けている遺物番号に対応

市道山陰本線北沿線設置予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書

天　神　遺　跡

（第10次発掘調査）

2002年3月

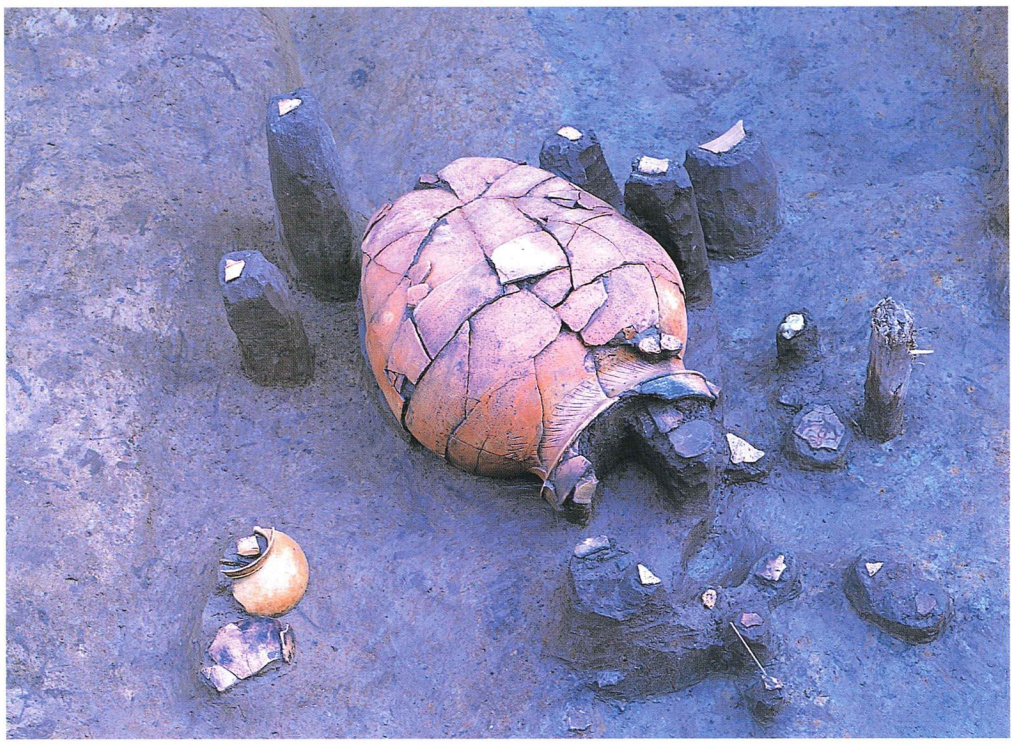
島根県出雲土木建築事務所
出　雲　市　教　育　委　員　会

天神遺跡　空中写真

- - - - - - - - 第10次調査　調査地

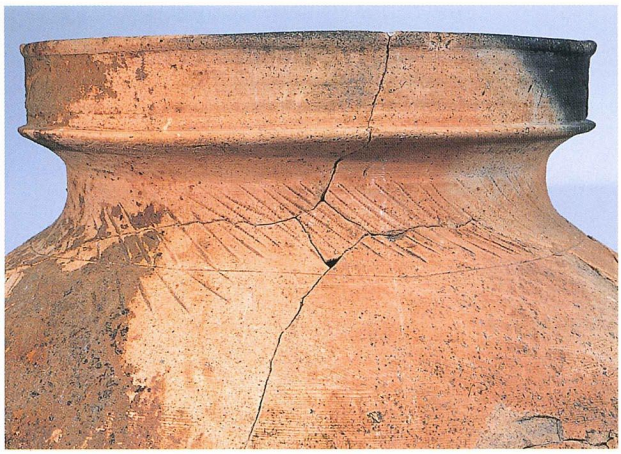
SD14　　遺物出土状況

SD14　　出土遺物

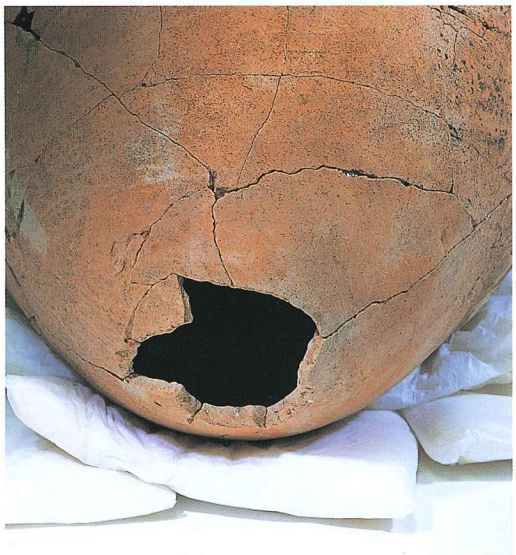


SD22　　大壺　出土状況

頸部　文様



頸部　文様



底部　穿孔

C区　　黒色粘土層内　遺物出土状況

黒色粘土層内　出土遺物

D区出土　墨書木札

序

平成１１年度に、出雲市教育委員会において天神遺跡の発掘調査を実施いたしました。本書はその発掘調査成果の報告書です。

この天神遺跡は出雲市天神町、塩冶町を中心とする広い地域に存在する弥生時代から近世にかけての複合遺跡です。この遺跡は昭和４７年以降、１２次にわたって発掘調査が実施され、弥生時代の環壕と考えられる大溝跡など出雲平野の古代を考える上で重要な遺構の出土がみられる遺跡です。

今回の第１０次調査におきましては第７次調査の隣接地ということもあり、第７次調査だけではわかりにくかった弥生時代の環壕の続きを発掘することができました。また、方形周溝墓と考えられる遺構や弥生時代終わりから古墳時代初めの竪穴住居、弥生時代中期の木製品農具などによって、原始・古代における出雲平野の様子をかいま見ることもできるようになったのではないでしょうか。

その他にも中世の石敷遺構や近世から近代の道と考えられる遺構なども発見され、多くの調査成果を得ることができました。

最後になりましたが、島根県出雲土木建築事務所をはじめ調査の実施にあたりご協力いただいたすべての方々に御礼申し上げます。

平成１４年３月

出雲市教育委員会
教育長　多久　博

例　言

1．本書は島根県出雲土木建築事務所が施工する山陰本線北沿線設置工事に伴い実施した、第１０次天神遺跡発掘調査の報告書である

2．発掘調査期間

平成１１年（１９９９）６月１５日～平成１２年（２０００）３月３１日

3．発掘調査を実施した場所

島根県出雲市塩冶有原町４丁目１９５８－２　他

4．調査組織

平成１１年度（現地調査）

調査主体	出雲市教育委員会			
事務局	出雲市教育委員会	文化振興課	課長	大田　茂
			課長補佐	川上　稔
調査員			主事	高橋　智也
調査補助員			臨時職員	石橋　弥生
			同	永瀬　周子
			同	鬼村奈津子

平成１２年度（整理作業）

調査主体	出雲市教育委員会			
事務局	出雲市教育委員会	文化振興課	課長	大田　茂
			課長補佐	川上　稔
調査員			主事	高橋　智也
調査補助員			臨時職員	石橋　弥生
			同	宮崎　綾

平成１３年度（報告書作成）

調査主体	出雲市教育委員会				
事務局	出雲市文化企画部	芸術文化振興課	文化財室	室長	川上　稔
調査員				主事	高橋　智也
調査補助員				臨時職員	今岡ひとみ

5．本書で使用した遺構略号は次のとおりである。

ＳＤ－溝状遺構　ＳＩ－竪穴住居跡　ＳＫ－土壙状遺構　Ｐ－ピット　ＳＸ－性格不明遺構

遺構番号については調査区ごとの番号重複を防ぐため、基本的には検出順に一貫して遺構番号をつけている。そのため、連番であっても調査区が別である場合があるので、ご了承いただきたい。なお、様々な混乱を防ぐため、第２表（Ｐ２７２）には遺構一覧表を付している。

6．本書で使用した方位は第Ⅲ系国土座標の軸方向（真北）による。

7．本書で使用している土色は『新版　標準土色帖』１９９６年版による。

8．本調査の出土遺物、実測図及び写真は出雲市教育委員会で保管している。

9．本書掲載の遺物実測図は高橋、石橋、今岡、鬼村、永瀬、宮崎が作成し、写真撮影は高橋が行った。また、図面のトレースは荒木恵理子、吹野初子、園山美千代が行った。なお、墨書木札の赤外線写真撮影については島根県埋蔵文化財調査センターにご協力いただいた。

10. 本書掲載の遺物の実測図のうち、弥生土器・土師器を断面白抜き、須恵器を断面塗りつぶし、陶磁器を断面網掛けで表示した。

11. 本書の執筆・編集は高橋が行った。

12. 調査にあたっては島根県出雲土木建築事務所、ＪＲ西日本出雲鉄道部より多大なご協力をいただいた。

13. 発掘調査、遺物整理及び報告書執筆にあたり、次の方々にご指導、ご協力を賜った。記して感謝いたします。（敬称略）

田中　義昭（島根県文化財審議委員）・椿　　慎二・池淵　俊一（以上、島根県教育委員会文化財課）・西尾　克己・林　　健亮・守岡　正司・間野　大丞（以上、島根県埋蔵文化財調査センター）・岡　　宏三（島根県立博物館）・野坂　俊之（湖陵町教育委員会）・渡邉　正巳（文化財コンサルタント）・中村　唯史（島根県立三瓶自然館）

14. 発掘調査にあたっては次の方々に従事していただいた。（順不同）

渡部政義・小玉順子・前島正喜・岡　久夫・塚原立之・高根常代・宮崎　綾
富田　勉・吾郷要子・福田雅美・中野治夫・吉田　栄・片山　修・神田鶴子
山根幸枝・奥田広信・吾郷　栄・天野重夫・坂本トミ子・高橋ナツエ・奥田利晃
有田俊夫・星野勝義・勝部初子・来間達夫・原　恒文・勝部武夫・佐野静枝

目次

序

例言

目次

挿図目次

図版目次

Ⅰ　調査に至る経緯……1

Ⅱ　位置と環境……3

Ⅲ　天神遺跡発掘調査略史……7

Ⅳ　第１０次天神遺跡発掘調査報告

1．A区……15

2．B区……43

3．C区……157

4．D区……229

5．自然河道……261

6．まとめ……267

Ⅴ　総括　天神遺跡……273

報告書抄録

挿図目次

Ⅰ　調査に至る経緯

第1図　調査区位置図 ……1

第2図　調査区配置図 ……2

Ⅱ　位置と環境

第3図　出雲平野主要遺跡 ……4

第4図　天神遺跡周辺遺跡 ……5

Ⅲ　天神遺跡発掘調査略史

第5図　天神遺跡発掘調査区配置図 ……7

Ⅳ　第１０次天神遺跡発掘調査報告

１．Ａ区

第6図　Ａ区基準杭配置図 ……16

第7図　Ａ区遺構配置図① ……17･18

第8図　Ａ区遺構配置図② ……19･20

第9図　ＳＤ０３遺構実測図 ……21

第10図　ＳＤ０４遺構実測図 ……21

第11図　ＳＤ０４出土遺物 ……21

第12図　ＳＤ０６遺構実測図 ……21

第13図　ＳＤ０６出土遺物 ……22

第14図　ＳＤ０７遺構実測図 ……22

第15図　ＳＤ０８遺構実測図 ……23

第16図　ＳＤ０８出土遺物 ……23

第17図　ＳＸ０３遺構実測図 ……24

第18図　ＳＸ０３出土遺物 ……24

第19図　ＳＤ２４出土遺物 ……25

第20図　ＳＤ２４遺構実測図 ……25

第21図　ＳＤ２７遺構実測図 ……25

第22図　ＳＤ２８遺構実測図 ……26

第23図　ＳＤ２８出土遺物 ……26

第24図　ＳＤ２９・３０遺構実測図 ……26

第25図　ＳＫ０１遺構実測図 ……27

第26図　ＳＫ０４遺構実測図 ……27

第27図　Ｐ９出土遺物 ……28

第28図　遺構外出土遺物 ……29

第29図　攪乱土内出土遺物 ……30

２．Ｂ区

第30図　Ｂ区基準杭配置図 ……44

第31図　Ｂ区遺構配置図① ……45･46

第32図　Ｂ区遺構配置図② ……47･48

第33図　Ｂ区遺構配置図③ ……49･50

第34図　ＳＤ１３遺構実測図 ……51

第35図　ＳＤ１３出土遺物 ……51

第36図　ＳＤ１３遺物出土状況 ……52

第37図　ＳＤ１５遺構実測図 ……53

第38図　ＳＤ１５遺物出土状況 ……54

第39図　ＳＤ１５出土遺物 ……55

第40図　ＳＤ１９・２０
遺構実測図 ……57

第41図　ＳＤ１９・２０
遺物出土状況 ……58

第42図　ＳＤ１９・２０
出土遺物 ……59

第43図　ＳＤ２１出土遺物 ……60

第44図　ＳＤ２１遺構実測図 ……60

第45図　ＳＫ０６遺構実測図 ……60

第46図　ＳＫ０６出土遺物 ……60

第47図　ＳＤ１２出土遺物 ……61

第48図　ＳＤ１２遺構実測図 ……62

第49図　ＳＤ１２遺物出土状況 ……63･64

第50図　ＳＤ１４遺構実測図 ……65･66

第51図　ＳＤ１４遺物出土状況 ……67･68

第52図　ＳＤ１４出土遺物① ……71

第53図　ＳＤ１４出土遺物② ……72

第54図　ＳＤ１４出土遺物③ ……73

第55図　ＳＤ１４出土遺物④ ……74

第56図　ＳＤ１４出土遺物⑤ ……75

第57図　ＳＤ１４出土遺物⑥ ……76

第58図　ＳＤ２２遺物出土状況 ……77

第59図　ＳＤ２２遺構実測図 ……78

第60図　ＳＤ２２内出土
大壺出土状況 ……79
第61図　ＳＤ２２出土遺物① ……82
第62図　ＳＤ２２出土遺物② ……83
第63図　ＳＤ２２出土遺物③ ……84
第64図　ＳＤ２２出土遺物④ ……85
第65図　ＳＤ２２出土遺物⑤ ……86
第66図　ＳＩ０１遺構実測図 ……87
第67図　ＳＩ０１遺物出土状況 ……88
第68図　ＳＩ０１出土遺物① ……89
第69図　ＳＩ０１出土遺物② ……90
第70図　ＳＤ１４・１５間
盛土検出状況 ……91･92
第71図　ＳＤ０２出土遺物 ……93
第72図　ＳＤ１６遺構実測図 ……94
第73図　ＳＤ１６出土遺物 ……94
第74図　ＳＤ１１遺物出土状況 ……95･96
第75図　ＳＤ１１遺構実測図 ……95･96
第76図　ＳＤ１１出土遺物 ……95･96
第77図　ＳＤ１８
遺構実測図・遺物出土状況 ……97
第78図　ＳＤ１８出土遺物 ……97
第79図　ＳＫ０７遺構実測図 ……98
第80図　ＳＫ０７出土遺物 ……98
第81図　ＳＸ０１遺構実測図 ……99
第82図　ＳＤ０１遺構実測図 ……99
第83図　ＳＤ０１出土遺物 ……100
第84図　ＳＤ０５・ＳＫ０５
出土遺物 ……100
第85図　ＳＤ３１出土遺物 ……101
第86図　ＳＤ３１遺構実測図 ……101
第87図　ＳＫ０５遺構実測図 ……101
第88図　ＳＫ０８遺構実測図 ……101
第89図　ＳＫ０９・１０出土遺物 ……102
第90図　Ｐ２遺構実測図 ……102
第91図　Ｐ１２遺構実測図 ……102
第92図　ＳＤ０５・ＳＫ０９・１０
遺構実測図 ……103
第93図　Ｐ１７遺構実測図 ……104
第94図　Ｐ１８遺構実測図 ……104
第95図　Ｐ１２・１７・１８
出土遺物 ……104
第96図　遺構外出土遺物① ……107
第97図　遺構外出土遺物② ……108
第98図　遺構外出土遺物③ ……109
３．Ｃ区
第99図　Ｃ区基準杭配置図 ……158
第100図　Ｃ区遺構配置図① ……159･160
第101図　Ｃ区遺構配置図② ……161･162
第102図　Ｃ区遺構配置図③ ……163･164
第103図　ＳＤ３２遺物出土状況 ……165
第104図　ＳＤ３２遺構実測図 ……166
第105図　ＳＤ３２出土遺物 ……167
第106図　ＳＤ３３遺構実測図 ……168
第107図　ＳＤ３３遺物出土状況 ……169
第108図　ＳＤ３３出土遺物 ……170
第109図　ＳＤ３３出土木製品① ……171
第110図　ＳＤ３３出土木製品② ……172
第111図　ＳＤ３３出土木製品③ ……173
第112図　ＳＤ３３出土木製品④ ……174
第113図　ＳＤ３３出土木製品⑤ ……175
第114図　ＳＤ３３出土木製品⑥ ……176
第115図　ＳＤ３３出土木製品⑦ ……177
第116図　ＳＤ３３出土木製品⑧ ……178
第117図　黒色粘土層遺物出土状況 ･179～180
第118図　黒色粘土出土遺物① ……182
第119図　黒色粘土出土遺物② ……183
第120図　黒色粘土出土遺物③ ……184
第121図　黒色粘土出土遺物④ ……185
第122図　黒色粘土出土木製品① ……187

第123図　黒色粘土出土木製品②……188
第124図　黒色粘土出土木製品③……189
第125図　遺構外出土遺物①……191
第126図　遺構外出土遺物②……192
第127図　遺構外出土遺物③……193
第128図　遺構外出土木製品……195
第129図　木札実測図……196
4．D区
第130図　D区基準杭配置図……230
第131図　D区遺構配置図①……231･232
第132図　D区遺構配置図②……233･234
第133図　D区遺構配置図③……235･236
第134図　D区遺構配置図④……237･238
第135図　木札実測図……239
第136図　道状遺構・ピット列
遺構実測図……240
第137図　ＳＤ３５・ＳＫ１１・１２
遺構実測図……241
第138図　第１遺構面出土遺物……242
第139図　２・４層出土遺物……243
第140図　５～７層出土遺物……244
第141図　石敷遺構遺物出土状況……245
第142図　石敷遺構出土遺物……246
第143図　木札実測図……246
第144図　遺構外出土遺物……247
5．自然河道
第145図　自然河道断面図……262
第146図　自然河道出土遺物……262
V　総括　天神遺跡
第147図　第７次・第１０次調査
B区　合成図……277･278

図版目次

A区

図版１　調査前
１～５Ｇｒ完掘状況
１～５Ｇｒ遺構検出状況
図版２　６～７Ｇｒ遺構検出状況
６～７Ｇｒ完掘状況
ＳＤ０６検出状況
図版３　ＳＤ０６完掘状況
ＳＤ０６完掘状況
ＳＤ０７土層堆積状況
図版４　ＳＤ０８完掘状況
ＳＤ２７完掘状況
道状遺構
図版５　ＳＤ０４，０６，１８，ＳＸ０３
出土遺物
図版６　ＳＤ２４，２８，Ｐ９，攪乱土内，
遺構外　出土遺物
図版７　遺構外　出土遺物

B区

図版８　調査前
１７～１８Ｇｒ遺構検出状況
１７～１８Ｇｒ完掘状況
図版９　１２～１３Ｇｒ遺構検出状況
１８～１９Ｇｒ完掘状況
ＳＤ１５土層堆積状況
図版１０　ＳＤ１５土層堆積状況
ＳＤ１５完掘状況
ＳＤ１９・２０・１２検出状況
図版１１　ＳＤ１２・１９
ＳＤ１２・１９完掘状況
ＳＤ２０完掘状況
図版１２　ＳＤ２０土層堆積状況
ＳＤ１２・１３完掘状況
ＳＤ１２土層堆積状況
図版１３　ＳＤ１３遺物出土状況
ＳＤ１４検出状況
ＳＤ１４完掘状況
図版１４　ＳＤ１４・１２土層堆積状況
ＳＤ１４土層堆積状況
ＳＤ１４土層堆積状況
図版１５　ＳＤ１４遺物出土状況
ＳＤ１４遺物出土状況（北側より）
ＳＤ１４遺物出土状況
図版１６　ＳＤ１４遺物出土状況
ＳＤ２２遺物出土状況（北側より）
ＳＤ２２遺物出土状況
図版１７　ＳＤ２２遺物出土状況
ＳＤ２２遺物出土状況
ＳＩ０１遺物出土状況
ＳＩ０１完掘状況
図版１８　ＳＤ１８完掘状況
ＳＤ０１検出状況
ＳＤ０１土層堆積状況
図版１９　ＳＤ０１完掘状況
ＳＤ０２・０５土層堆積状況
ＳＤ０２完掘状況（東端）
図版２０　ＳＤ０５完掘状況
ＳＸ０１検出状況
ＳＸ０１完掘状況
図版２１　ＳＸ０１完掘状況
ＳＤ１１土層堆積状況
図版２２　ＳＤ１３・１５　出土遺物
図版２３　ＳＤ１２・１４・１９・２０・２１・
ＳＫ０６　出土遺物
図版２４　ＳＤ１４　出土遺物
図版２５　ＳＤ１４　出土遺物
図版２６　ＳＤ１４　出土遺物
図版２７　ＳＤ１４　出土遺物
図版２８　ＳＤ２２　出土遺物
図版２９　ＳＤ２２　出土遺物
図版３０　ＳＤ２２　出土遺物
図版３１　ＳＩ０１　出土遺物
図版３２　ＳＩ０１・ＳＤ０１・０２・０５・
１６・３１・ＳＫ０５・０７・
Ｐ１２・１７・１８　出土遺物
図版３３　ＳＤ１１・１８・ＳＫ０９・遺構外
出土遺物
図版３４　遺構外　出土遺物
図版３５　遺構外　出土遺物

C区

図版３６　ＳＤ３２検出状況
ＳＤ３２遺物出土状況
ＳＤ３２遺物出土状況
図版３７　ＳＤ３２完掘状況
ＳＤ３３検出状況
ＳＤ３３土層堆積状況
図版３８　ＳＤ３３遺物出土状況
ＳＤ３３遺物出土状況
ＳＤ３３完掘状況
図版３９　黒色粘土層内遺物出土状況
黒色粘土層内遺物出土状況
黒色粘土層内遺物出土状況
図版４０　黒色粘土層内遺物出土状況
黒色粘土層内遺物出土状況
自然河道底自然流木出土状況
図版４１　黒色粘土層　出土遺物
図版４２　黒色粘土層・ＳＤ３２・３３
出土遺物
図版４３　ＳＤ３２・遺構外　出土遺物
図版４４　遺構外　出土遺物
図版４５　遺構外 出土遺物
図版４６　ＳＤ３３　出土木製品
図版４７　ＳＤ３３　出土木製品
図版４８　ＳＤ３３　出土木製品
図版４９　ＳＤ３３　出土木製品
図版５０　ＳＤ３３　出土木製品
図版５１　ＳＤ３３・黒色粘土層内　出土木製品
図版５２　黒色粘土層内　出土木製品
図版５３　遺構外　出土木製品
図版５４　遺構外　出土木製品

Ｄ区

図版５５　道状遺構ピット列
道状遺構
道状遺構・側溝・ピット列
図版５６　ピット列検出状況
ピット列３
ＳＤ３５・ＳＫ１１・１２
完掘状況
図版５７　畝状遺構検出状況
畝状遺構
畝状遺構
図版５８　石敷遺構
石敷遺構
石敷遺構
図版５９　第１遺構面　出土遺物
５～７層 出土遺物
２・４層　出土遺物
図版６０　石敷遺構 出土遺物
遺構外　出土遺物
図版６１　道状遺構・石敷遺構　出土木製品
図版６２　石敷遺構　出土木製品

自然河道

図版６３　自然河道西肩
自然河道出土木製品

Ⅰ　調査に至る経緯

平成１０年（1998）に島根県出雲土木建築事務所よりＪＲ山陰本線北側へ道路（山陰本線北沿線）を設置するため埋蔵文化財の有無についての試掘調査依頼があった。しかし、当該地は周知の遺跡である天神遺跡の範囲内であること、事業予定地に隣接する場所ではＪＲ高架建設に際し平成６年度に発掘調査を実施していること、また、その発掘調査では多くの遺構、遺物が出土していることなどから遺跡の存在することは明らかであったため、出雲市教育委員会は試掘調査を実施せずに本調査を実施する必要がある旨を伝えた。その後、両者の協議を重ね、平成１１年度（1999）に発掘調査を実施することで合意した。

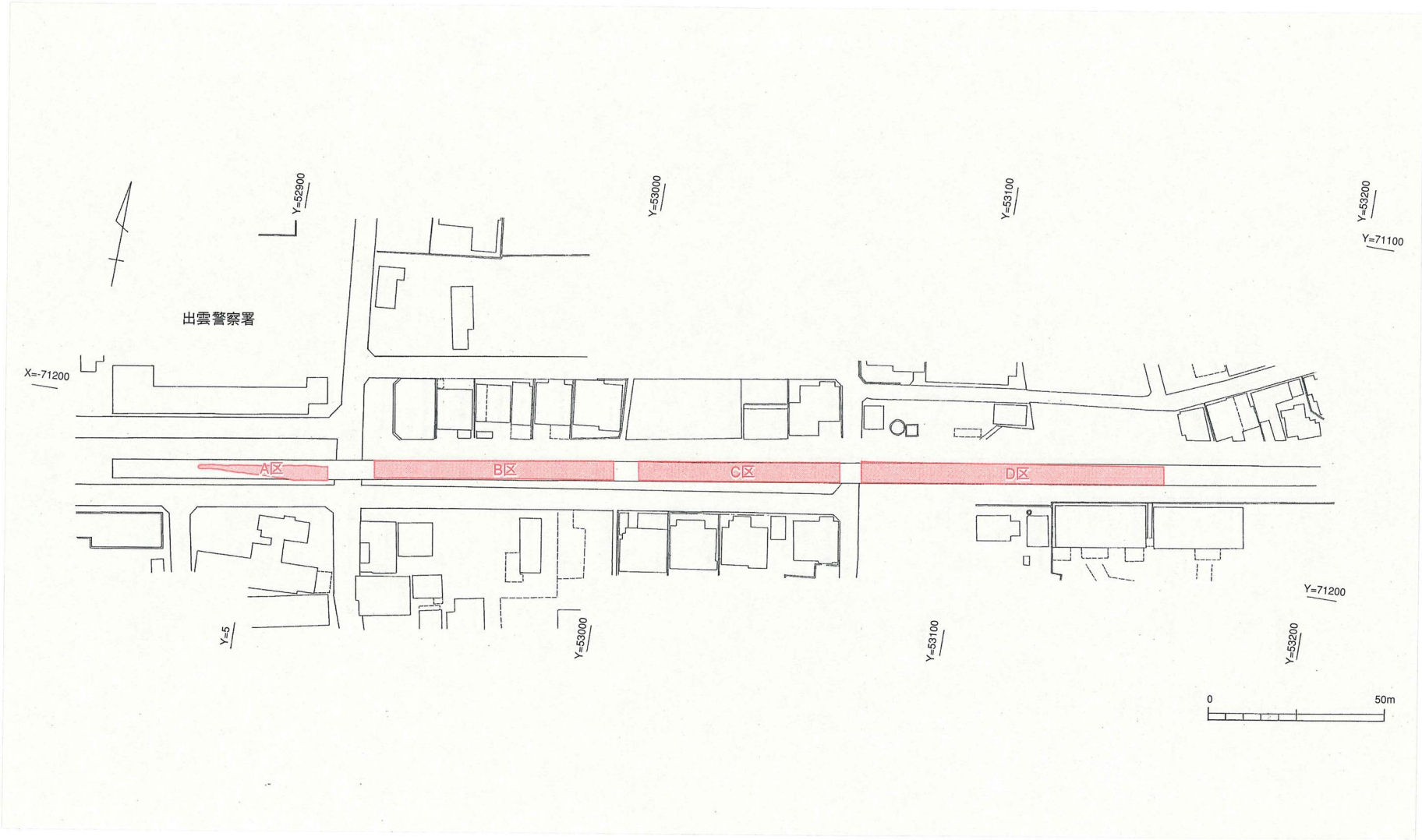
なお、文化財保護法第９８条の２に基づき「埋蔵文化財発掘調査の報告」を平成１１年６月７日付け教文第１３５号をもって島根県教育委員会を通じ文化庁へ提出している。

発掘調査は準備期間を経て、平成１１年６月より実施している。調査区が細長いため調査は４区画（Ａ区～Ｄ区）に分割して実施することとし、協議の結果、道路設置工事の工程も考えあわせた上で西側（Ａ区）より東側に向けて調査を進めることとなった。

Ａ区は平成１１年８月、Ｂ区は平成１１年１０月、Ｃ区は平成１２年２月、Ｄ区は平成１２年３月に調査を終了している。

なお、平成１２年度に出土遺物の整理作業、平成１３年度には引き続き出土遺物等の整理作業及び報告書作成業務を実施した。

第１図　　調査区位置図


Y=52900
Y=53000
Y=53100
Y=53200
Y=71100
出雲警察署
X=-71200
A区
B区
C区
D区
Y=71200
Y=-5
Y=53000
Y=53100
Y=53200
0
50m

第２図　　調査区　配置図

Ⅱ　位置と環境

天神遺跡は神戸川の右岸の出雲平野の中心地である、出雲市塩冶町・天神町を中心とする広い範囲に位置している。

天神遺跡が立地する出雲平野は2大河川である斐伊川と神戸川の沖積作用によって形成された平野である。出雲平野が現在の様子を呈するのは江戸時代に入ってからであり、これは奥出雲においてたたら製鉄による鉄穴流しが盛んとなったため、多くの土砂が斐伊川や神戸川によって平野に流れ込んだ結果である。それまでの出雲平野はそのほとんどが低湿地であったと考えられている。

また、現在では神戸川が日本海へ、斐伊川が宍道湖へ注いでいるが、江戸時代における河川改修以前は両方ともが平野全体に多くの支流を形成しながら日本海へと注いでいたようである。

旧石器・縄文時代

出雲平野においては旧石器時代の遺跡は発見おらず、遺跡の初現は縄文時代早期末である。この時期の遺跡としては北山の麓に位置する菱根遺跡（大社町）や日本海沿岸の上長浜貝塚がみられる。縄文時代晩期になるとようやく平野の中心部に遺跡が出現するようになり、矢野遺跡では、遺構は検出されていないものの縄文土器の出土がみられている。

弥生時代

弥生時代に入ると縄文時代に引き続き矢野遺跡が営まれるが、前期から中期前葉においてはまだ遺跡の数は少ない。

平野中心部に本格的な遺跡の形成がみられるようになるのは中期中葉になってからのことである。これらの遺跡は斐伊川、神戸川、神門水海により形成された自然堤防上の微高地に形成される。

北側には矢野遺跡・小山遺跡などの四絡遺跡群、中央部分は天神遺跡、神戸川を挟んで西側には古志本郷遺跡・下古志遺跡などの古志遺跡群が分布しており、この範囲は遺跡の密集地となっている。このうち天神遺跡、古志本郷遺跡、下古志遺跡からは環壕と考えられる大溝が発見されており、環壕集落が形成されていたことをうかがわせる。遺構、遺物の出土量からみて、これらの集落が最も繁栄したのは弥生時代後期から終末期にかけてであると考えられている。

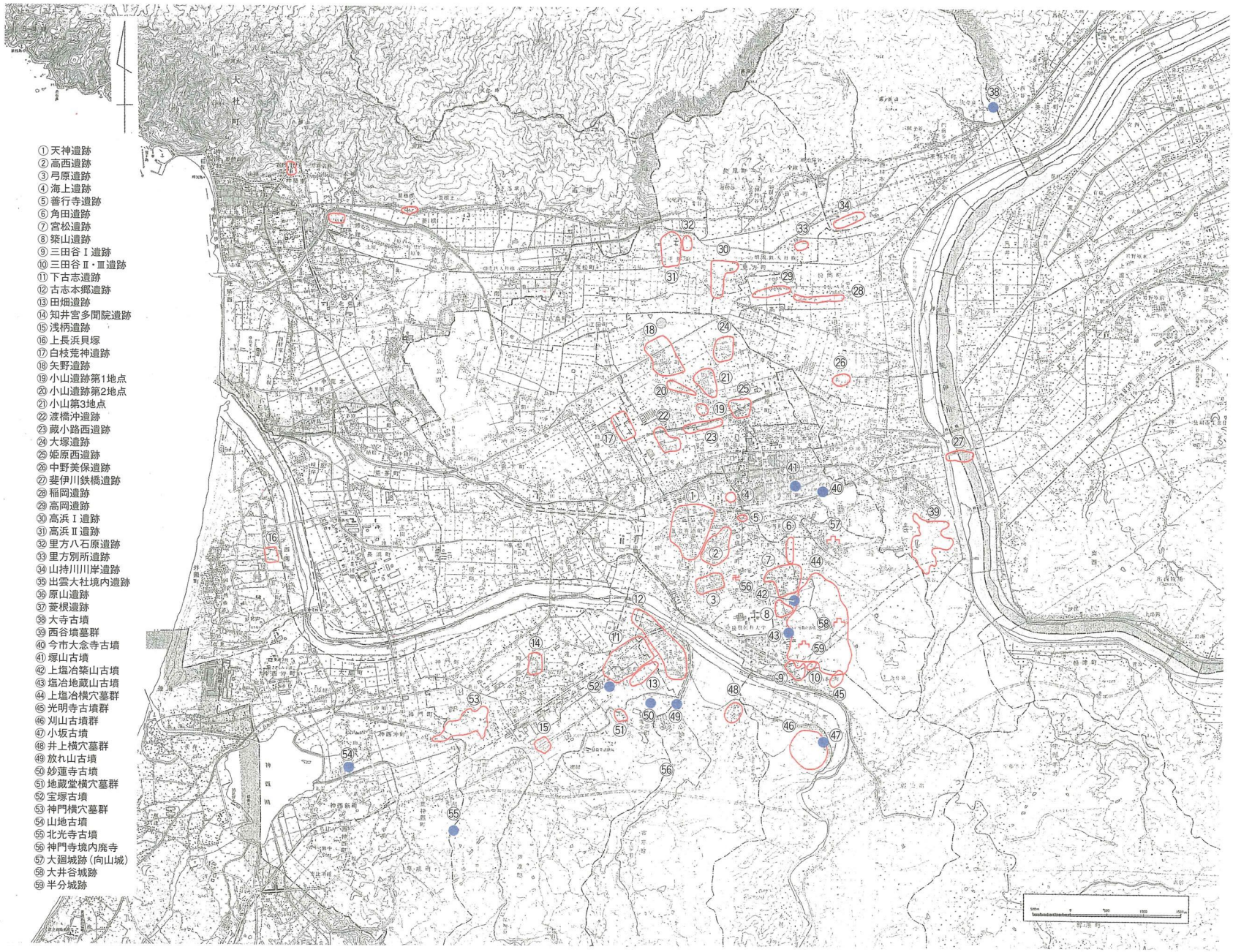
また、平野東側の丘陵上に西谷墳墓群が弥生時代後期に出現する。集落の繁栄を背景にして四隅突出型墳丘墓が多く造営されるようになる。特に西谷3号墓には大量の土器が供献されており、その中に吉備や北陸の土器も含まれていたため、これらの地域との交流も指摘されている。

このように栄華を極めた弥生時代の集落は、弥生時代終末期から徐々にその繁栄にかげりを見せるようになる。そして、古墳時代前期になると、平野中央部の低湿地地帯からは人々の生活の様子をうかがうことができなくなってしまう。

古墳時代

古墳時代に入っても弥生時代終末期に引き続き四絡遺跡群・天神遺跡・古志遺跡群が形成される。しかし、これらの遺跡は古墳時代初頭まで続くものの、前期にはいると突如として姿を消していく。そういった状況を反映してか、出雲平野においての前期古墳の築造数はきわめて少なく、平野縁辺部に山地古墳、大寺古墳が、西谷墳墓群の一角に西谷7号墓がみられるのみである。

出雲平野中心部に人々が戻ってくるのは古墳時代中期から後期にかけてのことである。



第３図　　出雲平野　主要遺跡

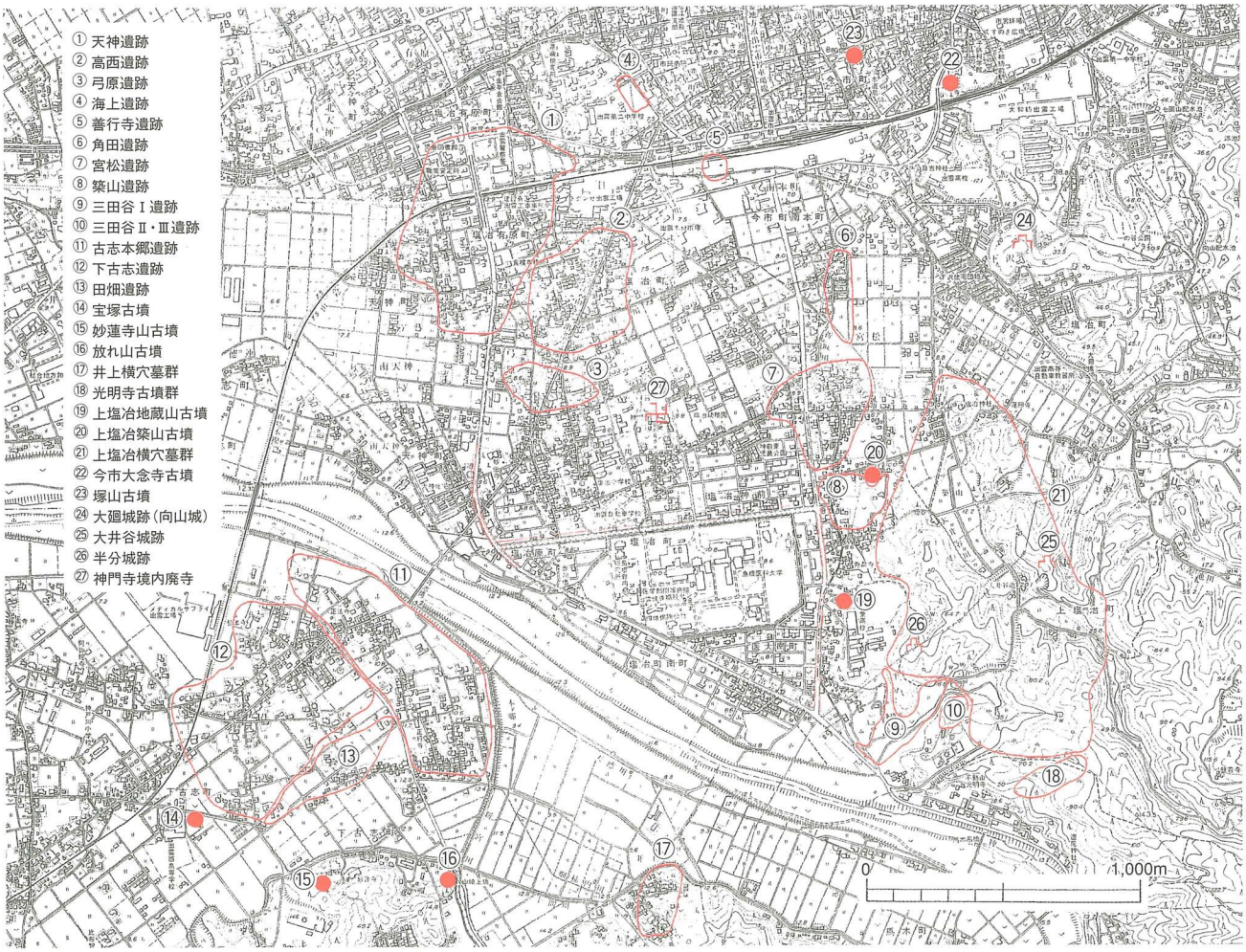
古墳時代中期には平野への人の進出はあまりみられないものの、平野縁辺部には安定して遺跡が営まれている。その代表的な遺跡は三田谷Ⅰ遺跡であり、この遺跡では竪穴住居や方形周溝墓が検出されるなど、集落は平野縁辺部に営まれていたようである。

後期の集落については未だ大きな発見はないものの、今市大念寺古墳・上塩冶築山古墳・地蔵山古墳といった大型古墳がつくられることから、その支持基盤になった人々の生活域が出雲平野にあることが推測される。また、終末期になると上塩冶横穴墓群・神門横穴墓群に代表される横穴墓も多く築造されるようになり、その数から見ても出雲平野における人口が増加していたことがうかがえる。

古代

7世紀末頃の律令国家の成立に伴い、国・郡制が敷かれ出雲平野は出雲国神門郡と出雲郡の一部に編成され、それに伴い郡の官庁である郡衙（郡家）が設置された。古志本郷遺跡では大きな建物跡が検出され、神門郡衙跡であると考えられている。

また、『出雲風土記』には神門郡に二所（朝山郷新造院・古志郷新造院）出雲郡に一所（河内郷新造院）が建立されたことが記載されており、天寺平廃寺（斐川町）は河内郷新造院、神門寺境内廃寺は朝山郷新造院に比定されている。



第4図　　天神遺跡　周辺遺跡

中世

中世の遺構と考えられるものは非常に少ないが、矢野遺跡では１４～１５世紀の屋敷跡が発見されている。また、蔵小路西遺跡においても１２世紀後半～１５世紀の屋敷跡が発見されている上、隣接して三木氏館跡が存在しており、中世においてはこれら四絡遺跡群に在地領主層の居住域が形成されていたようである。

また、塩冶周辺は大廻城、大井谷城、半分城など中世山城跡が多く存在するうえ、所在は明確ではないものの塩冶判官館跡もこの地に存在している伝承もあり、中世における一大拠点として機能していたようである。

参考文献

・『斐伊川放水路建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅴ　三田谷Ⅰ遺跡（Vol. 1)』１９９９　建設省出雲工事事務所・島根県教育委員会

・『斐伊川放水路建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅷ　三田谷Ⅰ遺跡（Vol. 2)』２０００　建設省出雲工事事務所・島根県教育委員会

・『斐伊川放水路建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅸ　三田谷Ⅰ遺跡（Vol. 3)』２０００　建設省出雲工事事務所・島根県教育委員会

・『斐伊川放水路建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅹ　三田谷Ⅲ遺跡』１９９９　建設省出雲工事事務所・島根県教育委員会

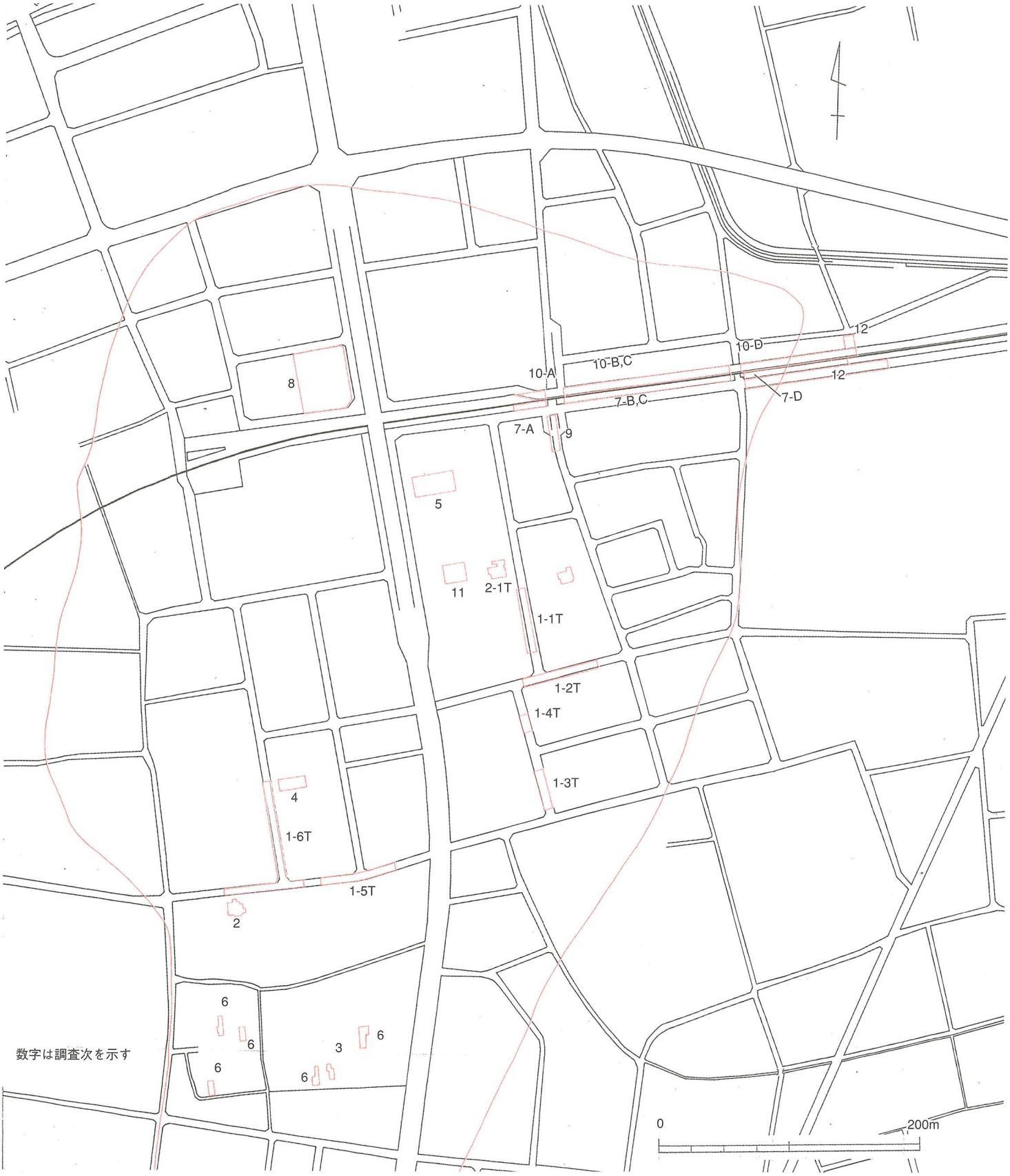
・『出雲健康公園整備プロジェクト事業に伴う矢野遺跡第２地点発掘調査報告書』１９９１　出雲市特別事業部・出雲市教育委員会

・『蔵小路西遺跡　一般国道９号出雲バイパス建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告　2』１９９９　建設省松江国道工事事務所・島根県教育委員会

・『出雲・上塩冶地域を中心とする埋蔵文化財調査報告書』１９８０　建設省出雲工事事務所・島根県教育委員会

Ⅲ　天神遺跡発掘調査略史

出雲平野の中央部分に存在している天神遺跡は出雲市天神町・塩冶町を中心とした地域の広い範囲に分布する弥生時代中期から近世にかけての複合遺跡である。この遺跡は平成１３年時点で１２次にわたって発掘調査が実施されている。各次の発掘調査成果を簡単に概観しておきたい。



第５図　　天神遺跡発掘調査区　配置図

第１次調査（海上地区土地区画整理事業に伴う発掘調査）1971年

調査主体：出雲市

調 査 員：門脇俊彦・近藤　正・勝部　昭

現在の塩冶有原町で６カ所の調査区を設けて発掘調査を実施した。天神遺跡が発見された契機となった調査である。

第１調査地区では弥生時代中期中葉（松本Ⅲ様式）[1]の壺棺墓が検出されている。また、中世の竪穴住居状遺構が検出された。第６調査地区では掘建柱建物跡が２棟検出されており、これらは奈良時代頃の遺構である。近くより墨書土器の出土がみられることから地方官衙の存在していた可能性が指摘されている。

なお、各調査地区においては古墳時代後期の土師器や弥生時代中期中葉の土器が出土している。

文　献：『出雲市天神遺跡　調査の記録』1972　島根県出雲市

第２次調査（島根医科大学教職員宿舎建設に伴う発掘調査）1975年

調査主体：出雲市

調 査 員：横山純夫・卜部吉博・松本岩雄

第１調査区は第１次調査第１トレンチのすぐ北西に位置する。この調査区では１４基の弥生時代中期中葉（松本Ⅲ様式）の土壙墓群が検出されている。同時期の溝状遺構も３条検出されており、そのうちＳＤ０２・０３が同一の遺構であればという前提付きではあるが方形周溝墓の可能性を指摘されている。

第２調査区は第１次調査第６トレンチの南側に位置する。古墳時代後期から奈良時代（Ⅰ期）、中世（Ⅱ期）、近世（Ⅲ期）の３時期に属する掘建柱建物跡が検出された。このうちⅠ期の建物跡は径１ｍを超える柱穴よりなる２間以上×４間以上の大型の掘立柱建物跡も含まれており、官衙的性格を持つことが指摘されている。

文　献：『天神遺跡』1977　島根県出雲市

第３次調査（出雲考古学研究会による自主発掘調査）1978年

調査主体：出雲考古学研究会

調 査 員：池田満雄・飯国芳明・石飛公士・園山和男・鳥谷芳雄・中浜久喜・大国晴雄・川上　稔
西尾克己

現在のところでは天神遺跡の最南端となる場所に３カ所のトレンチを設定して調査を実施しており、多くの溝状遺構、ピットが検出されている。

そのほとんどが性格不明の遺構であるが、Ｂ－１区で検出された土器溜には古墳時代中期の土師器・須恵器が多く出土しており、中期にも人々が天神遺跡にいたことを示唆している。その他、弥生時代中期（松本Ⅲ～Ⅳ様式）の土器や古墳時代後期から奈良時代にかけての須恵器、また、緑釉陶器などが出土している。

また、調査地に隣接する畑地から出土した土器底部に「旱天」と書かれた墨書土器や土器溜と同時

期の土師器・須恵器の紹介も同時に行われている。

文　献：『古代の出雲を考えるⅠ　天神遺跡の諸問題－'78年発掘調査報告－』1979　出雲考古学研究会

第４次調査（建設省職員宿舎建設に伴う発掘調査）1981年

調査主体：出雲市教育委員会

調 査 員：川上　稔

第１次調査第６調査区の隣接地、南北１０ｍ×東西２０ｍが発掘調査の対象となった。

溝状遺構６・掘立柱建物３・土壙２・ピットが検出されているが、時期は中世のものがほとんどである。溝状遺構Ⅰ・Ⅲについては対照的に検出されており、屋敷地を囲うための区画溝の可能性が指摘されている。また、掘立柱建物Ⅲは溝Ⅰの区画内に存在しておりこれに伴う可能性がある。

２基の土壙からは土師器などの出土遺物はあるものの、その性格については明らかになっていない。

文　献：『建設省職員宿舎新築に伴う天神遺跡発掘調査報告書』1982　出雲市教育委員会

第５次調査（建設省新庁舎建設に伴う発掘調査）1985年～1986年

調査主体：出雲市教育委員会

調 査 員：角田徳幸・川上　稔

現在の国土交通省出雲工事事務所地の２１ｍ×１４ｍが調査対象となっている。

溝状遺構１５・土壙９・竪穴住居１・ピット１０を検出している。土壙状遺構のうち調査区北東部で密集した６基については弥生時代中期の土壙墓群と考えられる。また、古墳時代後期と考えられる竪穴住居とともに同時期の溝状遺構も検出されており、この時期に生活区域が存在していた可能性も指摘されている。

文　献：『建設省新庁舎建築に伴う天神遺跡発掘調査報告書Ⅳ』1986　出雲市教育委員会

第６次調査（塩冶地区遺跡分布調査による範囲確認調査）1986年

調査主体：出雲市教育委員会

調 査 員：川上　稔

開発の進む塩冶地区の分布調査をすると同時に天神遺跡の範囲を確認するために実施された５カ所のトレンチ調査である。

第１トレンチからは幅２．２ｍの大きな溝が検出されている。この遺構からは土師質土器の小皿を出土しており、中世の溝と考えられる。第２トレンチからは弥生時代中期の大溝が検出されており、集落を囲むための溝である可能性がある。第３トレンチでは溝４、大型ピット３が検出されている。溝については性格不明だが、ピットについては大型の建物跡である可能性がある。第５トレンチでは中・近世の陶磁器が多くを占め、この時期と考えられる溝が検出されている。

この調査では弥生時代から近世までの遺構・遺物が確認され、天神遺跡が複合遺跡であることを示している。

文　献：『塩冶地区遺跡分布調査Ⅱ』1987　出雲市教育委員会

第７次調査（出雲市駅付近連続立体交差建設に伴う発掘調査）1994年

調査主体：出雲市教育委員会

調 査 員：川上　稔・岸　道三・三原一将・米田美江子

天神遺跡の北辺に当たる場所が調査対象となった。調査区面積は南北約５ｍ×東西約２７０ｍである。

調査の結果、弥生時代中期から近世にかけての多くの遺構・遺物が検出された。

そのうち、もっとも新しい遺構は道状遺構及び畝状遺構である。畝状遺構は近世の水田跡と考えられる。また、畝状遺構を分断するように北東から南西に斜めに横切る非常に堅くしまった砂質土層が検出され、この両端に区画及び排水のためと考えられる溝が設けられていたため、道状遺構と考えられている。また、中世の石敷遺構も検出された。これも道の痕跡であり、木簡（木札）や馬の骨なども出土しており、人・物の輸送に使用していたと考えられる。

弥生時代・古墳時代の遺構は弥生時代中期中葉と終末期から古墳時代初頭の２時期のものが検出されている。主に集落の区画溝と考えられる大溝が各時期２条ずつ検出されており、多くの土器が出土している。また、この大溝よりも東側には縄文時代晩期以前の自然河道が存在しているが、弥生時代以降では湿地帯若しくは沼地であったようであり、この中には弥生時代中期中葉の土器とともに多量の木製品が出土した。木製品の中には四分枝木製品が含まれており、衣笠の一部である可能性が指摘されている。

文　献：『出雲市駅付近連続立体交差事業地内　天神遺跡第７次発掘調査報告書』1997　島根県出雲土木建築事務所・出雲市教育委員会

第８次調査（建設省宿舎新築に伴う発掘調査）1994年

調査主体：出雲市教育委員会

調 査 員：松山智弘

天神遺跡の発掘調査区の中で最も西北に位置する調査区であり、２０ｍ×３０ｍの範囲の調査を実施している。

溝状遺構、ピット、土壙が検出されている。そのうち大規模な溝は近世以降の用水路と考えられ、調査区西南部と北端で検出されたピットと土壙は平安時代から中世のものと考えられる。特にＳＤ０７は中世の遺構であるが、これ以西に遺構がほとんど認められず、集落の区画溝である可能性が指摘されている。

また、古墳時代後期の土壙墓も検出されており、墓壙内からは須恵器坏身２点、鉄鏃１点が出土している。

文　献：『建設省職員宿舎新築工事に伴う　天神遺跡第８次発掘調査報告書』1996　出雲市教育委員会

第９次調査（出雲市駅付近連続立体交差建設に伴う発掘調査）1997年

調査主体：出雲市教育委員会

調 査 員：岸　道三

第７次調査Ａ区の南東部分の１０ｍ×４５ｍを調査している。

弥生時代中期中葉の溝状遺構９、弥生時代終末期から古墳時代初頭の溝状遺構３・落ち込み状遺構３、古代から中世にかけての溝状遺構１・井戸４・土壙１・ピット９が検出されている。

弥生時代中期中葉のＳＤ０９は第７次調査Ａ区大溝につながるものと考えられる。また、その他の溝状遺構についてもその規模から集落を区画する溝である可能性が考えられている。

また、１１～１２世紀と考えられるＳＫ０６内からは側板や杭が検出され、木枠の井戸である可能性が高い。

文　献：『出雲市駅付近連続立体交差事業地内　天神遺跡第９次発掘調査報告書』1999　島根県出雲土木建築事務所・出雲市教育委員会

第10次調査（市道山陰本線北沿線設置に伴う発掘調査）1999年～2000年

調査主体：出雲市教育委員会

調 査 員：高橋智也

第７次調査の北側隣接地を調査した。

本書報告分であるため、詳細については報告にゆずる。

第11次調査（社団法人中国建設弘済会事務所建設に伴う発掘調査）1999年

調査主体：出雲市教育委員会

調 査 員：片倉愛美

第５次調査区の南側に隣接する場所の調査を実施している。しかし、遺構面の大部分で近世の遺構面は削平されている上、残存している遺構面についても約１／３の範囲で大きく攪乱されている状況であった。

そういった状況の中であったが溝状遺構２、土壙２０、ピット４が検出されている。うちＳＫ０２・０３は遺構内より出土した遺物から弥生時代中期中葉（松本Ⅲ様式）の土壙墓と考えられている。なお、ＳＫ０３からは北部九州の須玖Ⅱ式土器[(2)]に類似する土器の出土がみられた。また、ＳＤ０１はこれら土壙墓のすぐ北側に位置し、土壙墓とそれ以外の遺構を区画する溝の可能性がある。

その他、古墳時代後期（出雲５・６期）[(3)]の須恵器・中世土師器の坏・皿の出土がみられる。

文　献：『社団法人中国建設弘済会事務所建設に伴う天神遺跡発掘調査報告書』2001　社団法人中国建設弘済会・出雲市教育委員会

第12次調査（都市計画道路山陰本線南沿線設置に伴う発掘調査）2000年

調査主体：出雲市教育委員会

調 査 員：高橋智也

第７次調査Ｄ区・第１０次調査Ｄ区の南側に隣接する調査区である。先の２調査で検出した道状遺構や石敷遺構の続きの調査を実施している。また、第７・１０次調査では調査不可能であった下層の遺構面も確認されている。

下層の遺構面では１２～１３世紀と考えられる井戸や土壙を検出した。ＳＫ０７からは馬の顎骨が石の上に置かれており、馬を利用した祭祀土壙の可能性がある。ＳＫ０９についてはその形状より土壙墓の可能性を指摘しているが、遺物がほとんど出土せず実体は不明である。

なお、弥生時代・古墳時代の遺構は検出されていない。

文　献：『都市計画道路山陰本線南沿線設置工事に伴う第１２次天神遺跡発掘調査報告書』2002　出雲市都市計画課・出雲市教育委員会

以上のように天神遺跡は点々とではあるものの、多くの調査が実施されてきた。天神遺跡は出雲平野でも指折りの弥生時代環壕集落と考えられているが、実際のところそれを意味するものは墓域と考えられる土壙墓群が発見されているくらいであり、住居跡など生活そのものを裏付けるものはほとんどないのが実状である。

参考文献

(1) 松本岩雄「７出雲・隠岐地域」(『弥生土器の様式と編年　山陰・山陽編』1992　木耳社)

(2) 小田富士雄「九州」(『弥生土器Ⅰ』) 1983　ニューサイエンス社

(3) 大谷晃二「出雲地域の須恵器の編年と地域色」(『島根考古学会誌　第１１集』1994　島根考古学会)

第１表　天神遺跡　発掘調査・研究　年表

	現地調査	報　告　書	研　究　論　文　等
1971（昭和46）	第１次発掘調査		
1972（昭和47）		『出雲市天神遺跡　調査の記録』島根県出雲市（第１次調査）	
1973（昭和48）			・東森市良「破壊に瀕している低地性遺跡」（『季刊文化財』第20号　島根県教育委員会）
1974（昭和49）			
1975（昭和50）	第２次発掘調査		
1976（昭和51）			
1977（昭和52）		『天神遺跡』島根県出雲市（第２次調査）	
1978（昭和53）	第３次発掘調査		
1979（昭和54）		『古代の出雲を考える１　天神遺跡の諸問題』出雲考古学研究会（第３次調査）	
1980（昭和55）			・東森市良「天神遺跡」（『出雲上塩冶地域を中心とする埋蔵文化財調査報告』　島根県教育委員会）
1981（昭和56）	第４次発掘調査		
1982（昭和57）			
1983（昭和58）			
1984（昭和59）			
1985（昭和60）	第５次発掘調査 （～1986）		
1986（昭和61）	第６次発掘調査	『天神遺跡発掘調査報告書Ⅳ』出雲市教育委員会（第５次調査）	
1987（昭和62）		『塩冶地区遺跡分布調査Ⅱ』出雲市教育委員会（第６次調査）	
1988（昭和63）			・田中義昭・西尾克己「出雲平野における原始・古代集落の分布について」（『山陰地域研究』４ 島根大学山陰地域研究総合センター）
1989（平成元）			
1990（平成2）			
1991（平成3）			
1992（平成4）			
1993（平成5）			
1994（平成6）	第７次発掘調査 第８次発掘調査		
1995（平成7）			・西尾克己・野坂俊之「神西湖周辺の集落遺跡」（『湖陵町誌研究』４　湖陵町教育委員会）
1996（平成8）	第９次発掘調査	『天神遺跡第８次発掘調査報告書』出雲市教育委員会	・田中義昭「中海・宍道湖岸西部域における農耕社会の展開」（『出雲神庭荒神谷遺跡』　島根県教育委員会） ・岸　道三「出雲市天神遺跡出土の四分枝木製品について」（『島根考古学会誌』第１３集　島根考古学会）
1997（平成9）		『出雲市駅付近連続立体交差事業地内　天神遺跡第７次発掘調査報告書』出雲市教育委員会	
1998（平成10）			
1999（平成11）	第10次発掘調査 第11次発掘調査	『出雲市駅付近連続立体交差事業地内　天神遺跡第９次発掘調査報告書』出雲市教育委員会	
2000（平成12）	第12次発掘調査		
2001（平成13）		『社団法人中国建設弘済会事務所設置に伴う天神遺跡発掘調査報告書』出雲市教育委員会（第11次調査）	
2002（平成14）		『市道山陰本線北沿線設置予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書　天神遺跡（第10次発掘調査）』 出雲市教育委員会 『都市計画道路山陰本線南沿線設置予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書　天神遺跡（第12次発掘調査）』 出雲市教育委員会	

Ⅳ　第１０次天神遺跡発掘調査報告

本書で報告する第１０次調査区は第７次調査区の隣接地であり、その調査成果を念頭に置いた上で調査を実施した。なお、遺構番号については第１０次調査のそれに準じることとする。

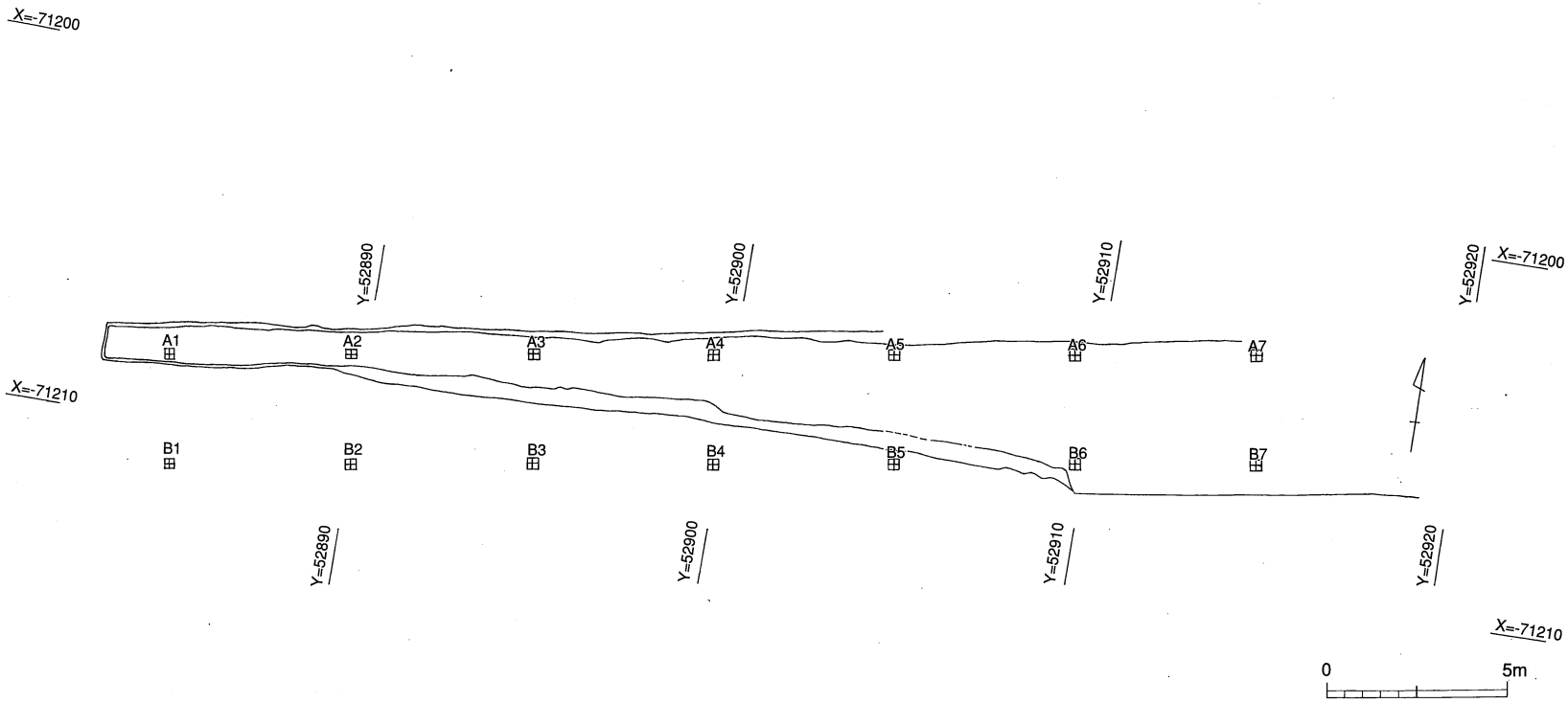
第１０次調査の調査区は、開発事業が道路建設ということもあり幅６ｍ、延長２２０ｍの細長い形状を呈する。しかし、鉄道の近接地という関係で安全を確保するための矢板の設置が必要であったため、実質的な調査地の幅は更に狭くなってしまった。これらの調査区は既設の水路や道路によって４区画に分断されており、これをＡ区～Ｄ区として調査を行った。（第２図）以下、調査区ごとに報告する。

A区

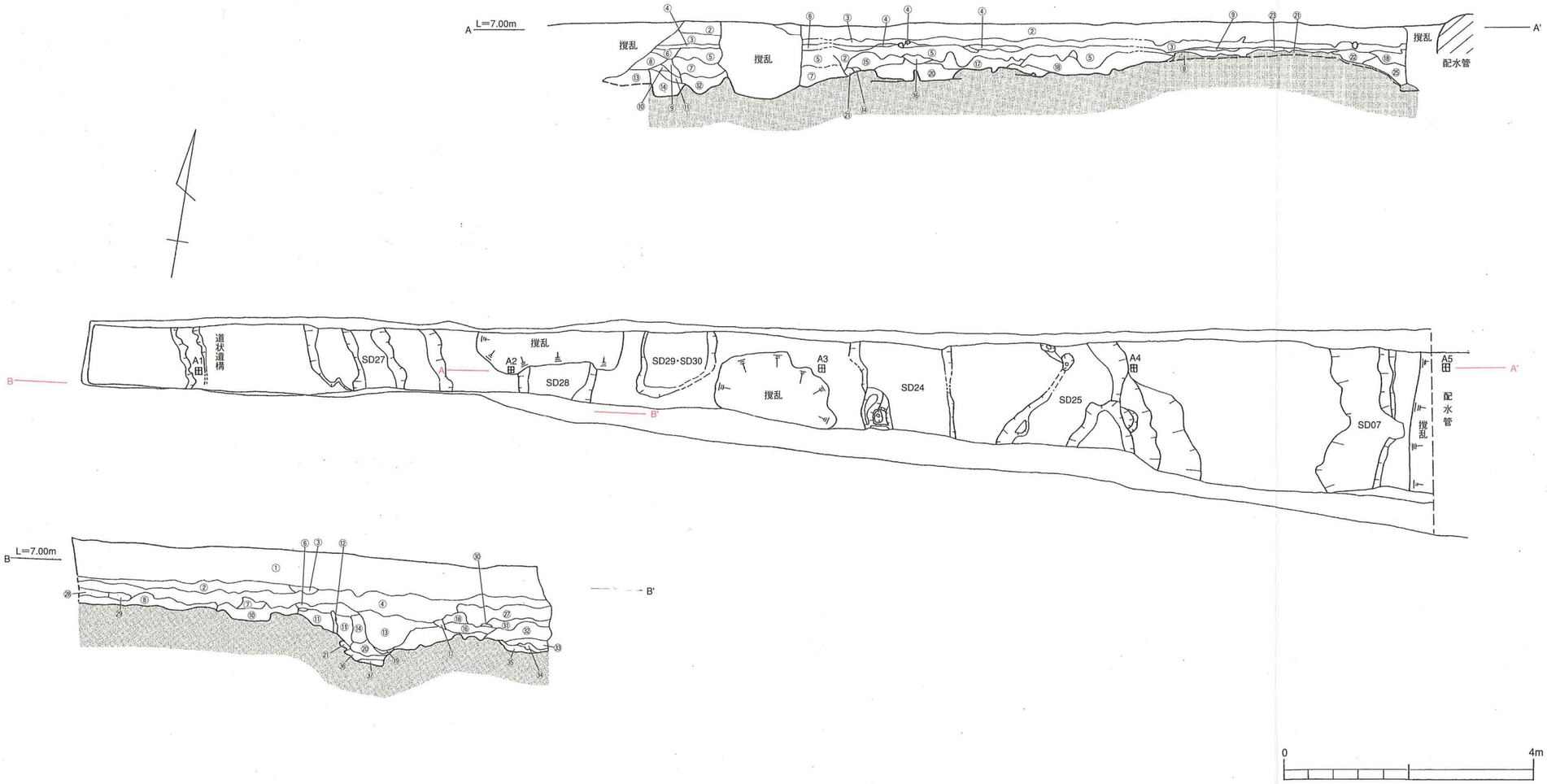
調査区は東端幅６ｍ、延長４０ｍの長細い三角形を呈している。その調査区の形状により、西半分については狭いところで幅１ｍ程度であり、面的に調査を進めることが難しく遺構の性格をとらえるのにかなりの困難を極めた。遺構形状については、第７次調査成果[1]を参考にし、遺構のつながり、時期及び断面形等から推定している。また、調査区の東端から西へ６ｍまでに関しては、攪乱が大きく遺構は残存していなかった。

なお、鉄道敷設時の盛土を約１ｍほど除去すると、遺構面が露出する。第７次調査において多少残存していた包含層についても、今回の調査においてはそのほとんどについては削平されていた。

本来なら遺構面ごとに報告すべきであるが、時期が明確に確認できる遺構が少ないために遺構番号の順で報告する。

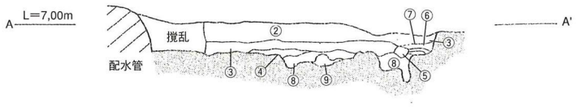


第６図　　Ａ区　基準坑　配置図　1／200

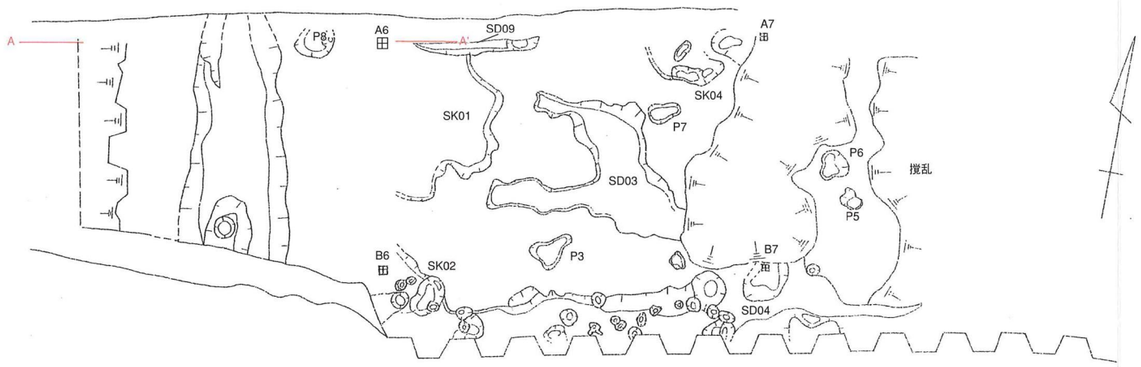


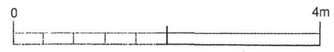
①	10TR 3/4	暗褐色	砂質	鉄道線路敷設の際の盛土	礫 多く含む
②	10YR 3/2	黒褐色	砂質		
③	2.5Y 3/3	暗オリーブ褐色	粘質		
④	10YR 3/3	暗褐色	砂質		
⑤	10YR 3/4	暗褐色	砂質	しまりある	
⑥	⑤と同じだがしまりなし				
⑦	10YR 3/4	暗褐色	砂質	⑩よりも暗い	
⑧	10YR 4/4	褐色	砂質	非常にしまっている	道状遺構?
⑨	2.5Y 4/4	オリーブ褐色	砂	粗い	地山
⑩	10YR 3/4	暗褐色	砂質	遺構埋土	
⑪	10YR 3/3	暗褐色	砂質		
⑫	2.5Y 3/3	暗オリーブ褐色	砂質土		
⑬	10YR 4/2	灰黄褐色	砂質	炭化物含む	
⑭	7.5YR 2/1	黒色	砂質	しまっていない	
⑮	10YR 3/1	黒褐色	シルト		
⑯	10YR 3/2	黒褐色	シルト		
⑰	10YR 4/2	灰黄褐色	砂質		
⑱	10YR 4/4	褐色	シルト		
⑲	10YR 3/2	黒褐色	砂質		
⑳	2.5Y 3/3	暗オリーブ褐色	砂		
㉑	2.5Y 3/3	暗オリーブ褐色	砂質		
㉒	2.5Y 2/1	黒色	砂質		
㉓	2.5Y 3/3～2/2	暗オリーブ褐色	シルト	比較的粗い	遺構埋土?
㉔	2.5Y 3/3	暗オリーブ褐色	砂質		
㉕	2.5Y 3/2	暗褐色	シルト		
㉖	2.5Y 4/3	オリーブ褐色	砂	遺構面	
㉗	10YR 3/3	暗褐色	砂質	よくしまっている	
㉘	10YR 3/4	暗褐色	砂質		
㉙	10YR 5/6	黄褐色	シルト	しまりある	
㉚	10YR 2/2	砂質	非常にしまっている		
㉛	10YR 4/3	にぶい黄褐色	砂質	5mm程度のレキ含む	
㉜	10YR 4/2	灰黄褐色	シルト		
㉝	10YR 4/2	灰黄褐色	砂質	しまりなし	㉜より暗い
㉞	10YR 4/2	灰黄褐色	砂	㊱と同?	
㉟	10YR 3/2	黒褐色	砂質		
㊱	10YR 4/2	灰黄褐色	砂		
㊲	2.5Y 3/2	黒褐色	砂		

第７図　　Ａ区　遺構配置図　（1）　1/80



②10YR	3/2	黒褐色	砂質	
③2.5Y	3/3	暗オリーブ褐色	粘質	
④10YR	3/2～3/3		シルト	遺構埋土
⑤2.5Y	3/2	黒褐色	砂質	撹乱？
⑥10YR	4/4	褐色	シルト	
⑦2.5Y	3/3	暗オリーブ褐色	砂質	
⑧10YR	3/2	黒褐色	シルト	遺構埋土　土器含む
⑨10YR	3/3	暗褐色	シルト	遺構埋土





第８図　　Ａ区　遺構配置図　（2）　1/80

【溝状遺構】

ＳＤ０３　（第９図）

規模・形態

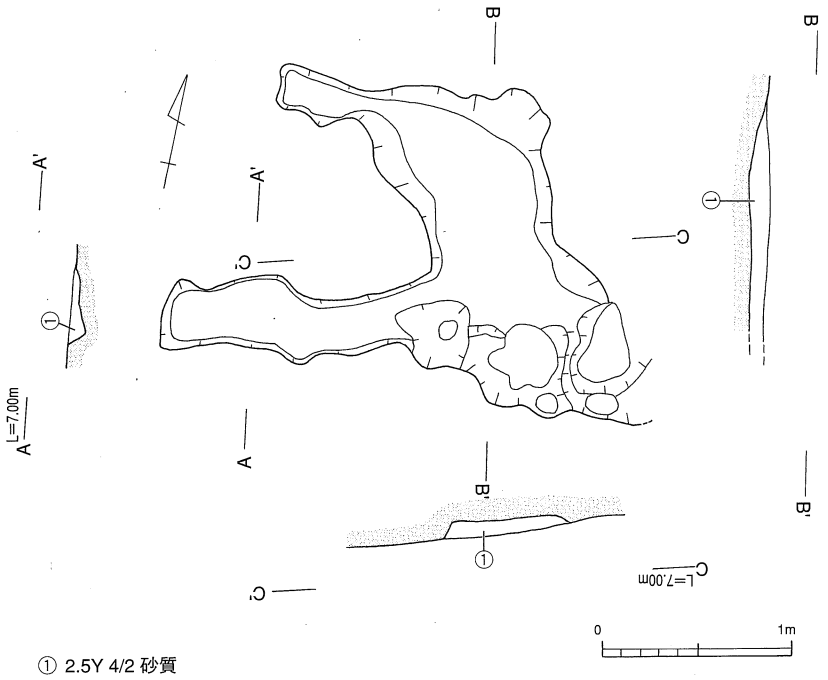
最大幅０．７ｍの「コ」字形を呈する溝状遺構であり、深さは１０cmほどしか残存していなかった。なお、一部をＳＫ０３により切られている。

出土遺物

須恵器、土師器及び緑釉陶器細片が出土しているが、実測に耐えうる遺物はなかった。

遺構の時期・性格

出土遺物が少なく、時期比定できるものがなかったことや遺構の残存状況が悪かったこともあり時期・性格ともに不明である。



第９図　SD03　遺構実測図　1/40

ＳＤ０４　（第１０図）

規模・形態

調査区の南側に位置する溝状遺構であり、深い場所では０．３ｍの深さを持つ。出土遺物も少なく性格は不明である。

出土遺物　（第１１図）

弥生土器

甕（1）

複合口縁の拡張部であり、その形態から弥生時代終末（草田５期）[2] に当たると考えられる。

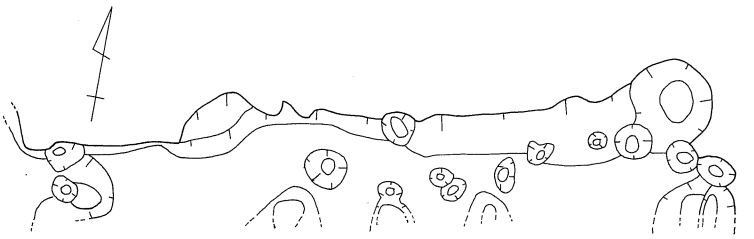
底部（2）

弥生土器と考えられるが、小片であるため時期ははっきりしない。

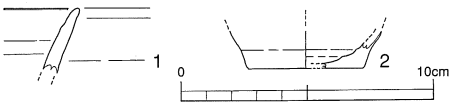
その他、須恵器の細片が出土している。

遺構の時期

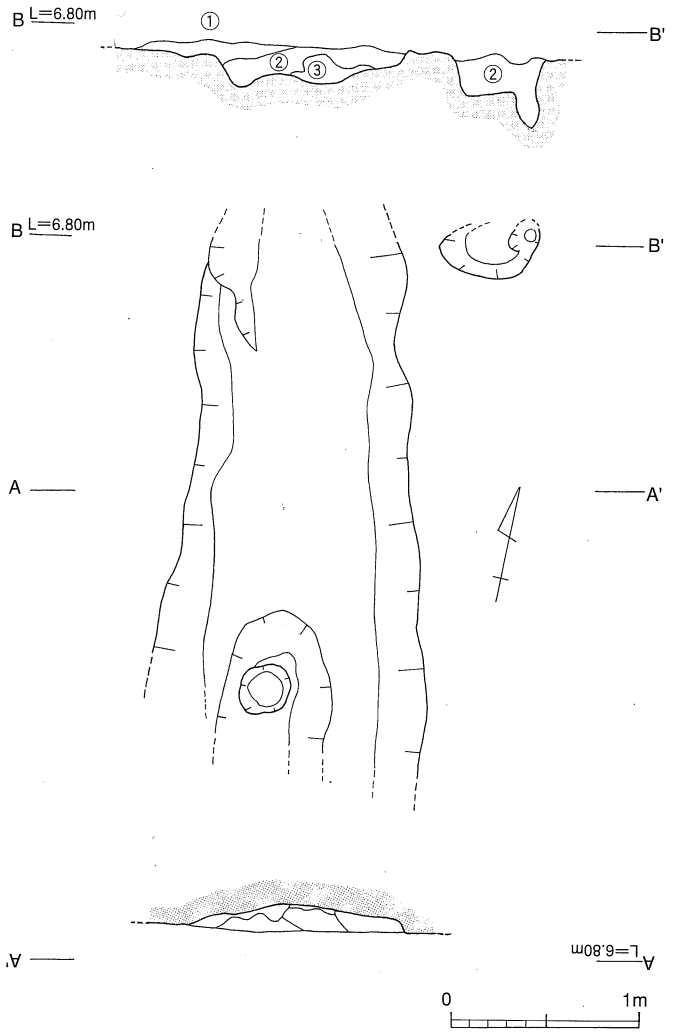
弥生土器が出土しているものの須恵器の混入がみられ、その上、いずれもが小細片であるため、遺構の時期を特定することはできない。



第10図　SD04　遺構実測図　1/40

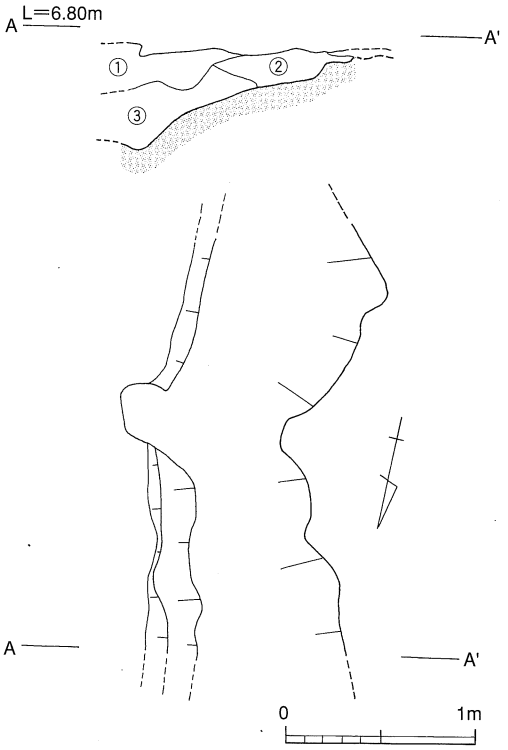


第11図　SD04　出土遺物　1/3



①10YR 3/2～3/3 シルト 遺構埋土
②10YR 3/2 黒褐色 シルト 遺構埋土 土器含む
③10YR 3/3 暗褐色 シルト

第12図 SD06 遺構実測図 1/40



①2.5Y 3/3 暗オリーブ褐色 砂質
②2.5Y 2/1 黒色 砂質
③2.5Y 3/2 暗褐色 シルト

第14図 SD07 遺構実測図 1/40

ＳＤ０６ （第１２図）

規模・形態

幅１．４m、深さ１５cmの溝状遺構であり、断面形は不整形な舟底形を呈している。遺構底の南側にはＰ９が存在している。第７次調査Ａ区ＳＤ１４につながると推定できる。

出土遺物 （第１３図）

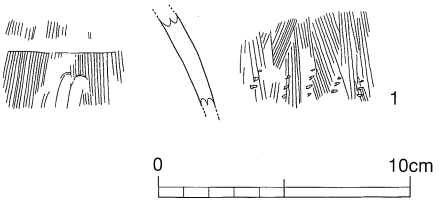
弥生土器

甕または壺（１）

１は胴部である。外面のハケ目後に１単位４点以上の列点文を施す。弥生時代中期（松本Ⅲ～Ⅳ様式）[3] であると考えられる。

その他、同様の時期と考えられる弥生土器の細片が出土したが、図化できなかった。

しかし、第７次調査Ａ区ＳＤ１４では土師器片がみられ、これらの弥生土器は混入品であると考えられる。



第13図 SD06 出土遺物 1/3

遺構の時期

遺物の出土量が希薄であるため、時期比定は困難であるが、第７次調査ＳＤ１４の出土遺物等を考え合わせると、古墳時代から奈良時代までの遺構であると考えられる。

ＳＤ０７ （第１４図）

規模・形態

幅１．４m以上、深さ０．５mを測る。現代の排水用土管に攪乱され半分ほどは残っていないが、遺構の底が確認できることからみて幅は２．８m弱はあるものと推定できる。形態としては肩から急に落ち込み、底付近でもう一度５cmほど落ち込んでおり、断面形は大きくみて「Ｖ」字を呈すると考えられる。

この遺構は、第７次調査Ａ区ＳＤ１５につながると推定できる。

出土遺物

弥生土器の細片が出土したが、実測不可能であった。

遺構の時期

今回の出土遺物の中には時期を決定できるものがなかったが、第７次調査ＳＤ１５が弥生時代中期（松本Ⅲ～Ⅳ様式）であることから、当該時期であると推定できる。

ＳＤ０８　（第１５図）

規模・形態

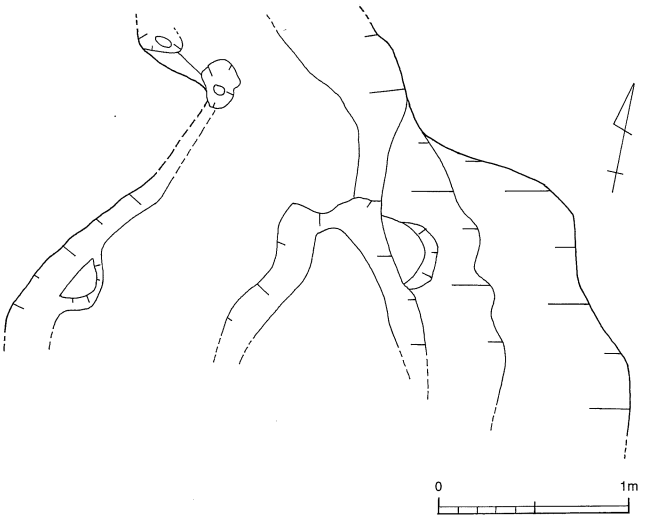
最大幅２．２ｍ、最小幅１．０ｍ、深さ３５㎝の不整形な形状をしている溝状遺構である

出土遺物　（第１６図）

弥生土器

甕（１）

弥生時代中期（松本Ⅲ－１様式）と考えられるが、他の遺物のほとんどが古墳時代後期に当たることから、混入品である可能性が強い。

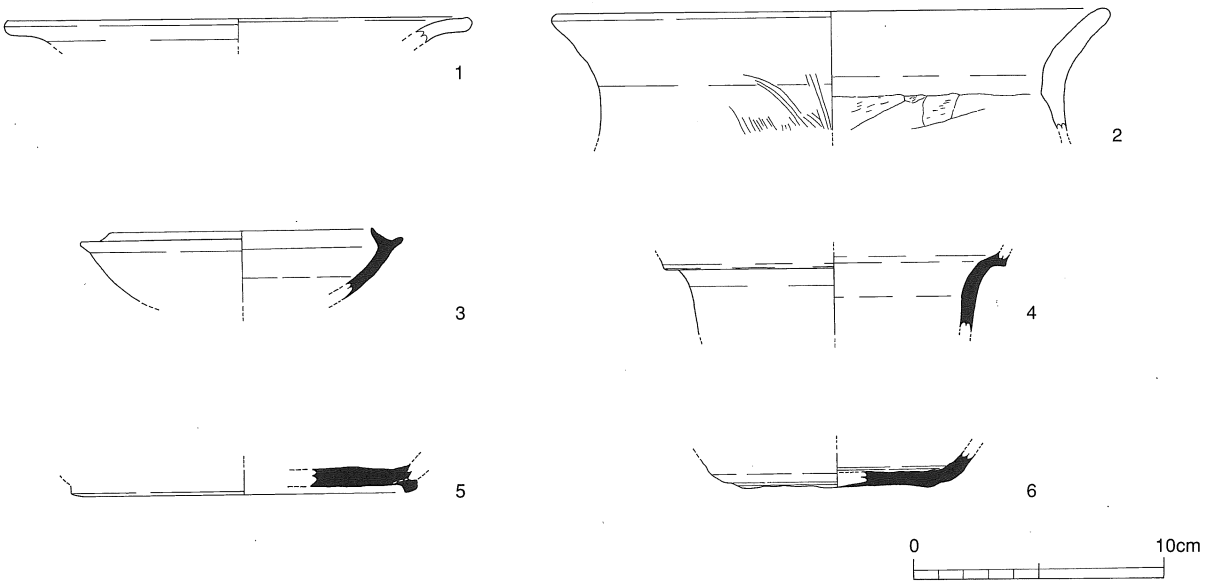


第15図　　SD08　遺構実測図　1/40

土師器

甕（２）

外面頸部以下にハケ目、内面頸部以下にヘラケズリを施し、古墳時代後期のものと考えられる。



第16図　　SD08　出土遺物　1/3

須恵器

坏身（３・５・６）

３は古墳時代後期（出雲４期）[4]、５・６は平安時代（９～１０世紀）[5]のものと考えられる。

壺（４）

口縁部のみの残存であった。

その他、土師器及び須恵器の細片が出土した。

遺構の時期

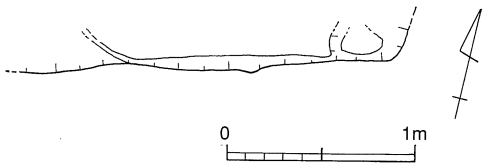
第１６図１が混入品であると仮定すれば古墳時代後期～平安時代と考えられる。

ＳＤ０８と後述するＳＤ２４は土層堆積状況や両遺構間が周辺に比べ若干低いことなどを考えると同一遺構である可能性も考えられる。しかし、出土遺物の少なさとも相まってそれを明確に結論づけるには資料が乏しいために別の遺構として扱った。

ＳＸ０３　（第１７図）

規模・形態

調査区内ではわずかに認められるのみであり、遺構のほとんどが調査区外へと延びているようである。そのため、遺構の形態は不明である。



第17図　　SX03　遺構実測図

出土遺物　（第１８図）

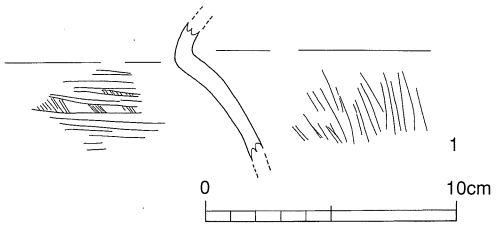
弥生土器

甕（１）

外面はヘラミガキ、内面はハケ目後ヘラミガキで調整し、弥生時代中期（松本Ⅲ様式？）と考えられる。

遺構の時期

遺物の出土が１点のみであるため時期を特定するには根拠が貧弱であるが、出土遺物から弥生時代中期（松本Ⅲ様式？）の可能性が考えられる。



第18図　　SX03　出土遺物　1/3

ＳＤ２４　（第２０図）

規模・形態

幅１．５～１．７ｍ、深さ０．２ｍを測る溝状遺構である。

出土遺物　（第１９図）

弥生土器

壺（１）

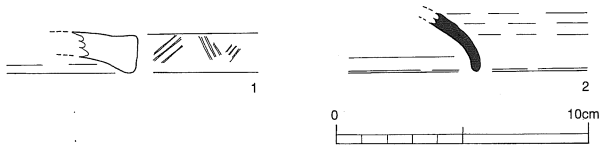
広口壺の口縁部である。口縁端部平担面には１単位３条の山形文を施している。弥生時代中期（松本Ⅲ－１様式）の様相を示す。

須恵器

坏蓋（2）

古墳時代後期（出雲５～６期）と考えられる。

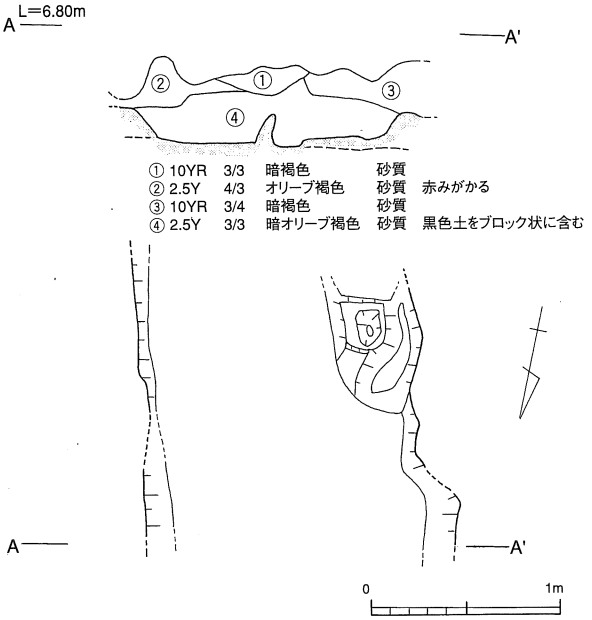
その他、弥生土器及び須恵器の細片が出土している。



第19図　　SD24　出土遺物　1/3

遺構の時期

遺構埋土には弥生土器及び須恵器が混在しており、遺構の時期を特定することは困難である。あえて時期比定するならば下限が古墳時代後期としかいうことができない。



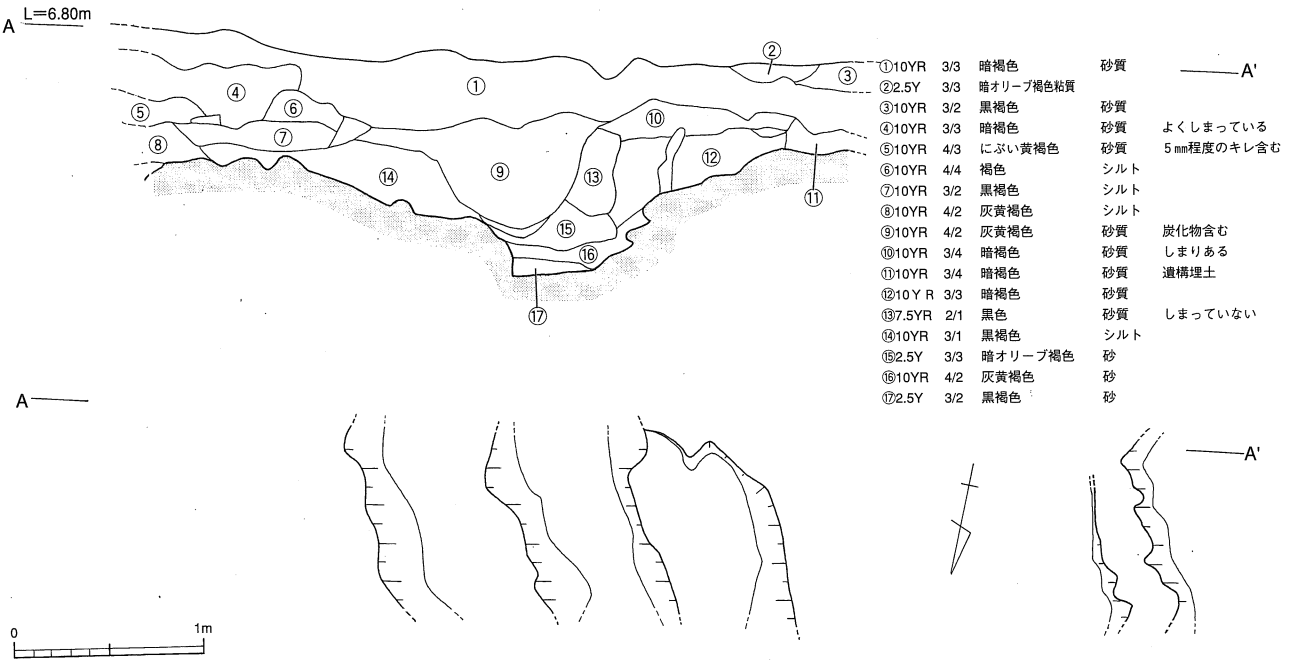
第20図　　SD24　遺構実測図　1/40

ＳＤ２７　（第２１図）

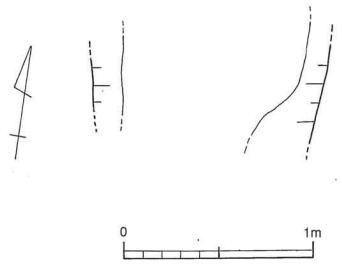
規模・形態

幅２．１ｍ、深さ０．７ｍのしっかりとした溝状遺構である。肩から急に落ち始め、中心よりも若干東でもう１段２０cmほど深くなる、「Ｖ」字に近い遺構断面を呈する。最も底には砂層の堆積がみられ、水の流れがあったことをうかがわせる。

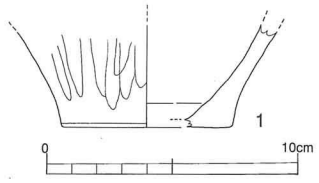
この遺構は第７次調査Ａ区ＳＤ０７に対応するものと考えられる。



第21図　　SD27　遺構実測図　1/40



第22図　SD28　遺構実測図　1/40



第23図　SD28　出土遺物　1/3

ＳＤ２８　（第２２図）

規模・形態

その方向や規模、遺構形態から、第７次調査Ａ区ＳＤ０９に対応しているものと考えられる

出土遺物　（第２３図）

弥生土器

底部（１）

内面はヘラケズリ、外面はヘラミガキを施す。弥生時代中期（松本Ⅲ～Ⅳ様式）と考えられる。

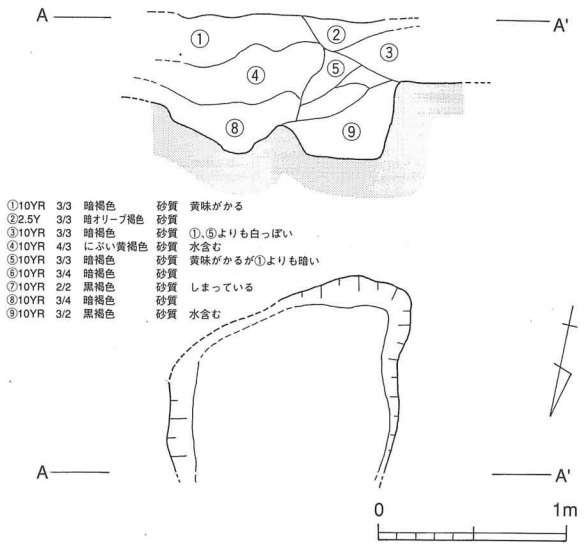
遺構の時期

出土遺物が１点のみであり、時期を特定するには根拠が貧弱であるが、遺物の時期を当てるならば弥生時代中期（松本Ⅲ～Ⅳ様式）と考えられる。

ＳＤ２９・３０　（第２４図）

形態・規模

この２遺構は遺構検出の際に掘りすぎてしまったため、平面的には遺構の底部分のみの検出となってしまい、土壙状での検出となってしまっている。しかし、土層堆積状況で確認すると２条の溝と考えられるためにＳＤ２９・３０とした。



第24図　SD29・30　遺構実測図　1/40

土層堆積での確認ではＳＤ２９は幅０．６ｍ、深さ０．２ｍを測り、ＳＤ３は幅０．６ｍ、深さ０．４ｍを測る。

土層堆積状況　（第２４図）

土層堆積状況からは両遺構の切り合い関係が認められた。その状況からＳＤ２９が新しく、ＳＤ３０が古いことが判明した。

位置や切り合い関係からＳＤ２９及び３０の溝状遺構はそれぞれ第７次調査Ａ区ＳＤ１０及び１１に当たるものと想定できる。第７次調査と第１０次調査ではその位置関係において東西が逆転しているが、第７次調査の報告をみると北に行くほど重なり度合いが増しているために、第７次調査区北端から第１０次調査南端までの約３ｍで遺構が交差しているものと想定した。

ＳＤ３４　（第７図）

規模・形態

調査区の狭さから面的に検出できず、土層断面によって確認した遺構であり、０．９ｍ、深さ０．５ｍの溝状遺構であると考えられる。ＳＤ２７の上に位置し、第７次調査Ａ区ＳＤ０８に対応する可能性がある。

出土遺物

出土遺物は認められなかった。

【土壙状遺構】

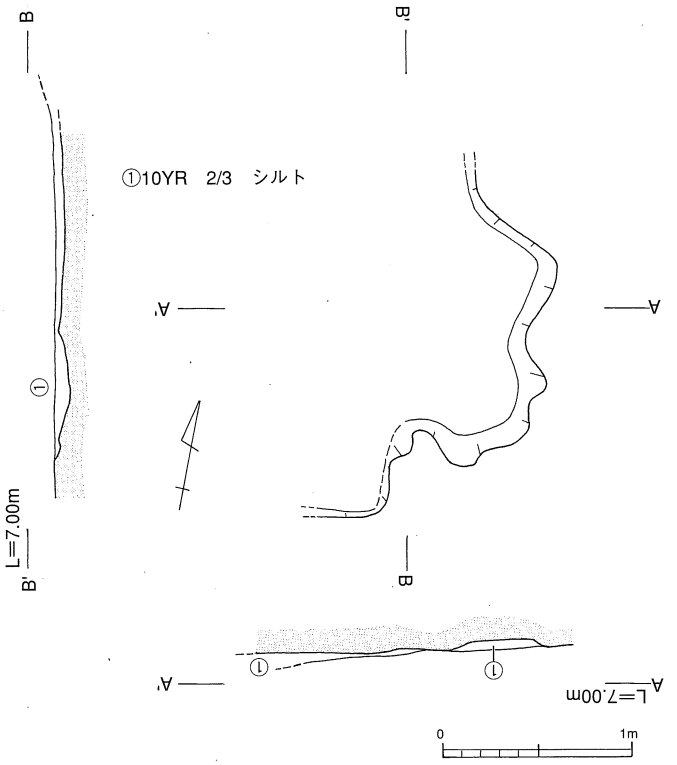
ＳＫ０１　（第２５図）

規模・形態

南北１．６ｍ以上、東西１．３ｍ以上、深さ７cmを測る、非常に浅い落ち込みである。遺構の一部はサブトレンチにかかっており、遺構の全容はわからない。遺構の時期については決定の根拠となるデータがないため、言及できない。

出土遺物

土師質土器及び陶器の細片が出土した。

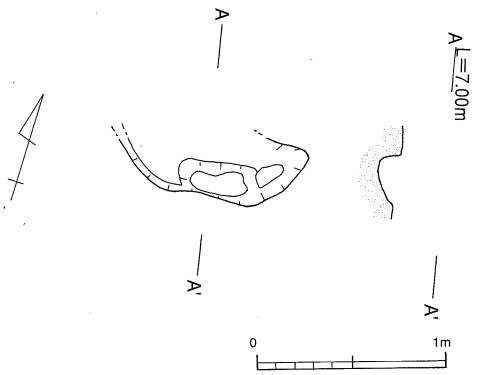


第25図　SK01　遺構実測図　1/40

ＳＫ０４　（第２６図）

規模・形態

東西１．０ｍ、南北０．４ｍ、深さ１０cmの土壙である。一部はサブトレンチに切られている。



第26図　SK04　遺構実測図　1/40

【ピット】

Ｐ８　（第８図）

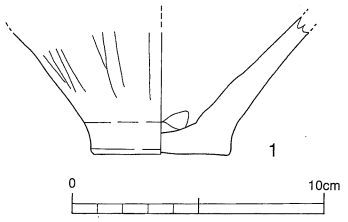
規模・形態

東西０．６ｍ、南北０．２ｍ以上、深さ３５cmのピットである。遺構東端は径１５cmの掘り込みがあり、２段掘りとなっている。

Ｐ９　（第８図）

規模・形態

東西０．６ｍ、南北０．７ｍ以上の楕円形を呈するピットである。遺構南側は調査区外に延びている。遺構は２段掘りとなっており、２段目は径０．３ｍの円形を呈する。



第27図　P9　出土遺物　1/3

出土遺物　（第２７図）

弥生土器

底部（1）

外面はヘラミガキ、内面はヘラケズリで底部にユビオサエを施している。弥生時代中期（松本Ⅲ～Ⅳ様式）と考えられる。

遺構の時期

遺物が１点しか出土していないために遺構の時期を決定する根拠に乏しいが、遺物の時期を当てるなら弥生時代中期（松本Ⅲ～Ⅳ様式）と考えられる。

遺構の性格

その形状より建物跡の柱穴である可能性がある。しかし、その他に柱穴と考えられるものはＰ８しかなく、建物跡の一角であるのかは判断できない

【道状遺構】　（第７図）

規模・形態

幅０．４ｍの踏み固められたような非常に堅い層が検出できた。同様の遺構は第７次調査Ａ区でも検出しているが、今回のものよりも幅が広く道状遺構と判断するに足る遺構である。第７次調査で検出された道状遺構を直線的に延ばすと今回検出された場所よりも５ｍほど東に当たり、この場所には堅くしまった層は検出できていない。

今回検出した堅い層と第７次調査で検出した道状遺構が同遺構であると仮定すれば、道状遺構は第７次調査区外で一度５ｍほど西進し、また細くなりつつ南北へ延びていくと理解するしかない。また、今回検出した堅い層は幅０．４ｍしかなく、道として利用したのかどうかも定かではなく、果たして第７次調査の道状遺構と同一遺構なのか、更には道としての機能があったのかについては判断しかねる。

遺構外出土遺物　（第２８図）

土師器

甕（１・２）

１は口縁・頸部、２は頸部のみの残存である。両方とも外面は横ナデ、内面はヘラケズリが施されるが、２の外面にはわずかにハケ目の痕跡が認められる。

皿（３）

非常に厚い皿である。どっしりとした底部より逆「ハ」の字に口縁部が立ち上がっていくが、厚みは均等であり、そのまま端部で丸く収めている。外面はハケ目、内面はナデで調整される。

坏（４～６）

４～６は坏の底部である。

４・５の底面には糸切り痕が認められるが、４は丁寧に作られている一方、５は粗雑なつくりである。

6は高台がつくタイプの底部である。

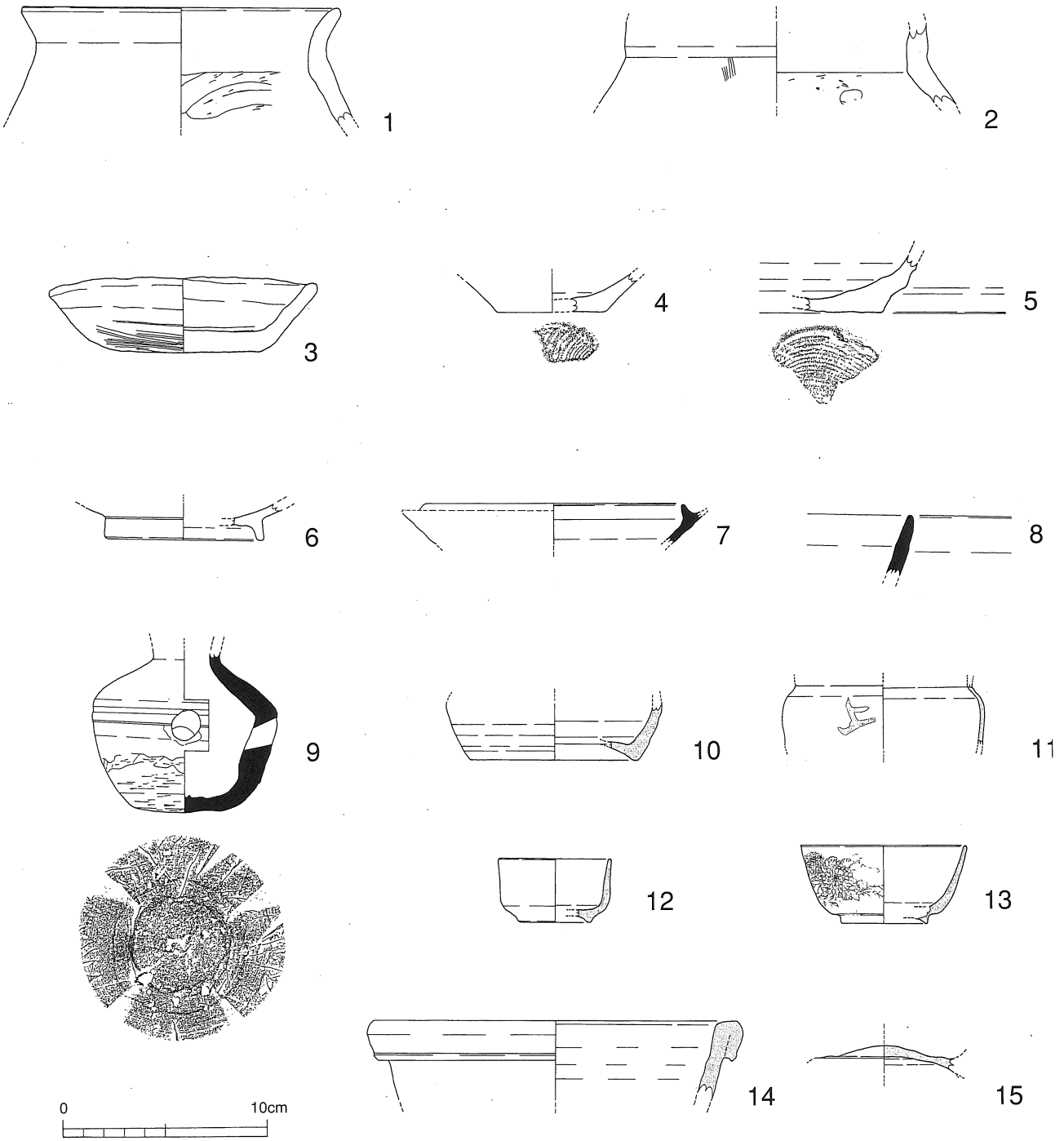
須恵器

坏身（7）

古墳時代終末期（出雲6期）の特徴を持つ。

平瓶、提瓶もしくは長頸壺（8）

口縁部しか残存していないために器種は明確に判明しない。古墳時代後期に当たると思われる。



第28図　遺構外　出土遺物　1/3

瑳 胴部（9）

胴部中位に１条の沈線を巡らし、下半部は丁寧にヘラケズリを施す。また、底部は多少丸みが残るものの平底にする。古墳時代終末期（出雲６期～）の特徴を示す。

陶磁器

陶器（１０～１２・１４・１５）

１０・１１は土瓶と考えられる。１０は底部であり、釉薬は施されていない。１１は胴部であるが灰白色の釉薬が施されており、「上」の字が書かれている。

１２は猪口である。高台底部を除いた全面に淡緑黄色の釉薬を施している。

１４は鉢である。口縁端部は外面に折り曲げて肥厚させている。

１５は底部であるが、残存部分が少なく器種は不明である。

磁器（１３）

１３は碗である。体部外面には藍色の顔料で菊が染め付けられている。

攪乱土内出土遺物　（第２９図）

弥生土器

甕（1）

残存が少ないが甕の底部であると考えられる。内外面ともハケ目が施されているが頸部内面には指頭圧痕も残されている。弥生時代中期（松本Ⅲ様式）のものであると考えられる。

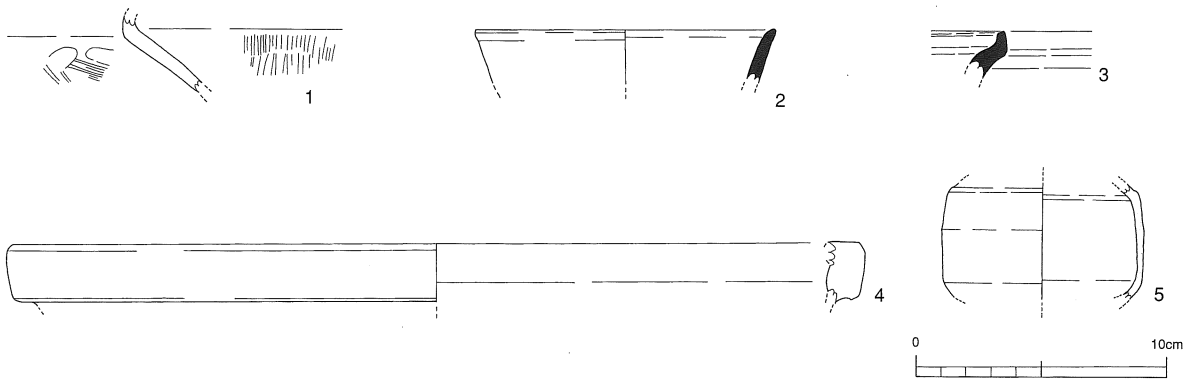
須恵器

口縁部（２・３）

その形態より古墳時代後期のものと考えられるが、口縁端部の一部しか残存しておらず、器種ははっきりわからない。

陶器（４・５）

４は甕の口縁部、５は土瓶の体部と考えられるが、いずれも小片のため明確な時期は不明である。



第29図　　攪乱土内　出土遺物　1/3

小結

この調査区の調査に当たっては第７次調査成果との関連づけを主眼に置いてきたが、調査区の狭さ故に遺構の性格を把握するのに非常に苦慮した。ここでは小結として、遺構のつながりとその問題点について若干ふれておきたい。

遺構のつながりの可能性は本文に記載したところであるが、各遺構の形状等を手がかりとして指摘したにすぎず、明確につながると考えられるものは非常に少ない。また、西側に行くほど第７次調査地からは離れていくために、更に同一遺構と考える根拠が乏しくなっている。東側も近代の攪乱が深くまで及んでいたために、遺構が非常に浅い状態での検出となってしまったことも、それに追い打ちをかける結果となった。

○第７次調査大溝２とのつながり

ＳＤ０８・２５が同一遺構である可能性は先に述べたが、そうであると仮定すれば、第７次調査時に検出されている大溝２につながる遺構の可能性がある。問題点として、これらの検出位置が大溝２を直線的に延長した場所よりも東に位置していることが挙げられる。そのため、大溝２とＳＤ０８・２５が同一遺構とするには、大溝２が調査区外から急に東側へと曲がっているという仮定のもとでしか論ずることができないため、積極的に同一遺構であると言うことができない。

そのため、大溝２は今回の掘削停止面以下に存在している可能性も否定できないが、調査区の狭さと掘削深度を考慮すると、作業の安全上、今回調査した深さが限界であり、掘削停止面で砂層を検出したためにそれ以下については調査を実施していない。

参考文献

(1) 岸　道三『出雲市駅付近連続立体交差事業地内　天神遺跡第７次発掘調査報告書』1997　島根県出雲土木建築事務所・出雲市教育委員会

(2) 赤澤秀則『講武地区県営圃場整備事業発掘調査報告書５　南講武草田遺跡』1992　鹿島町教育委員会

(3) 松本岩雄「出雲・隠岐」(『弥生土器の様式と編年　山陰・山陽編』1992　木耳社)

(4) 大谷晃二「出雲地域の須恵器の編年と地域色」(『島根考古学会誌　第１１集』1994　島根考古学会)

(5) 柳浦俊一「出雲地方における歴史時代須恵器の編年試論」(『松江考古　３』) 1980　松江考古学会

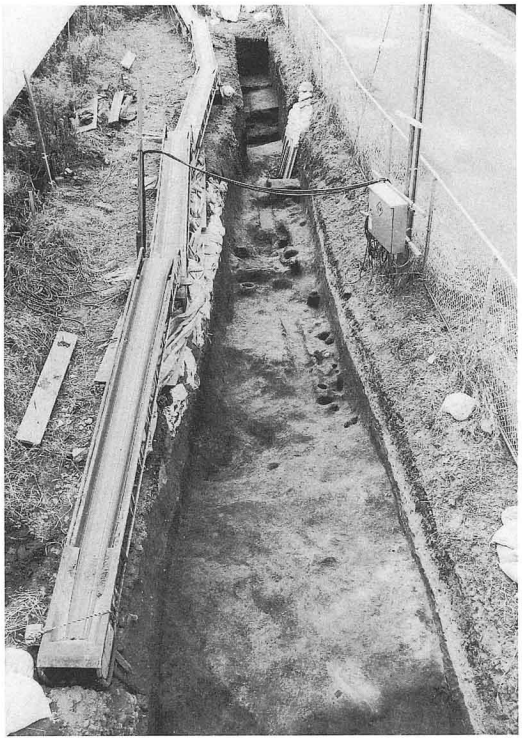
A区

挿図番号	出土地点	器種	法量（cm）			手法の特徴	色調	胎土	焼成	備考
			口径	底径	器高					
11-1	SD 04	弥生土器 甕？	－	－	(2.6)	内面：横ナデ 外面：横ナデ	内外面：灰白色	1.5mm以下の 砂を含む	良好	弥生時代終末 （草田５期？）
11-2	SD 04	弥生土器 底部	－	(4.5)	(1.6)	内面：横ナデ 外面：横ナデ 底部：ナデ？	内外面：にぶい黄橙色	１mm以下の 砂粒含む	良好	外面一部にスス付着
13-1	SD 06	弥生土器 胴部	－	－	(3.8)	内面：ハケ目 ヘラミガキ 外面：ハケ目	内面：灰白色 外面：浅黄橙色	密	良好	弥生時代中期 （松本Ⅲ～Ⅳ） ４点１単位の列点文が施される
16-1	SD08	弥生土器 甕	(17.6)	－	(1.0)	内面：横ナデ 外面：横ナデ	内外面：にぶい橙色	0.5mm以下の 細粒含む	良好	弥生時代中期 （松本Ⅲ－１）
16-2	SD08	土師器 甕	(22.2)	－	(4.8)	内面：ヘラケズリ 横ナデ 外面：横ナデ ハケ目	内外面：にぶい黄橙色	１mm以下の 砂粒多く含む	良好	古墳時代後期
16-3	SD08	須恵器 坏身	(10.4)	－	(2.8)	内面：横ナデ 外面：横ナデ	内外面：灰色	１mm以下の 砂粒若干含む	良好	古墳時代後期 （出雲４期）
16-4	SD08	須恵器 壺	残存 最大径 (13.6)	－	(3.1)	内面：横ナデ 外面：横ナデ	内面：灰色 外面：暗灰色	１mm以下の 砂粒やや含む	良好	古墳時代後期？ 内面に灰をかぶる
16-5	SD08	須恵器 皿or坏	－	(7.2)	(1.4)	内面：横ナデ ナデ 外面：横ナデ 底部：糸切り	内外面：灰色	1.5mm以下の 砂を若干含む	良好	平安時代 （９～１０世紀）
16-6	SD08	須恵器 高台付坏	－	(12.8)	(1.1)	内面：ナデ 底部：糸切り 後ナデ	内外面：青灰色	１mm以下の 砂粒多く含む	良好	平安時代 （９～１０世紀）
18-1	SX03	弥生土器 頸・肩部	－	－	(5.6)	内面：横ナデ ハケ目 後ヘラミガキ 外面：ヘラミガキ	内面：灰白色 外面：褐灰色	0.5mm以下の 細粒多く含む	やや不良	弥生時代中期 （松本Ⅲ？） 外面に黒斑
19-1	SD 24	弥生土器 広口壺	－	－	(1.7)	内面：横ナデ 外面：横ナデ	内面：浅黄橙色 外面：にぶい黄橙色	１mm以下の 砂粒多く含む	やや良好	弥生時代中期 （松本Ⅲ－１） １単位３条の山形文
19-2	SD 24	須恵器 坏蓋	－	－	(2.3)	内面：横ナデ 外面：横ナデ	内外面：灰色	0.5mm以下の 細粒若干含む	良好	古墳時代後期～終末 （出雲５～６期）
23-1	SD 28	弥生土器 底部	－	(7.4)	(4.1)	内面：ヘラケズリ 外面：ヘラミガキ 底部：ナデ	内面：褐灰色 外面：灰黄褐色	１mm以下の 砂粒多く含む	良好	弥生時代中期 （松本Ⅲ～Ⅳ）
27-1	P 09	弥生土器 底部	－	(5.4)	(5.0)	内面：ヘラケズリ？ ユビオサエ 外面：ヘラミガキ 底部：ナデ	内外面：暗褐色	１mm程度の 砂粒若干含む	良好	弥生時代中期 （松本Ⅲ～Ⅳ）
28-1	遺構外	土師器 甕	(15.4)	－	(5.8)	内面：横ナデ ヘラケズリ 外面：横ナデ	内外面：にぶい黄褐色	１mm以下の 砂粒多く含む	良好	
28-2	遺構外	土師器 甕	頸部径 (14.6)	－	(4.0)	内面：横ナデ ヘラケズリ 外面：横ナデ ハケ目	内外面：明赤褐色	１mm以下の 砂粒多く含む	良好	傾きに不安あり
28-3	遺構外	土師器 皿	13.1	7.0	3.7	内面：ナデ 外面：ハケ目	内外面：明赤褐色 橙色	２mm以下の 砂を含む	良好	丹彩
28-4	遺構外	土師器 坏	－	(5.4)	(1.9)	内面：ナデ 外面：横ナデ 底部：糸切り	内外面：にぶい橙色	0.5mm以下の 細粒多く含む	良好	

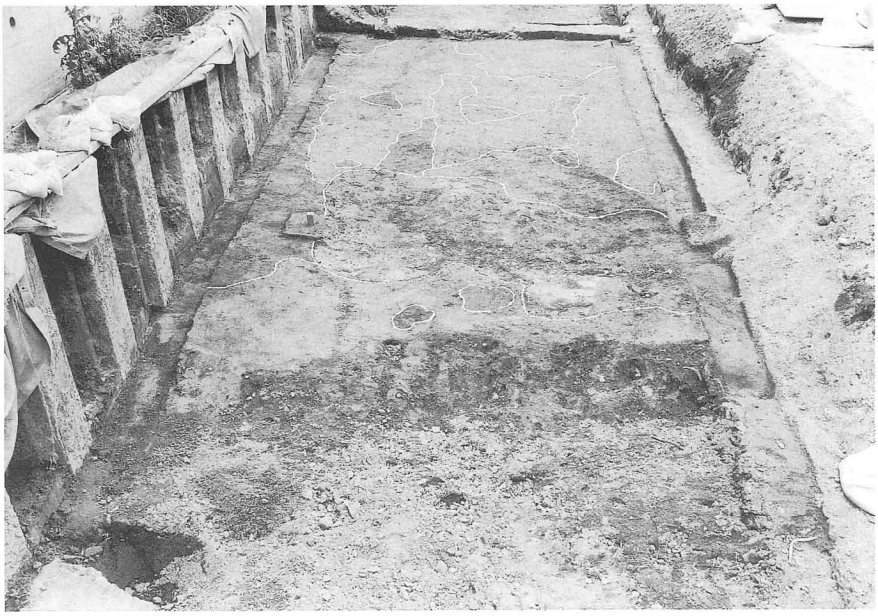
挿図番号	出土地点	器種	法量（cm）			手法の特徴	色調	胎土	焼成	備考
			口径	底径	器高					
28-5	遺構外	土師器 坏	－	－	2.8	内面：横ナデ 外面：横ナデ 底部：糸切り	内外面：にぶい黄橙色	0.5mm以下の細粒若干含む	やや不良	造りが粗雑である 外面にスス付着 内面に黒斑
28-6	遺構外	土師器 高台付坏	－	(7.8)	(1.6)	内面：横ナデ 外面：横ナデ	内外面：灰白色	１mm以下の砂粒わずかに含む	良好	
28-7	遺構外	須恵器 坏身	(12.5)	－	(2.0)	内面：横ナデ 外面：横ナデ	内外面：灰色	１mm以下の砂粒若干含む	良好	古墳時代後期 （出雲６期）
28-8	遺構外	須恵器 壺	－	－	(2.9)	内面：横ナデ 外面：横ナデ	内外面：黄灰色	0.5mm以下の細粒わずかに含む	良好	古墳時代後期 灰をかぶり一部釉化 口縁部のみ
28-9	遺構外	須恵器	－	(4.6)	(7.9)	内面：横ナデ 外面：横ナデ ヘラケズリ	内外面：青灰色	１mm以下の砂粒若干含む	良好	古墳時代終末期 （出雲６期～） 胴部中位に沈線 外面に灰をかぶる
28-10	遺構外	陶器 土瓶？	－	(8.2)	(2.8)	内面：横ナデ 外面：横ナデ	内面：灰黄色 外面：にぶい橙色	0.5mm以下の細粒含む	良好	
28-11	遺構外	陶器 土瓶？	－	－	(3.0)	内面：横ナデ 外面：施釉	内面：浅黄橙色 外面：灰白色		良好	体部上位に「上」と書かれている
28-12	遺構外	陶器 猪口	(5.6)	(3.1)	3.6	内面：施釉 外面：施釉	内外面：淡緑黄色	きわめて密	良好	底部は施釉しない
28-13	遺構外	磁器 碗	(8.1)	(4.2)	3.8	内面				
28-14	遺構外	陶器 鉢	(18.4)	－	(3.9)	内面：横ナデ 外面：横ナデ	内外面：にぶい黄橙色	１mm以下の砂粒多く含む	良好	口縁端部は折曲げた後整形
28-15	遺構外	陶器 底部	－	－	(1.3)	内面：横ナデ 外面：横ナデ	内面：にぶい黄色 外面：灰白色	１mm以下の砂粒を含む	良好	
29-1	攪乱土	弥生土器 甕	－	－	(3.0)	内面：横ナデ ハケ目 外面：横ナデ ハケ目	内外面：にぶい黄橙色	0.5mm以下の細粒多く含む	良好	弥生時代中期 （松本Ⅲ～Ⅳ） 内面に指頭圧痕
29-2	攪乱土	須恵器 壺	(11.9)	－	(2.2)	内面：横ナデ 外面：横ナデ	内面：黄灰色 外面：黒灰色	１mm以下の砂粒わずかに含む	良好	古墳時代後期 外面に自然釉 口縁部のみ
29-3	攪乱土	須恵器 口縁部	－	－	(1.9)	内面：横ナデ 外面：横ナデ	内外面：灰黄色	１mm以下の砂粒含む	良好	
29-4	攪乱土	陶器 甕 or 鉢	(34.2)	－	(2.4)	内面：横ナデ 外面：横ナデ	内外面：灰色	0.5mm以下の細粒多く含む	良好	
29-5	攪乱土	陶器 土瓶？	－	－	(8.1)	内面：横ナデ 外面：横ナデ	内外面：黄灰色	１mm以下の砂粒を含む	良好	

調　査　前

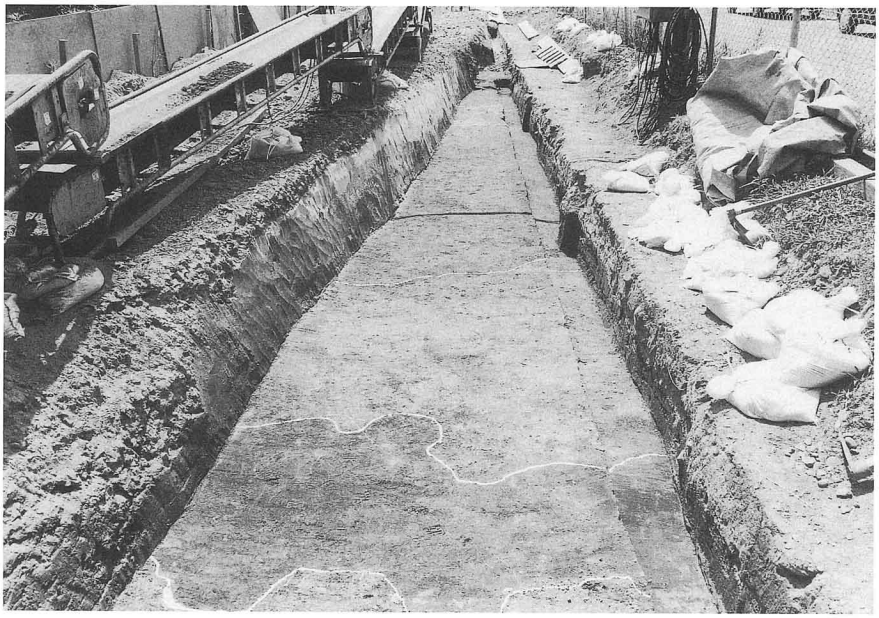
1Gr～5Gr　完掘状況



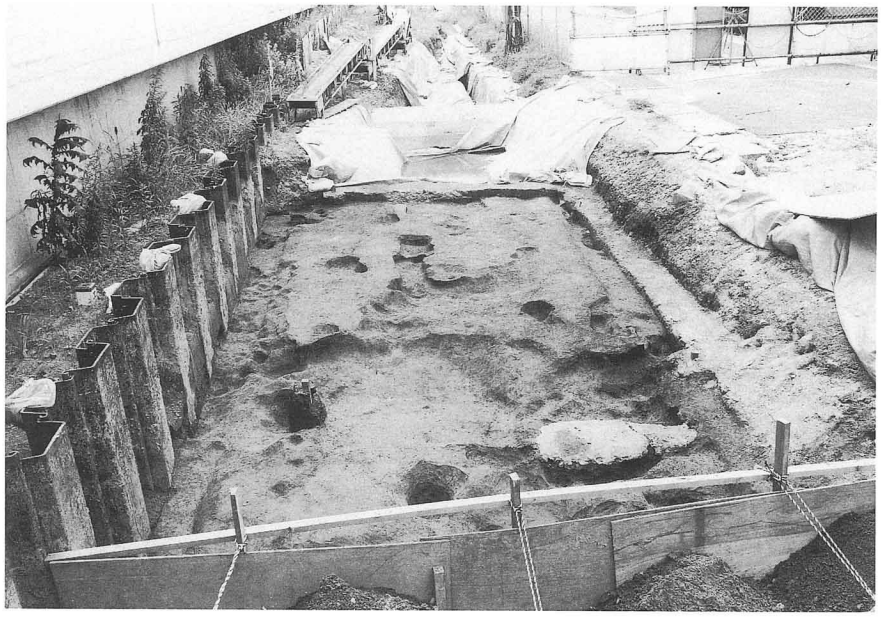
1Gr～5Gr　遺構検出状況



図版　2



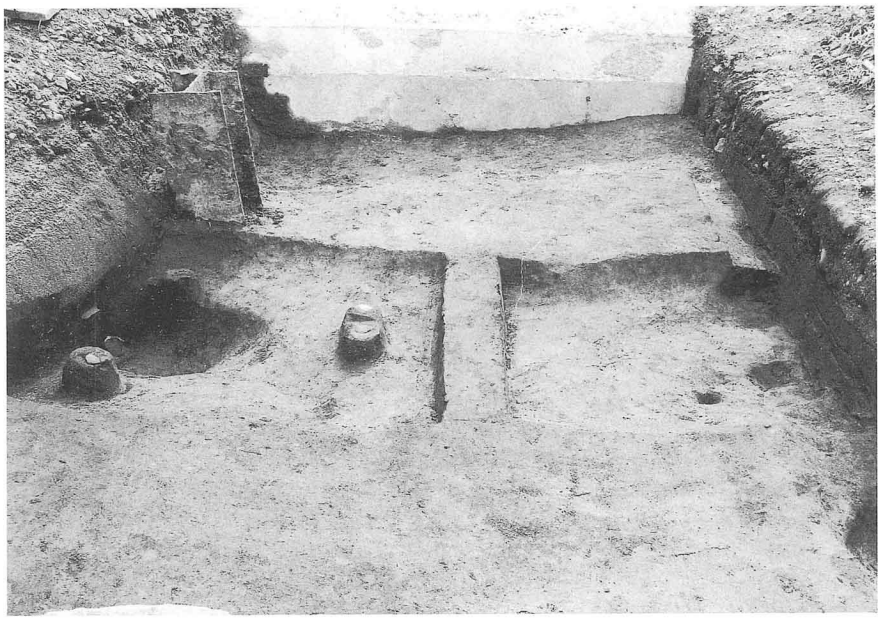
6Gr～7Gr　遺構検出状況



6Gr～7Gr　完掘状況

SD06　検出状況

SD06　完掘状況



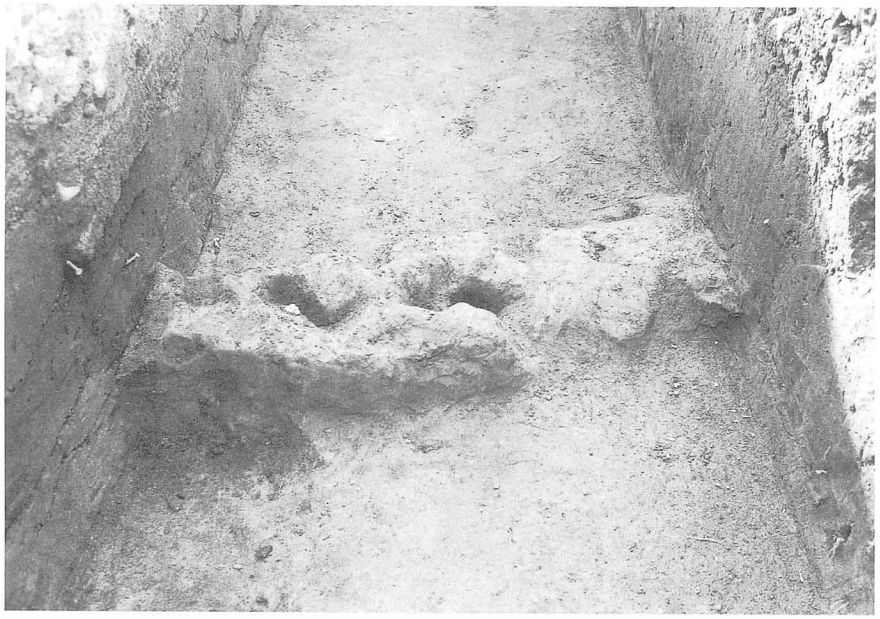
SD06　完掘状況

SD07　土層堆積状況

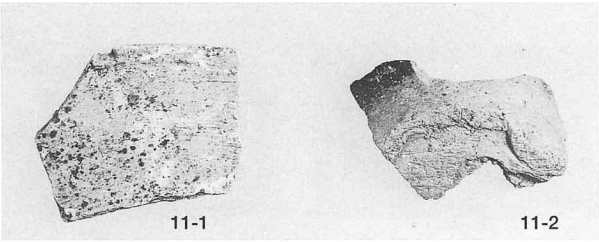
図版　4

SD08　　完掘状況

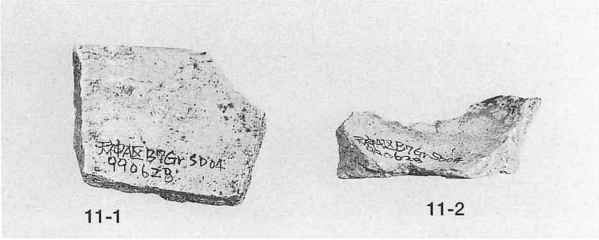
SD27　　完掘状況



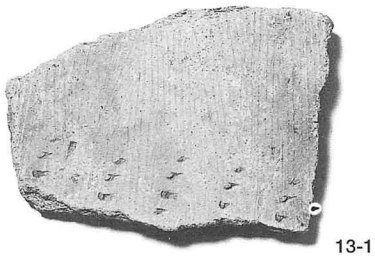
道状遺構



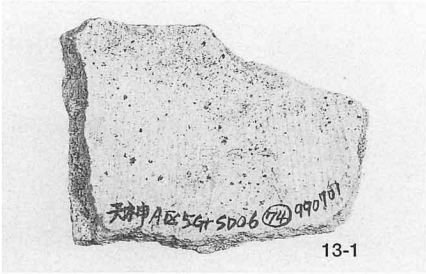
SD04（外面）



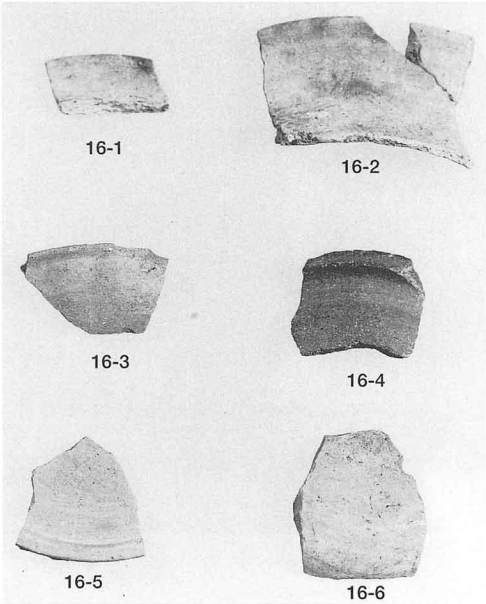
SD04（内面）



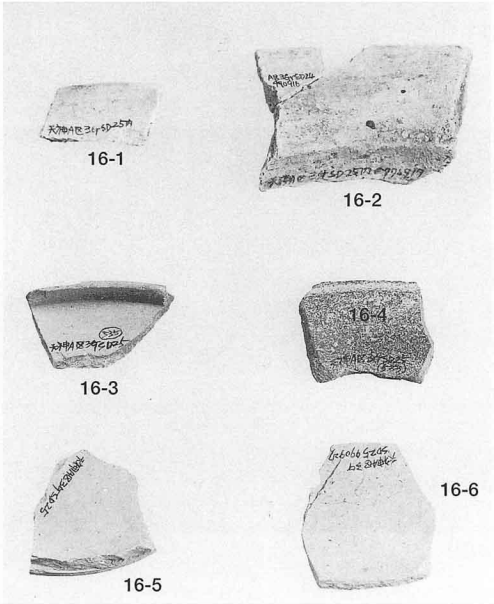
SD06（外面）



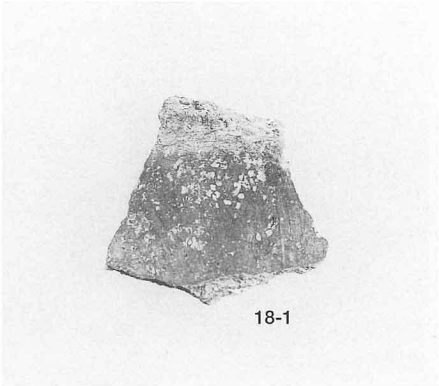
SD06（内面）



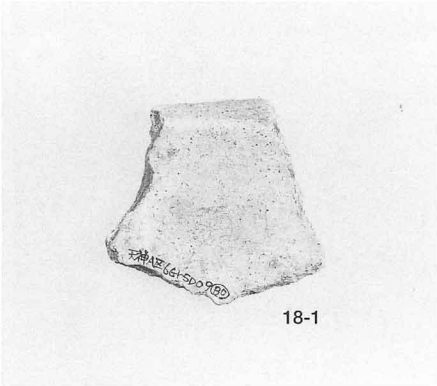
SD08（外面）



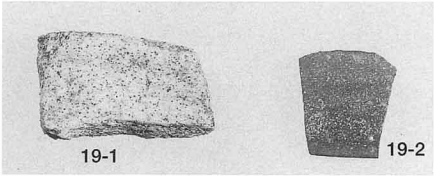
SD08（内面）



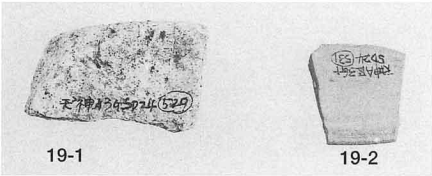
SX03（外面）



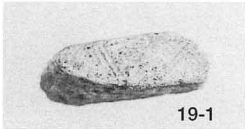
SX03（内面）



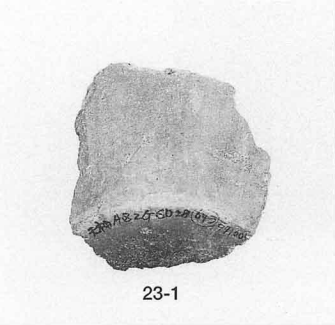
SD24（外面）



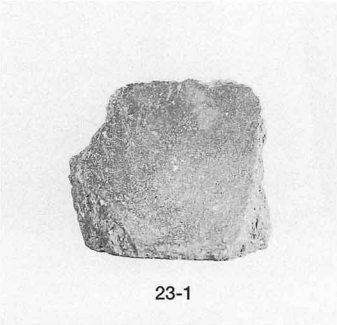
SD24（内面）



SD24

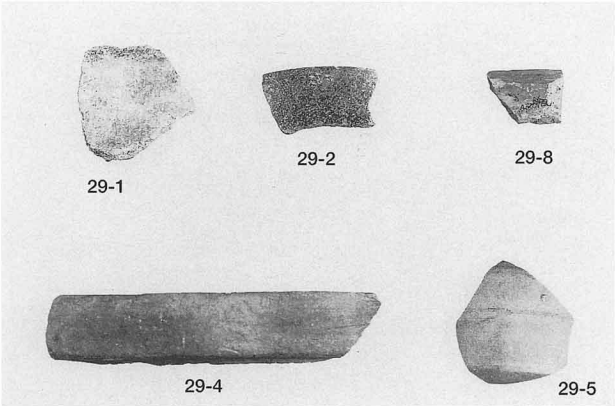


SD28（外面）

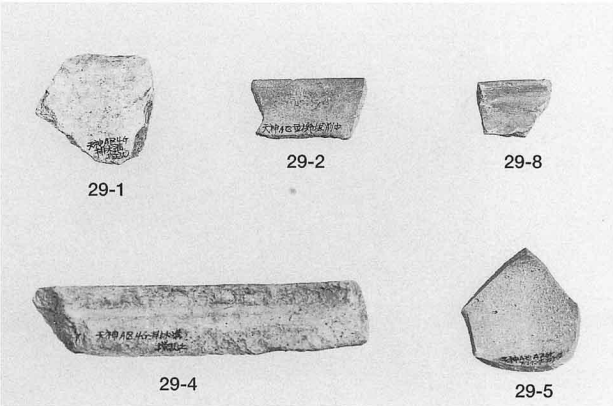


SD28（外面）

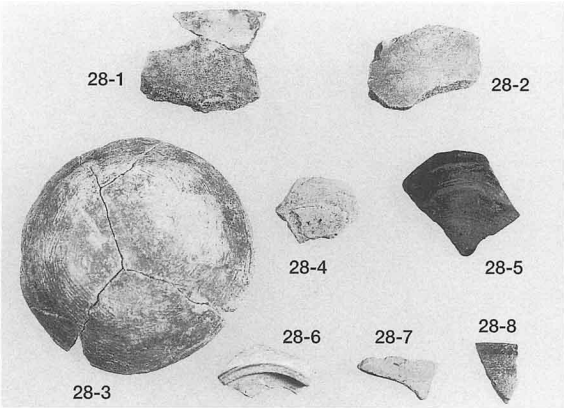
P9



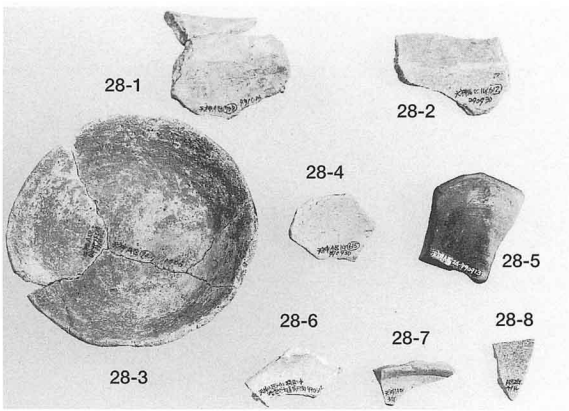
撹乱土内（外面）



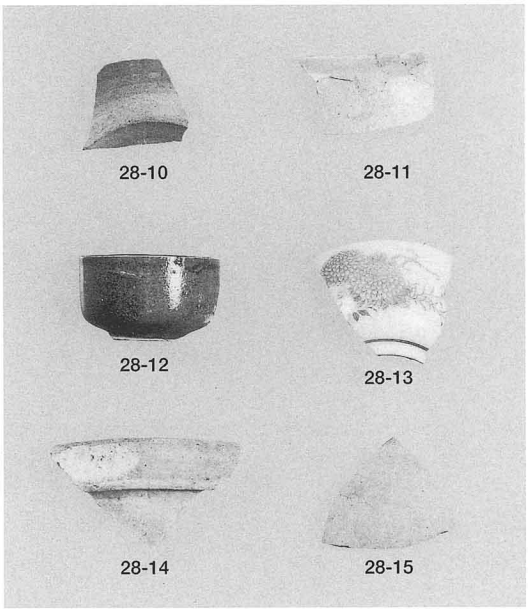
撹乱土内（内面）



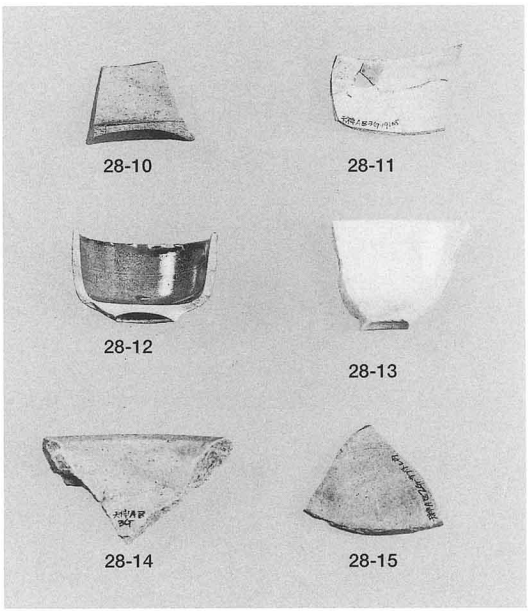
遺構外1～8（外面）



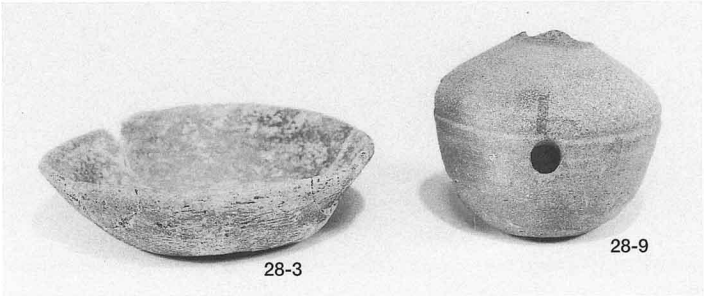
遺構外1～8（内面）



遺構外10～15（外面）



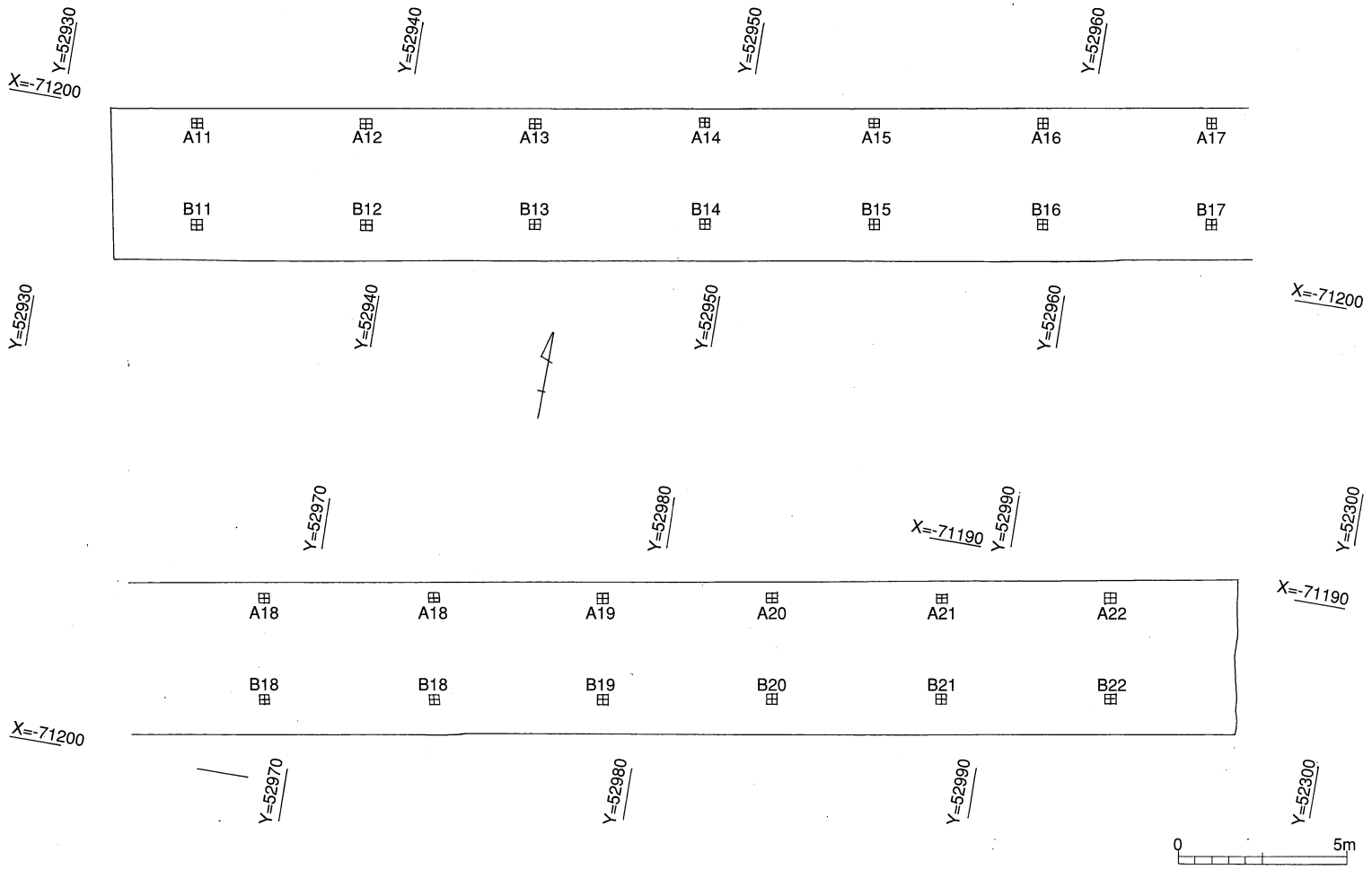
遺構外10～15（内面）



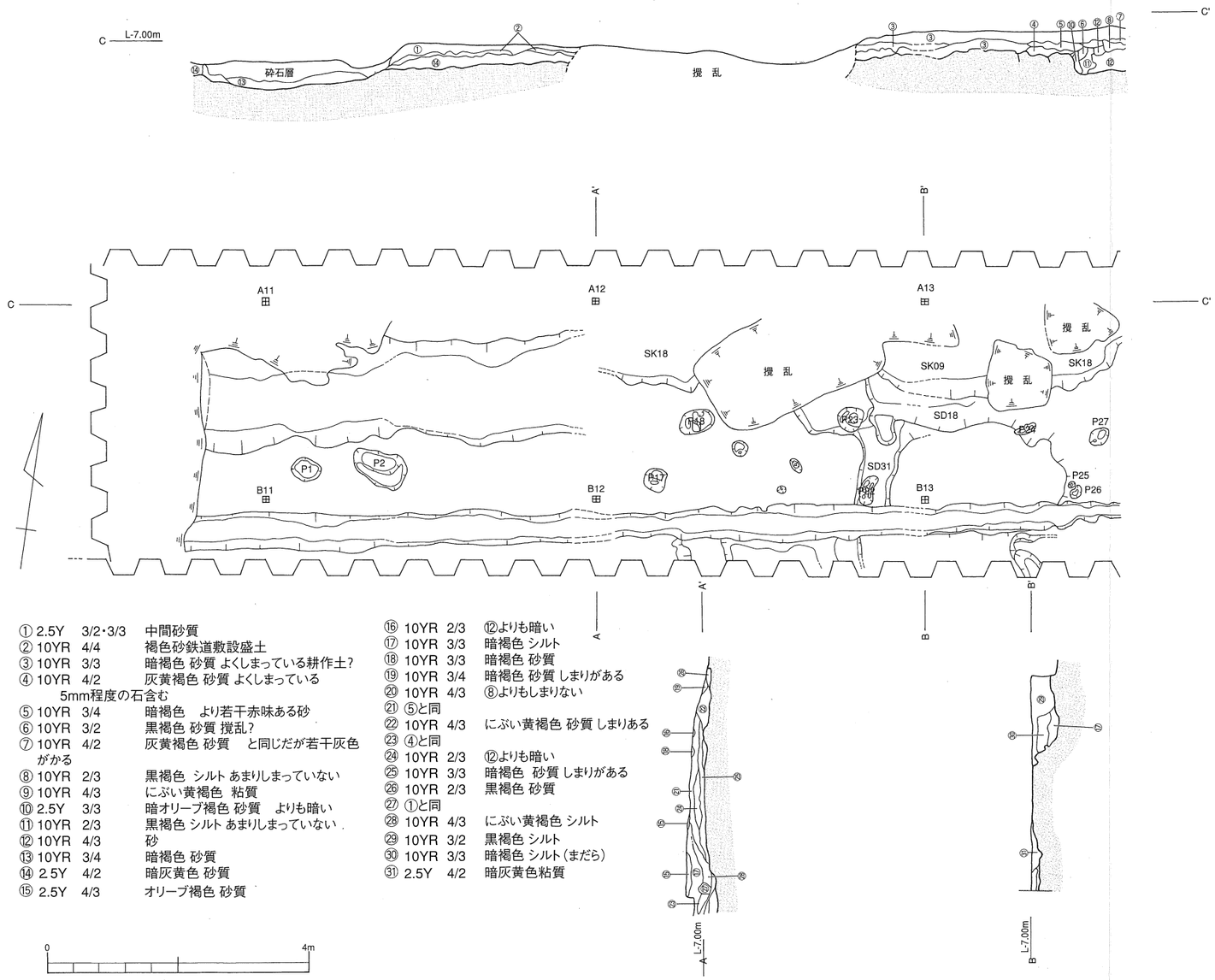
遺構外-3,9（外面）

B区

調査区は幅６ｍ、延長６０ｍをはかる。約５０cmの鉄道敷設時の盛土を除去すると、その直下で弥生時代の遺構面が露出する。覆土は全くなく同一面で検出できる遺構はその切り合い関係、出土遺物から多時期に分けられるため、この弥生時代の遺構面もある程度削平を受けているものと考えられる。時期別にみると大きく弥生時代中期の遺構（松本Ⅲ・Ⅳ様式）[1]、弥生時代終末期から古墳時代初頭の遺構（草田５期～７期）[2]、古墳時代以降の遺構に３分されるため、この時期ごとに報告する。

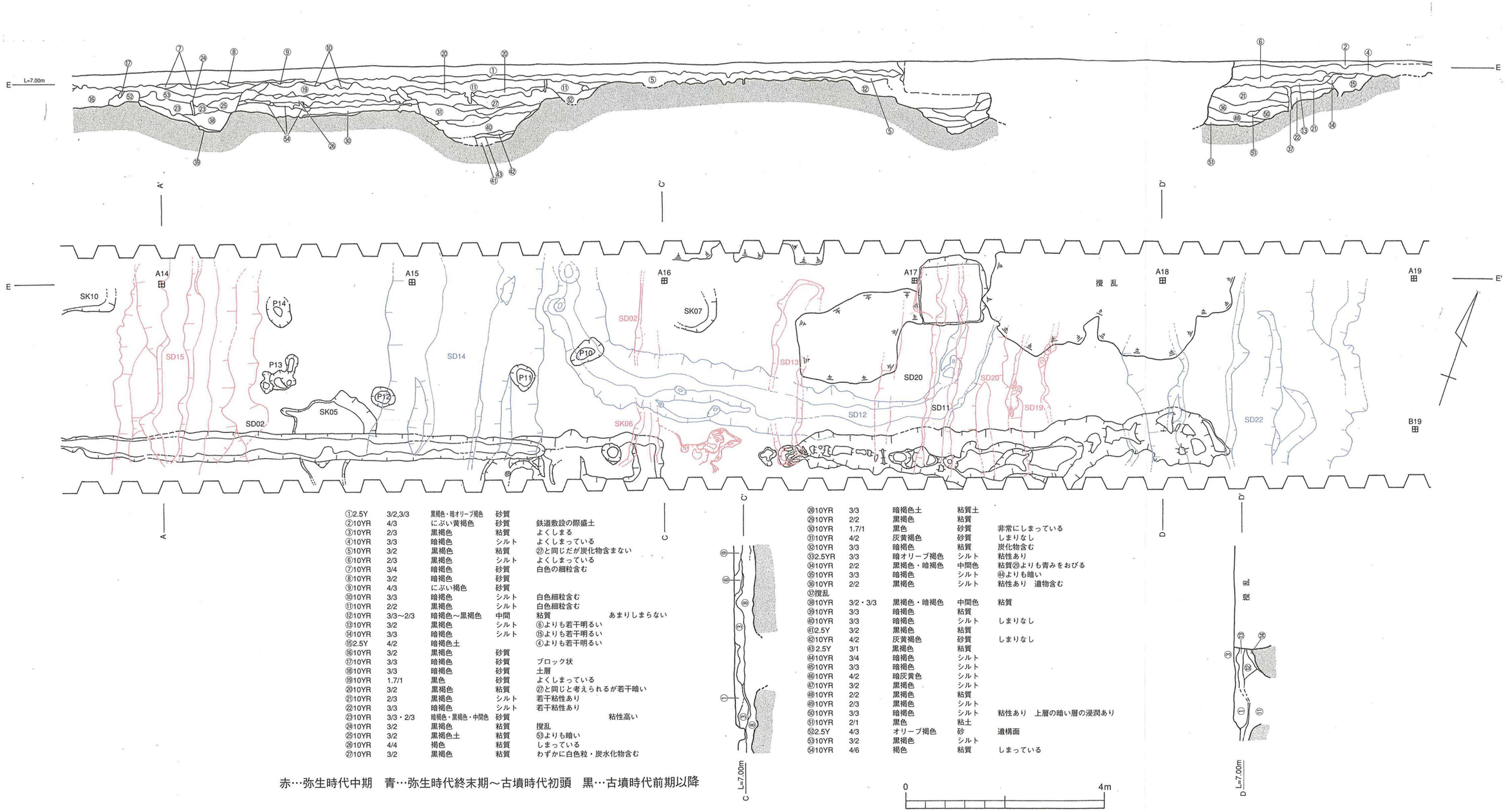


第30図　　B区　基準坑　配置図　1/200



① 2.5Y 3/2・3/3 中間砂質
② 10YR 4/4 褐色砂鉄道敷設盛土
③ 10YR 3/3 暗褐色 砂質 よくしまっている耕作土?
④ 10YR 4/2 灰黄褐色 砂質 よくしまっている
5mm程度の石含む
⑤ 10YR 3/4 暗褐色 より若干赤味ある砂
⑥ 10YR 3/2 黒褐色 砂質 撹乱?
⑦ 10YR 4/2 灰黄褐色 砂質 と同じだが若干灰色がかる
⑧ 10YR 2/3 黒褐色 シルト あまりしまっていない
⑨ 10YR 4/3 にぶい黄褐色 粘質
⑩ 2.5Y 3/3 暗オリーブ褐色 砂質 よりも暗い
⑪ 10YR 2/3 黒褐色 シルト あまりしまっていない
⑫ 10YR 4/3 砂
⑬ 10YR 3/4 暗褐色 砂質
⑭ 2.5Y 4/2 暗灰黄色 砂質
⑮ 2.5Y 4/3 オリーブ褐色 砂質
⑯ 10YR 2/3 ⑫よりも暗い
⑰ 10YR 3/3 暗褐色 シルト
⑱ 10YR 3/3 暗褐色 砂質
⑲ 10YR 3/4 暗褐色 砂質 しまりがある
⑳ 10YR 4/3 ⑧よりもしまりない
㉑ ⑤と同
㉒ 10YR 4/3 にぶい黄褐色 砂質 しまりある
㉓ ④と同
㉔ 10YR 2/3 ⑫よりも暗い
㉕ 10YR 3/3 暗褐色 砂質 しまりがある
㉖ 10YR 2/3 黒褐色 砂質
㉗ ①と同
㉘ 10YR 4/3 にぶい黄褐色 シルト
㉙ 10YR 3/2 黒褐色 シルト
㉚ 10YR 3/3 暗褐色 シルト(まだら)
㉛ 2.5Y 4/2 暗灰黄色粘質

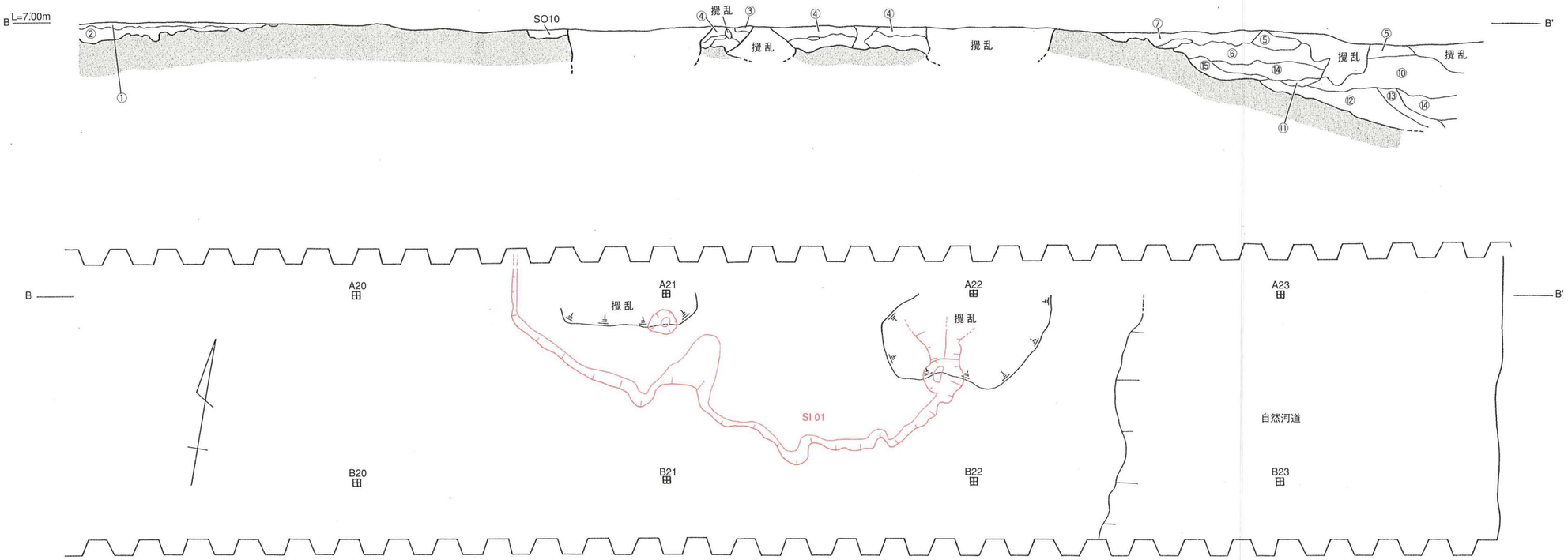
第31図　B区　遺構配置図　(1)　1/80



①2.5Y	3/2,3/3	黒褐色・暗オリーブ褐色	砂質	
②10YR	4/3	にぶい黄褐色	砂質	鉄道敷設の際盛土
③10YR	2/3	黒褐色	粘質	よくしまる
④10YR	3/3	暗褐色	シルト	よくしまっている
⑤10YR	3/2	黒褐色	粘質	⑦と同じだが炭化物含まない
⑥10YR	2/3	黒褐色	シルト	よくしまっている
⑦10YR	3/4	暗褐色	砂質	白色の細粒含む
⑧10YR	3/2	暗褐色	砂質	
⑨10YR	4/3	にぶい褐色	砂質	
⑩10YR	3/3	暗褐色	シルト	白色細粒含む
⑪10YR	2/2	黒褐色	シルト	白色細粒含む
⑫10YR	3/3～2/3	暗褐色～黒褐色	中間	粘質　あまりしまらない
⑬10YR	3/2	黒褐色	シルト	⑥よりも若干明るい
⑭10YR	3/3	暗褐色	シルト	⑮よりも若干明るい
⑮2.5Y	4/2	暗褐色土		④よりも若干明るい
⑯10YR	3/2	黒褐色	砂質	
⑰10YR	3/3	暗褐色	砂質	ブロック状
⑱10YR	3/3	暗褐色	砂質	土層
⑲10YR	1.7/1	黒色	砂質	よくしまっている
⑳10YR	3/2	黒褐色	粘質	⑦と同じと考えられるが若干暗い
㉑10YR	2/3	黒褐色	シルト	若干粘性あり
㉒10YR	3/3	暗褐色	シルト	若干粘性あり
㉓10YR	3/3・2/3	暗褐色・黒褐色・中間色	砂質	粘性高い
㉔10YR	3/2	黒褐色	粘質	撹乱
㉕10YR	3/2	黒褐色土	粘質	㊸よりも暗い
㉖10YR	4/4	褐色	粘質	しまっている
㉗10YR	3/2	黒褐色	粘質	わずかに白色粒・炭水化物含む
㉘10YR	3/3	暗褐色土	粘質土	
㉙10YR	2/2	黒褐色	粘質	
㉚10YR	1.7/1	黒色	砂質	非常にしまっている
㉛10YR	4/2	灰黄褐色	砂質	しまりなし
㉜10YR	3/3	暗褐色	粘質	炭化物含む
㉝2.5YR	3/3	暗オリーブ褐色	シルト	粘性あり
㉞10YR	2/2	黒褐色・暗褐色	中間色	粘質㉙よりも青みをおびる
㉟10YR	3/3	暗褐色	シルト	㊹よりも暗い
㊱10YR	2/2	黒褐色	シルト	粘性あり　遺物含む
㊲撹乱				
㊳10YR	3/2・3/3	黒褐色・暗褐色	中間色	粘質
㊴10YR	3/3	暗褐色	粘質	
㊵10YR	3/3	暗褐色	シルト	しまりなし
㊶2.5Y	3/2	黒褐色	粘質	
㊷10YR	4/2	灰黄褐色	砂質	しまりなし
㊸2.5Y	3/1	黒褐色	粘質	
㊹10YR	3/4	暗褐色	シルト	
㊺10YR	3/3	暗褐色	シルト	
㊻10YR	4/2	暗灰黄色	シルト	
㊼10YR	3/2	黒褐色	シルト	
㊽10YR	2/2	黒褐色	粘質	
㊾10YR	2/3	黒褐色	シルト	
㊿10YR	3/3	暗褐色	シルト	粘性あり　上層の暗い層の浸潤あり
(51)10YR	2/1	黒色	粘土	
(52)2.5Y	4/3	オリーブ褐色	砂	遺構面
(53)10YR	3/2	黒褐色	シルト	
(54)10YR	4/6	褐色	粘質	しまっている

赤…弥生時代中期　青…弥生時代終末期～古墳時代初頭　黒…古墳時代前期以降

第32図　B区　遺構配置図　(2)　1/80



①	10YR	4/3	にぶい黄褐色	砂質	鉄道盛土
②	10YR	3/3	暗褐色	シルク	よくしまっている
③	10YR	3/4	暗褐色	砂質	撹乱
④	10YR	2/3	黒褐色	シルト	よくしまっている
⑤	10YR	2/2	黒褐色	シルト	しまっている　砂まじる
⑥	10YR	2/2	黒褐色	シルト	⑤より暗い　しまっている　砂はまじらない
⑦	7.5Y	2/2	黒褐色	シルト	
⑧	2.5Y	3/3	暗オリーブ褐色	砂質	
⑨	10YR	3/4	暗褐色	砂質	撹乱
⑩	2.5Y	5/2	暗灰黄色	砂	
⑪	10YR	4/3	にぶい黄褐色	砂	
⑫	10YR	4/4	褐色	砂	
⑬	10YR	4/6	褐色	砂	
⑭	10YR	5/4	黄褐色	砂	
⑮	10YR	4/2	灰黄褐色		

0　4m

赤…弥生時代中期

第33図　B区　遺構配置図　(3)　1/80

＜弥生時代中期の遺構＞（松本Ⅲ～Ⅳ様式）

【溝状遺構】

ＳＤ１３　（第３４図）

規模・形態

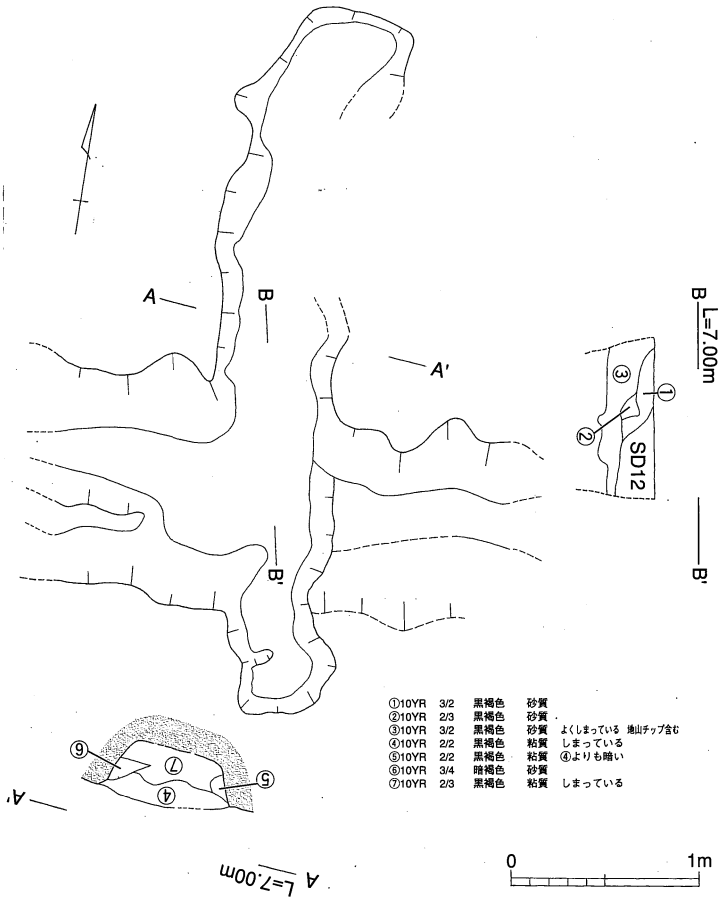
南北に延びる幅０．７ｍの溝であり、長さは３．８ｍを測る。ほぼ直線的であるが、北端は若干東へと曲がっている。

土層堆積状況

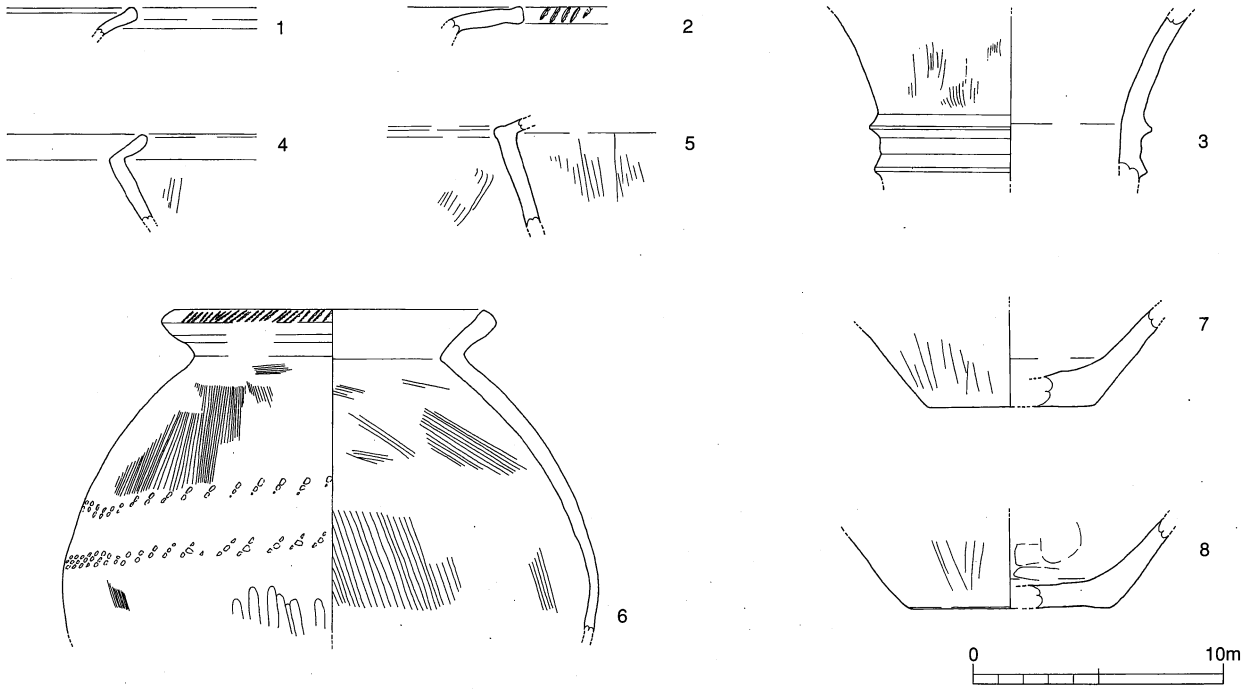
遺構の両側にブロック状の土層が認められたが、これが何を意味しているのかは不明である。また、非常に微妙ではあるもののＳＤ１２との切り合い関係も認められる。この切り合い関係からＳＤ１３はＳＤ１２よりも古い遺構であることが判明した。

遺物出土状況　（第３６図）

遺構内より多くの弥生土器が出土した。そのほとんどは遺構底からの出土であり、これらはＳＤ１２の削平を受けていないものと考えられるが、ＳＤ１２とＳＤ１



第34図　SD13　遺構実測図　1/40



第35図　SD13　出土遺物　1/3

第36図　　SD13　遺物出土状況　1/30

３の埋土に大きな差異が認められなかったために現地ではＳＤ１２・１３のどちらに属するかを判断することは困難であった。

しかし、その出土状況や土層の再検討から、ＳＤ１３に属する遺物であると考えられる。

出土遺物　（第３５図）

弥生土器

甕（１・４・５）

１・４は口縁端部が若干肥厚する特徴を持ち、いずれも弥生時代中期中葉（松本Ⅲ様式）に当たる。

壺（２・３・６）

２・３は広口壺である。２は口縁部のみであり、口縁端部に貝殻斜線文が施される。３は頸部のみであるが、２条の断面三角形の突帯を貼り付ける。

６は壺である。口縁端部に貝殻斜線文、胴部には３点１単位の列点文を施している。

いずれも弥生時代中期中葉（松本Ⅲ様式）に当たるものである。

底部（７・８）

いずれも平底を呈している。

ＳＤ１５　（第３７図）

規模・形態

幅２．５～２．７ｍ、深さ０．９ｍの大溝である。ＳＤ１４の２ｍ西側に位置しており、方向はＳＤ１４とほぼ並行している。遺構の断面形は基本的にＶ字形を呈しているが、西側の傾斜がきついのに対して東側では非常になだらかである。また、調査区北端においては東側がほぼ垂直に３０cmほど落ちており、その場所からはなだらかに遺構底へと至る。

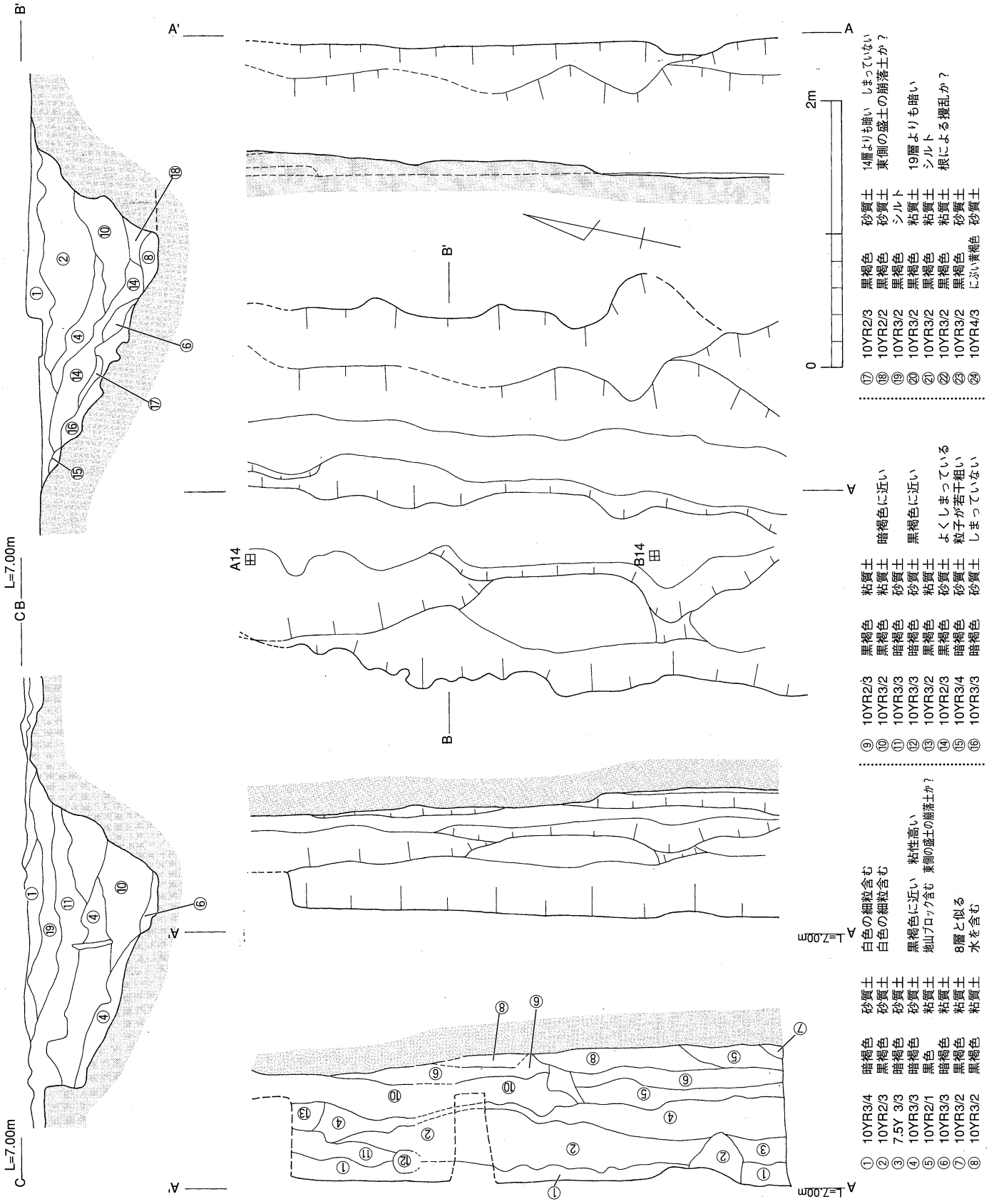
第７次調査Ｂ区ＳＤ０５につながる遺構である。

土層堆積状況

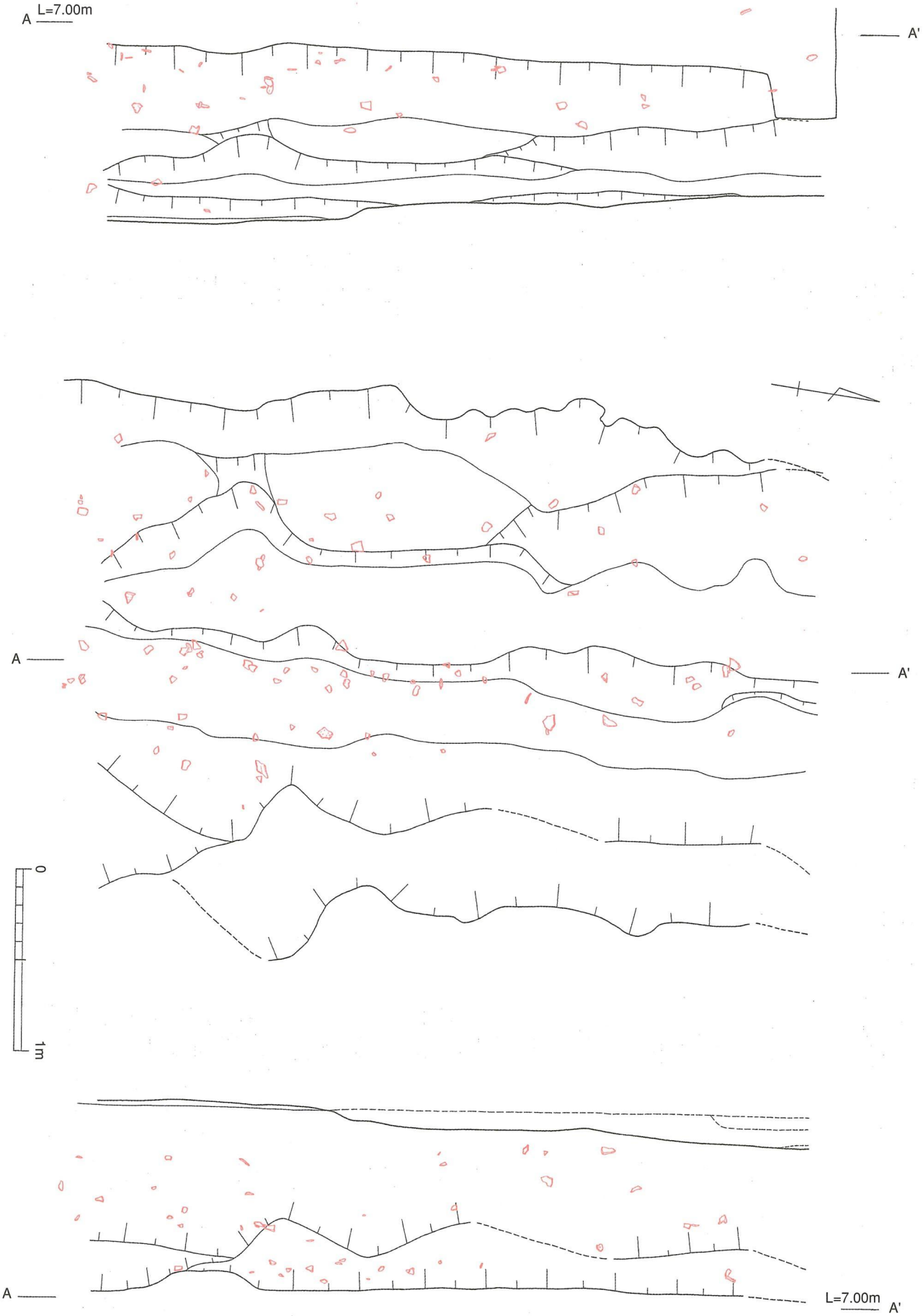
土層堆積状況よりみると⑪層以上が掘り返しの可能性がある。また、北側土層では遺構の西肩が一度垂直に下がりなだらかになるが、㉑層は遺構面の崩落土と考えられるために、本来は遺構肩からなだらかに底へ至っていたと考えられる。

遺物出土状況　（第３８図）

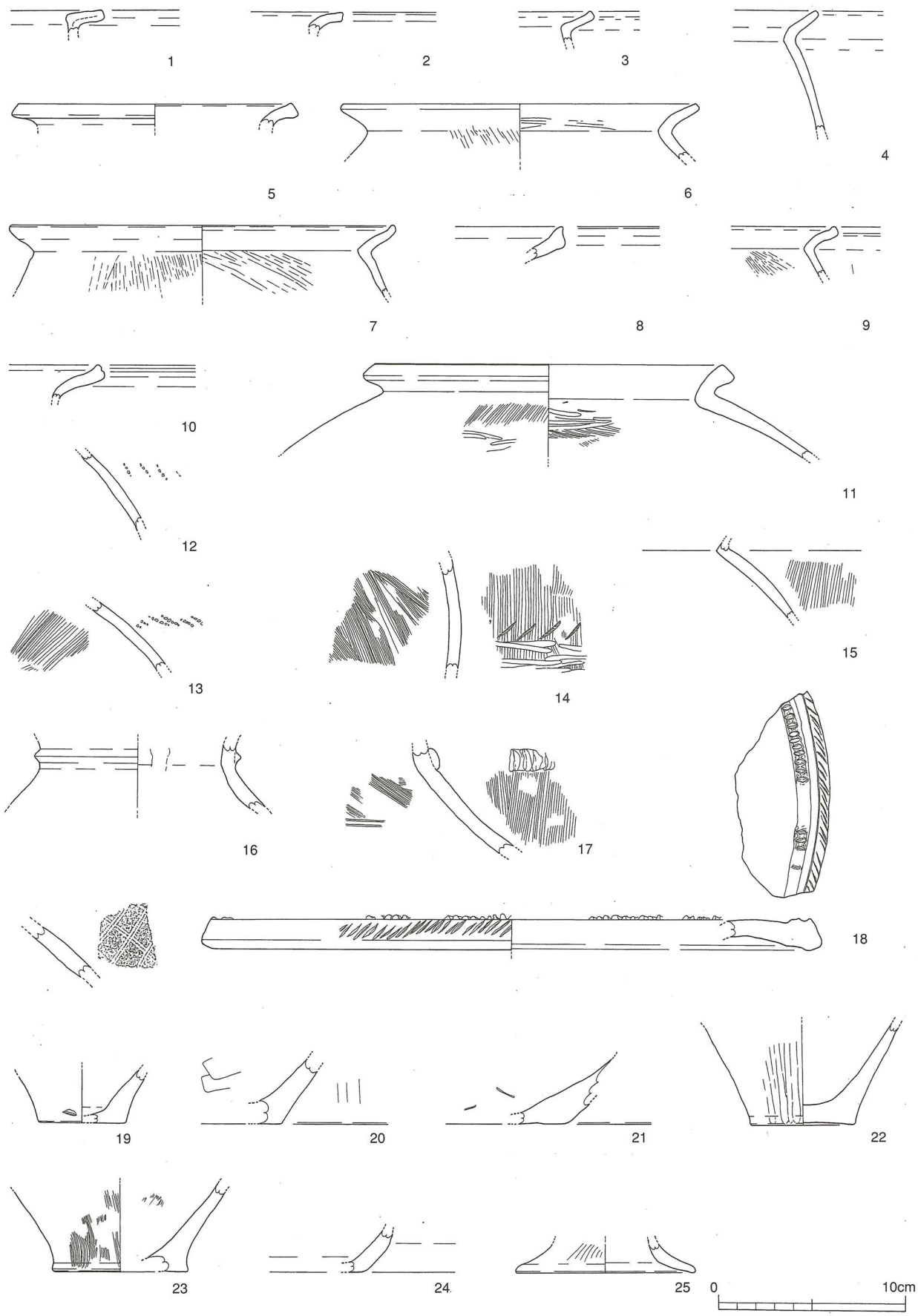
埋土の全面から多くの弥生土器片が散乱して出土した。これらは全て破片であり、完形を呈するものは全くない。この傾向は第７次調査でも同様である。



第37図　SD15　遺構実測図　1/40



第38図　SD15　遺物出土状況　1/30



第39図　　SD15　出土遺物　1/3

出土遺物　（第３９図）

弥生土器

甕（１～１７）

口縁端部が肥圧するものとそうでないものとがあり、１０の口縁端部には１条の沈線が認められる。

１２～１４は胴部である。１２は１単位４点、１３は５点の列点文が施されている。１４は貝殻斜線文が施されている。

１５～１７は頸・肩部である。１６の頸部には断面三角形の突帯が張り付けられている。１７の頸部外面には指頭圧痕文帯が巡っている。また、内面には２条の沈線がみられる。

いずれも弥生時代中期中葉（松本Ⅲ様式）に該当する。

壺（１８）

１８は広口壺である。口縁端部にヘラ描斜線文、口縁端部上面に刻目突帯が施されている。弥生時代中期中葉（松本Ⅲ様式）に属するものである。

底部（１９～２３）

１９の外面には爪でついたと考えられる跡がみられる。２１は全体的に雑な仕上げである。２３は非常に細かいハケ目が外面にみとめられる。

土師器

坏（２４）

朱塗りの痕跡が認められるが、時期については不明である。

低脚坏（２５）

脚部のみの残存である。

２４・２５は混入品である可能性が高い。

弥生土器片の出土量は多いものの、図化できるものは非常に限られている。図化できたものは全て弥生時代中期に属するものであり、編年上でいえば松本Ⅲ－１～Ⅳ－１様式にあたるが、その大半が松本Ⅲ様式に該当するものである。

遺構の性格

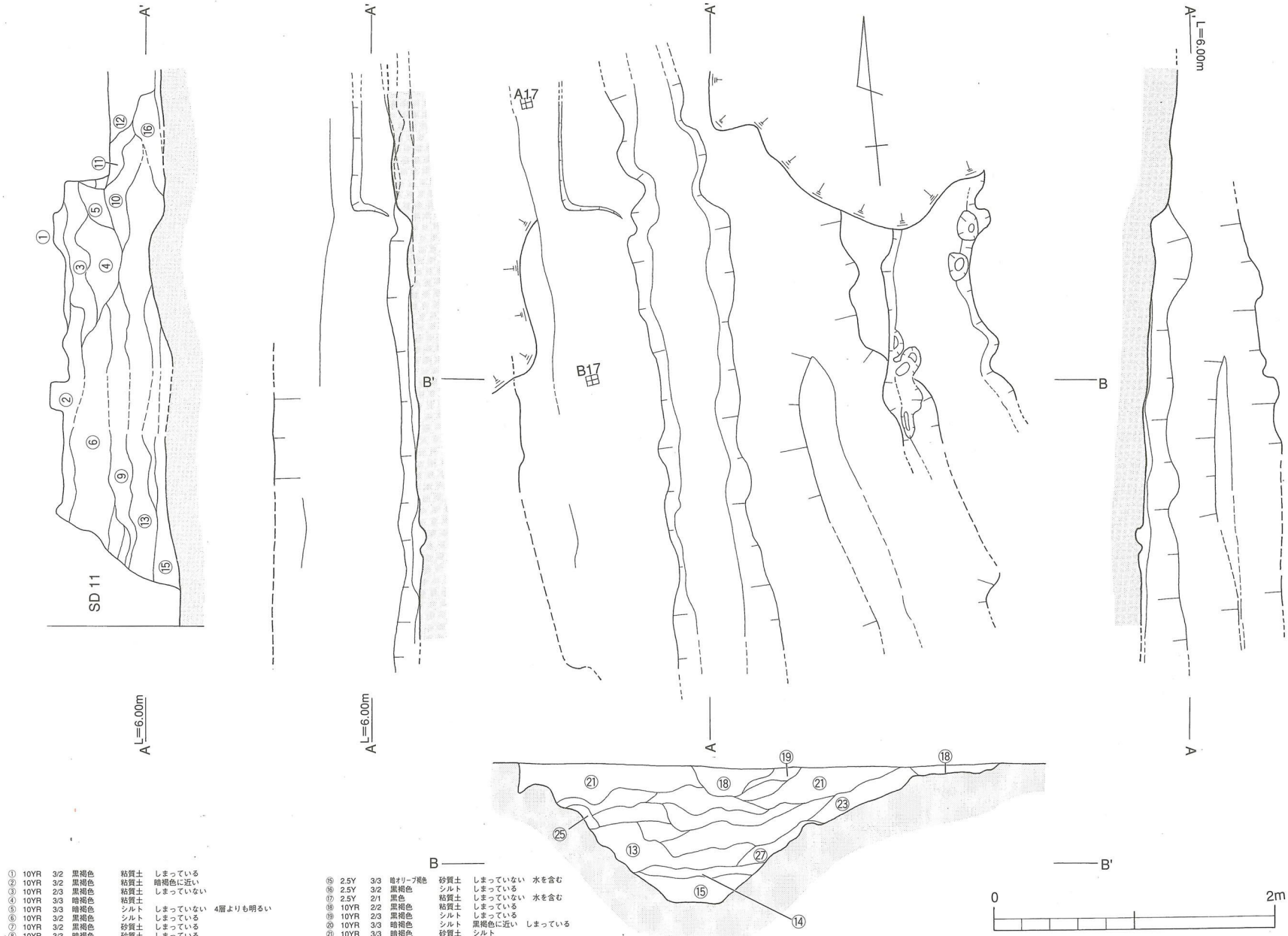
遺構の規模、形状から集落を区画するための溝であることが考えられる。第７次調査Ｂ区ＳＤ０５に該当する。

ＳＤ１９・２０　（第４０図）

規模・形態

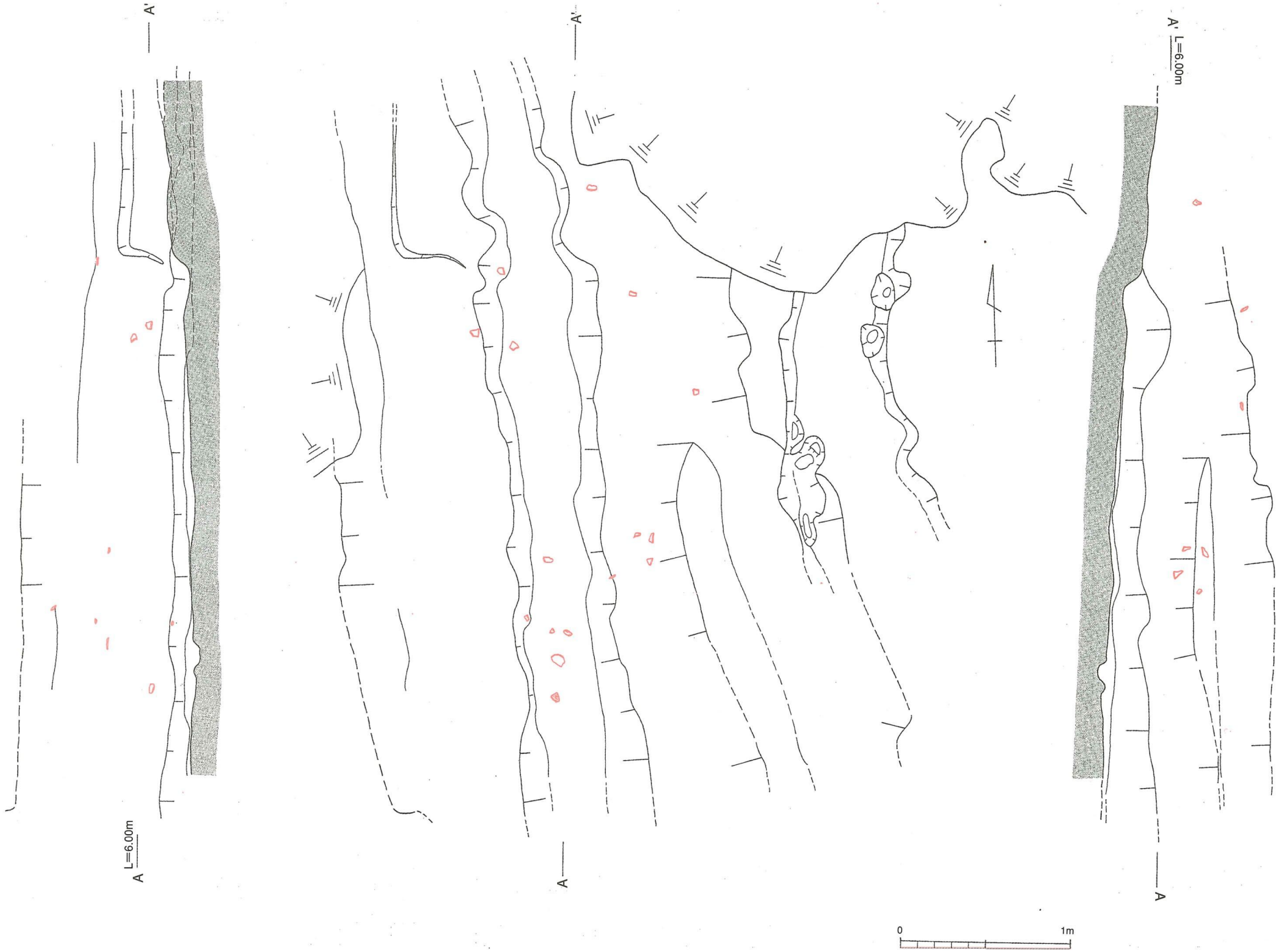
ＳＤ１９は幅０．７ｍ、深さ１０㎝を測り、南北に延びているものの攪乱により延長は１．７ｍほどしか残存していない。南側はＳＤ２０を切っているが、北側についてはＳＤ２０よりも東側へと曲がっていくようである。

ＳＤ２０は幅３．０ｍ、深さ１．０ｍを測る。断面形は上部分が開いた「Ｖ」字を呈しており遺構底は平らである。



① 10YR 3/2 黒褐色 粘質土 しまっている
② 10YR 3/2 黒褐色 粘質土 暗褐色に近い
③ 10YR 2/3 黒褐色 粘質土 しまっていない
④ 10YR 3/3 暗褐色 粘質土
⑤ 10YR 3/3 暗褐色 シルト しまっていない 4層よりも明るい
⑥ 10YR 3/2 黒褐色 シルト しまっている
⑦ 10YR 3/2 黒褐色 砂質土 しまっている
⑧ 10YR 3/3 暗褐色 砂質土 しまっている
⑨ 10YR 3/3 暗褐色 粘質土 黒褐色に近い しまっている 遺物を包含する
⑩ 10YR 3/3 暗褐色 シルト 水を含む
⑪ 10YR 3/1 黒褐色 粘質土
⑫ 10YR 4/1 褐灰色 粘質土 しまっている
⑬ 10YR 3/4 暗褐色 粘質土 黒褐色・褐色土のブロック含む
⑭ 10YR 4/3 にぶい黄褐色 砂質土 しまっていない 水を含む
⑮ 2.5Y 3/3 暗オリーブ褐色 砂質土 しまっていない 水を含む
⑯ 2.5Y 3/2 黒褐色 シルト しまっている
⑰ 2.5Y 2/1 黒色 粘質土 しまっていない 水を含む
⑱ 10YR 2/2 黒褐色 粘質土 しまっている
⑲ 10YR 2/3 黒褐色 シルト しまっている
⑳ 10YR 3/3 暗褐色 シルト 黒褐色に近い しまっている
㉑ 10YR 3/3 暗褐色 砂質土 シルト
㉒ 10YR 3/3 暗褐色 砂質土 しまっていない
㉓ 10YR 3/3 暗褐色 シルト 地山ブロック含む
㉔ 10YR 3/2 黒褐色 シルト 6層に似る
㉕ 10YR 3/3 暗褐色 シルト
㉖ 10YR 3/3 暗褐色 砂質土 黒褐色に近い
㉗ 10YR 3/4 暗褐色 黒褐色土をマーブル状に含む 地山の崩れたものか？

第40図　SD19・20　遺構実測図　1/40



第41図　　SD19・20　遺物出土状況　1/30

土層堆積状況

ＳＤ２０の遺構横断面ではＳＤ１２・１９が確認できる。その様子からＳＤ１９はＳＤ２０がほぼ埋没してから構築されたと考えられる。ＳＤ２０は意図的に埋めたというよりは自然に埋まったという印象が強い。

遺物出土状況　（第４１図）

非常に散漫な出土状況である。全て埋土内かつ上層部分での出土であり、形を成すものは少ない。埋没する過程で流入したものと考えられる。

出土遺物　（第４２図）

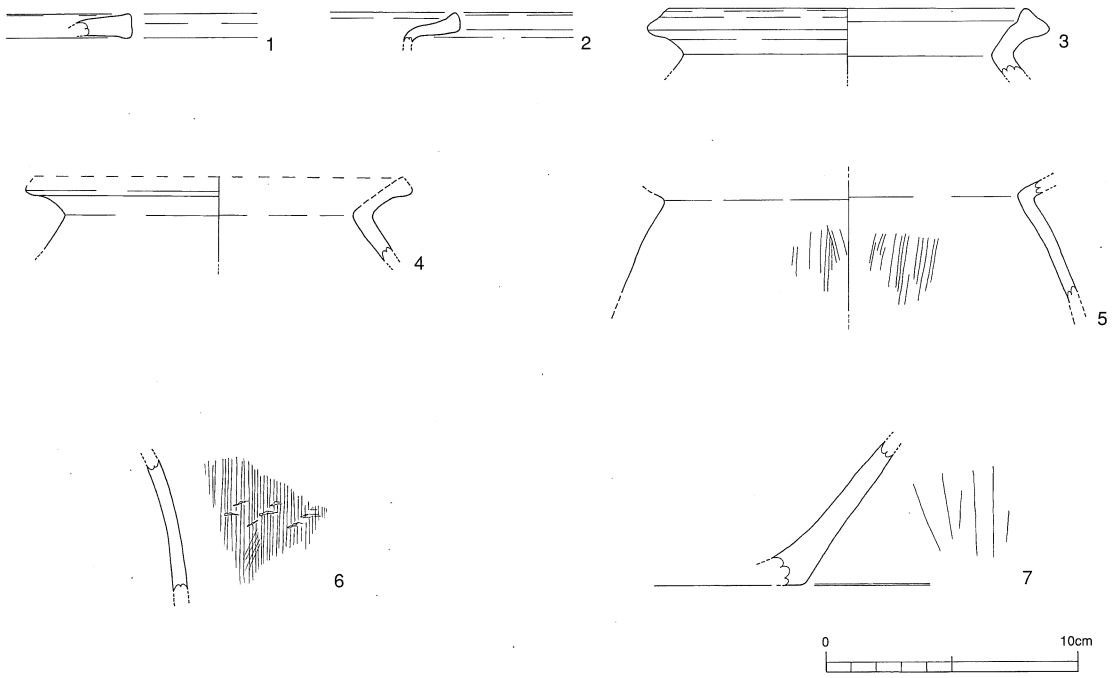
弥生土器

甕（1～6）

6は胴部の破片であるが、３点１単位の列点文を施している。いずれも弥生時代中期中葉（松本Ⅲ様式）に当たるものである。

底部（7）

時期は不明であるが、弥生時代後期まで下ることはないと思われる。

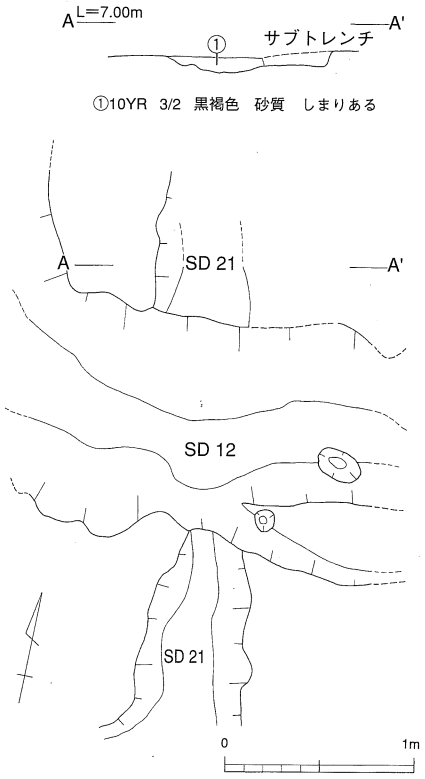


第42図　　SD19・20　出土遺物　1/3

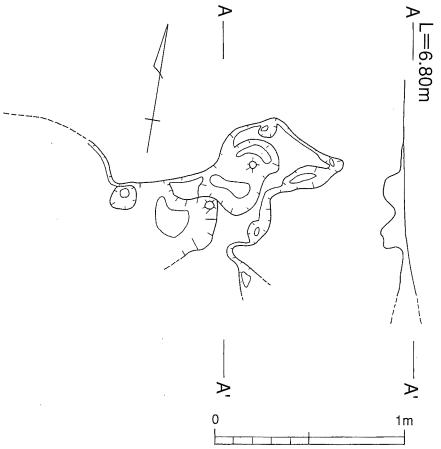
遺構の時期・性格

遺物からみても弥生時代後期以降のものはないため、ＳＤ２０は弥生時代後期には既に埋没していたものと考えられる。遺構の性格としてはその規模・形態よりみても集落を区画する溝の機能を持っていた可能性があろう。

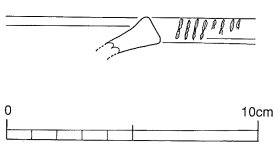
ＳＤ２０は第７次調査Ｂ区ＳＤ０３に該当する。



第44図　SD21　遺構実測図　1/40



第45図　SK06　遺構実測図　1/40



第46図　SK06　出土遺物　1/3

ＳＤ２１　（第４４図）

規模・形態

幅０．５ｍ、深さ０．１ｍを測る溝状遺構である。サブトレンチにより北側及び東側肩が、ＳＤ１２により中央部分が切られていることもあり、残存している場所が少なかった。

土層堆積状況

浅いこともあり黒褐色砂質土、１層で構成される。この埋土はＳＤ１５・ＳＤ２０の埋土に酷似する。

第43図　SD21　出土遺物　1/3

出土遺物　（第４３図）

弥生土器

壺（１）

口縁部の特徴より弥生時代中期中葉（松本Ⅲ－２様式）に属するものと考えられる。

遺構の時期・性格

遺物は１点しか出土していないが、古墳時代前期初頭の遺構であるＳＤ１２に切られていることや埋土が他の弥生時代中期の遺構のものと酷似していることから考えても、遺物の時期の弥生時代中期としても差し支えないであろう。

第７次調査Ｂ区ＳＤ０２に該当する。

【土壙】

ＳＫ０６　（第４５図）

規模・形態

南北０．９ｍ以上、東西１．３ｍ以上を測る、非常に不整形な土壙である。遺構底は凸凹しており、深さは深い場所で１５cm程度である。

土層堆積状況

土層は灰黄褐色シルト１層で構成されている。

出土遺物　（第４６図）

弥生土器

壺（１）

口縁端部に貝殻斜線文が施されている。弥生時代中期中葉（松本Ⅲ－２様式）のものと考えられる。ＳＤ２１よりの流れ込みである可能性もある。

遺構の時期

出土遺物をみるとＳＤ２１と同時期であるが、この遺構はＳＤ２１に切られているため弥生時代中期中葉以前とのみ言及しておく。

＜弥生時代終末期から古墳時代初頭の遺構＞（草田５～７期）

【溝状遺構】

ＳＤ１２　（第４８図）

規模・形態

「コ」字形に巡る浅い溝状遺構であり、幅１．２～０．７ｍ、深さ０．４～０．５ｍを測る。この溝は北側については調査区外に延びると思われ、方形周溝状を呈する可能性がある[3]。

遺構の時期としては、ＳＤ１４を切っておりそれ以降と考えられるが、出土遺物からは時期に差はみられない。ＳＤ１４の埋没とＳＤ１２の掘削とは、ごく短期間に為されたものと考えられる。

土層堆積状況

一見、複雑な堆積状況に見えるものの、そのうち②③⑧層は遺構面ベース層のブロックが多く混入しており、ほとんどが、遺構肩の崩落・風化土である可能性が高い。

遺物出土状況　（第４９図）

ＳＤ１２に伴うと考えられる遺物はＳＤ１３の周辺からしか出土していない上、出土量は非常に乏しい。床面直上より出土したものはなく、全て埋土中よりの出土である。

出土遺物　（第４７図）

弥生土器

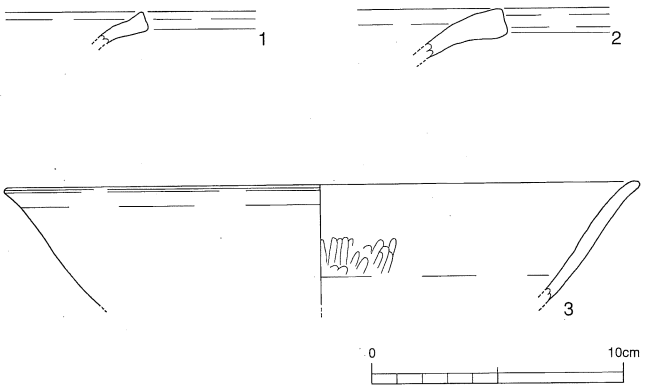
甕（１・２）

どちらも弥生時代中期中葉（松本Ⅲ様式）の様相を示す。

土師器

高坏（３）

これは古墳時代前期初頭（草田７期）を示すと考えられる。



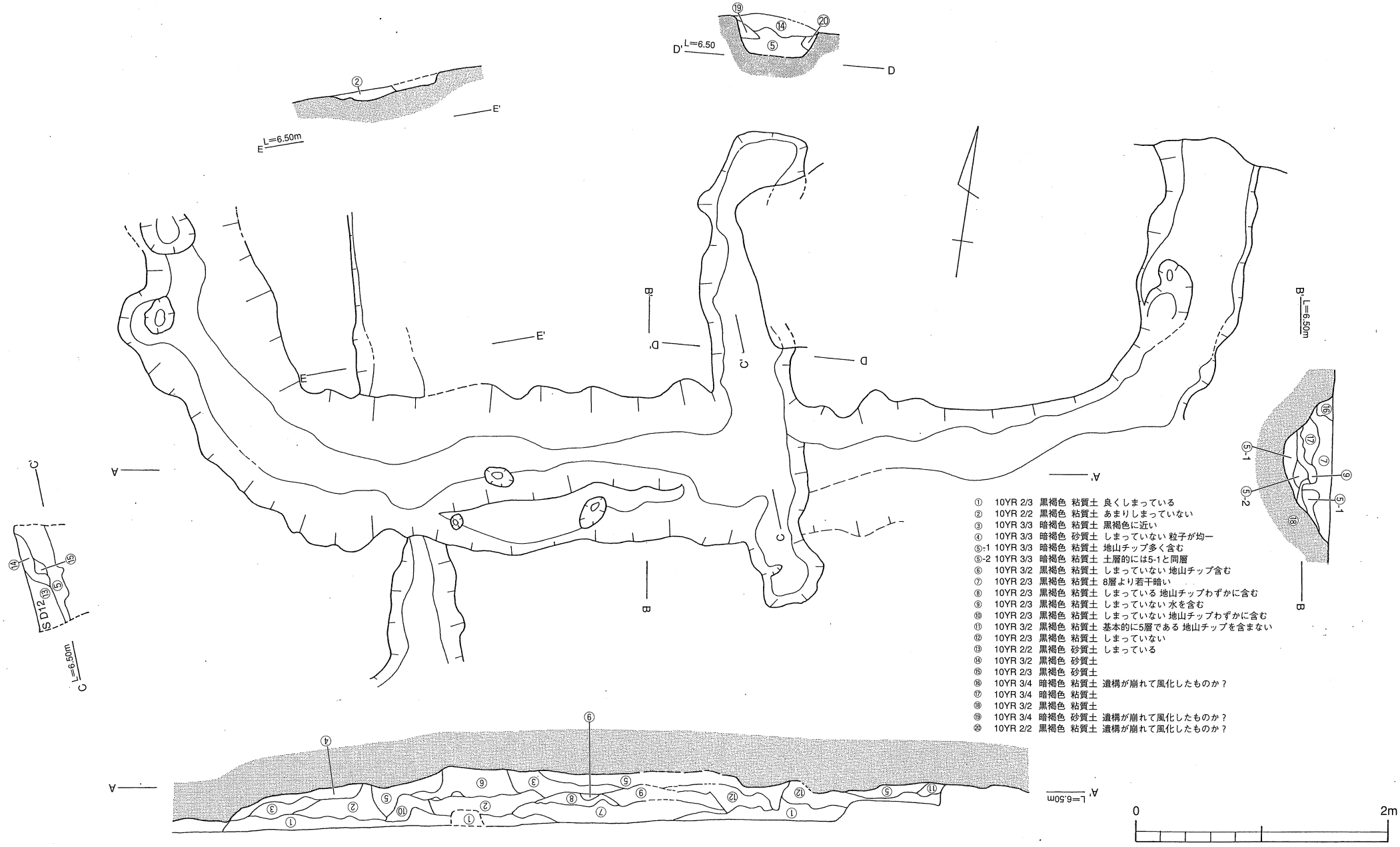
第47図　　SD12　出土遺物　1/3

遺構の時期・性格

遺構の時期であるが、明らかにＳＤ１２に伴うと考えられる遺物は非常に少ないうえ、弥生時代中期中葉のものと古墳時代前期初頭のものが混在している。そのため、遺物だけでは明確な時期を与えるのは難しいが、土層堆積状況よりＳＤ１２がＳＤ１４よりも新しいことが判明しているため、３の高坏の時期をもって遺構の時期とするのが適当であろう。

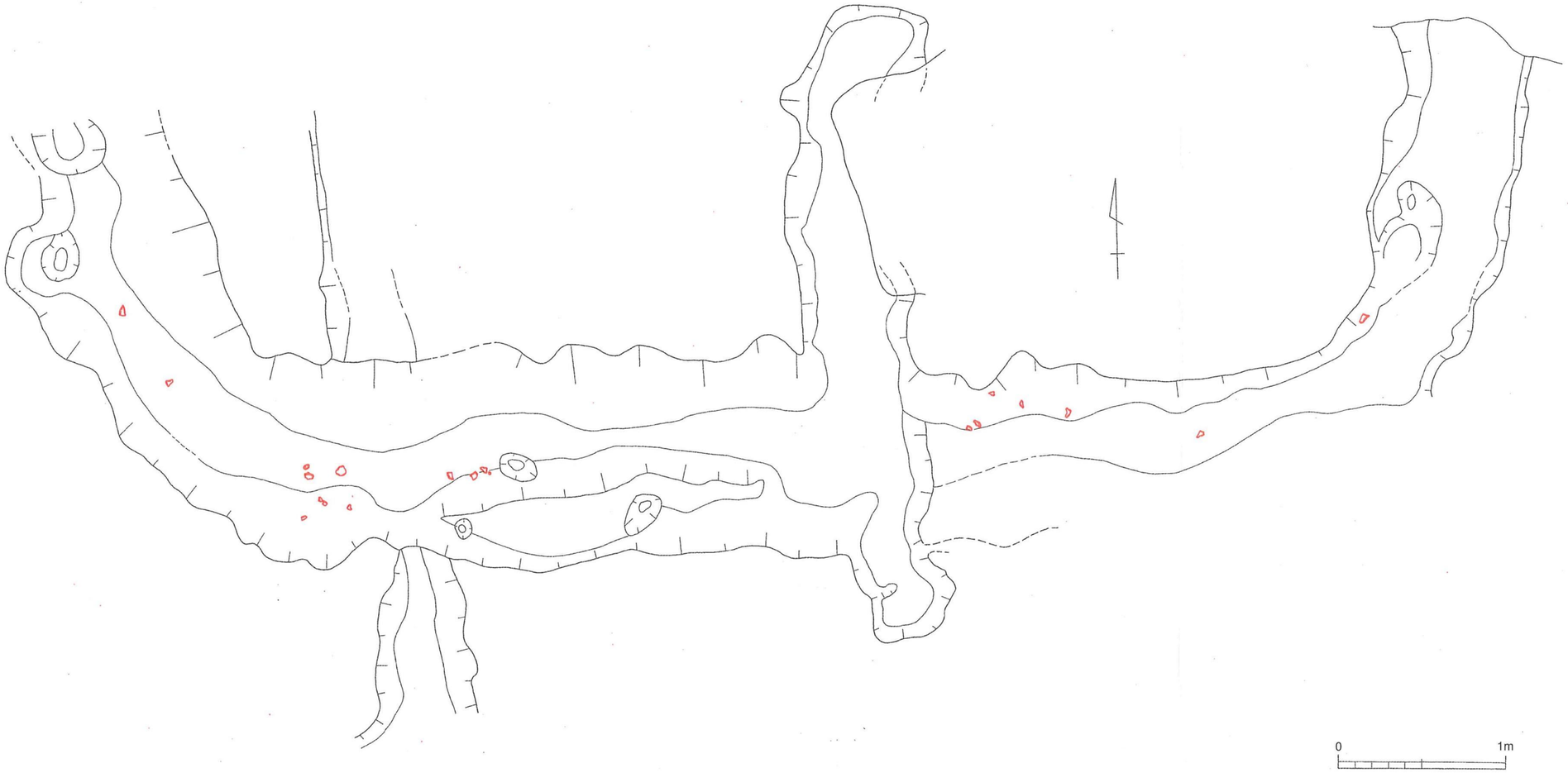
ＳＤ１２は「コ」字形を呈しており調査区外へと延びているために、全体像を把握することができないが、溝が方形に巡り方形周溝墓である可能性が考えられる。

近年の三田谷Ⅰ遺跡[4]の調査においてはＳＤ１２と同時期、同規模の方形周溝墓が検出されているため、ここでは方形周溝墓としての可能性を指摘しておく。しかし、ＳＤ１２は調査区の狭さゆえ全容が確認できない上に、埋葬主体部についてもその推定場所が現代の攪乱により破壊されているために検出できなかったという状況もあり、これについては遺構形状から考え得る１つの可能性として指摘するものであり、積極的にそうであると言い切ることはできない。

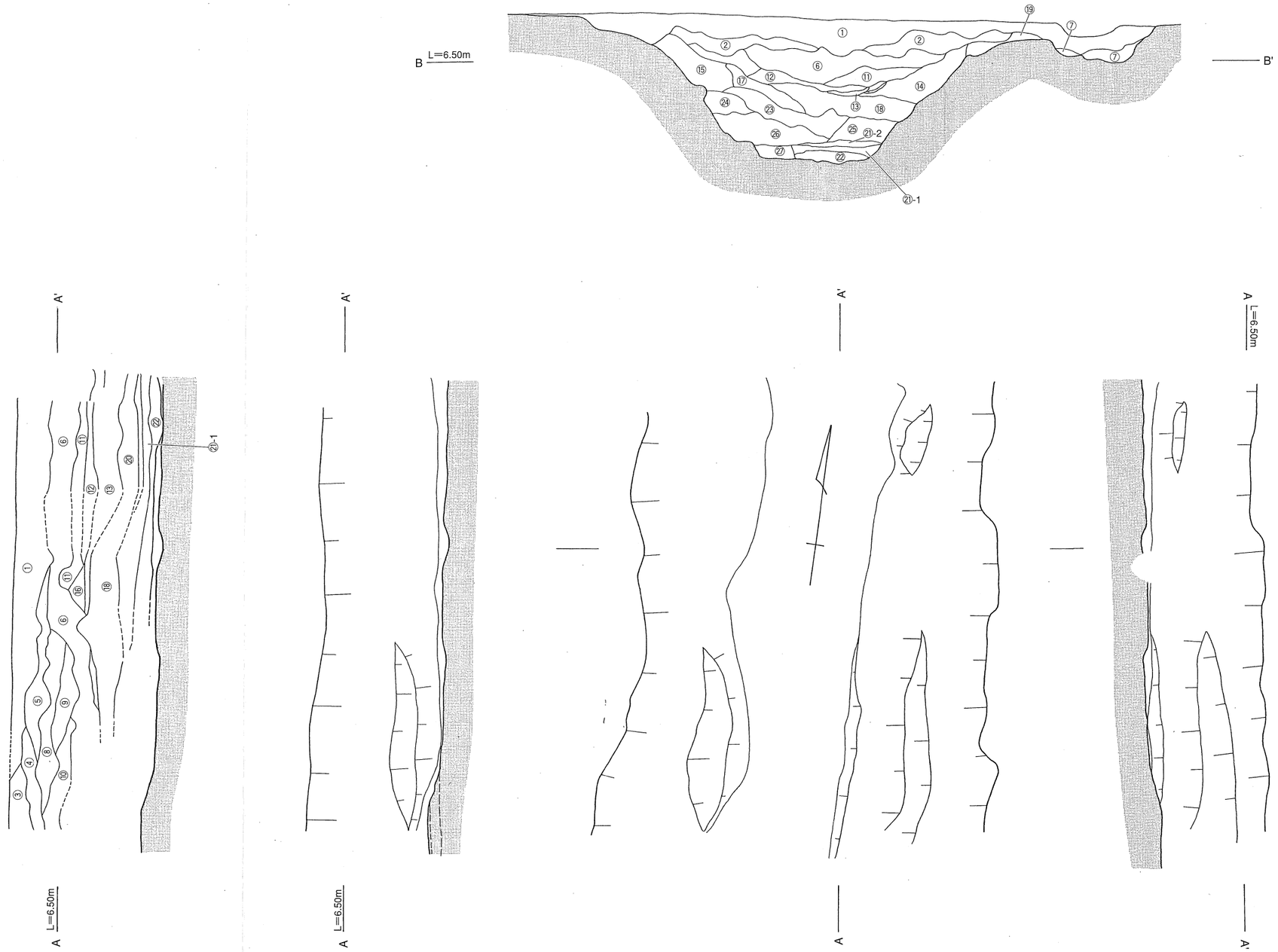


① 10YR 2/3 黒褐色 粘質土 良くしまっている
② 10YR 2/2 黒褐色 粘質土 あまりしまっていない
③ 10YR 3/3 暗褐色 粘質土 黒褐色に近い
④ 10YR 3/3 暗褐色 砂質土 しまっていない 粒子が均一
⑤-1 10YR 3/3 暗褐色 粘質土 地山チップ多く含む
⑤-2 10YR 3/3 暗褐色 粘質土 土層的には5-1と同層
⑥ 10YR 3/2 黒褐色 粘質土 しまっていない 地山チップ含む
⑦ 10YR 2/3 黒褐色 粘質土 8層より若干暗い
⑧ 10YR 2/3 黒褐色 粘質土 しまっている 地山チップわずかに含む
⑨ 10YR 2/3 黒褐色 粘質土 しまっていない 水を含む
⑩ 10YR 2/3 黒褐色 粘質土 しまっていない 地山チップわずかに含む
⑪ 10YR 3/2 黒褐色 粘質土 基本的に5層である 地山チップを含まない
⑫ 10YR 2/3 黒褐色 粘質土 しまっていない
⑬ 10YR 2/2 黒褐色 砂質土 しまっている
⑭ 10YR 3/2 黒褐色 砂質土
⑮ 10YR 2/3 黒褐色 砂質土
⑯ 10YR 3/4 暗褐色 粘質土 遺構が崩れて風化したものか？
⑰ 10YR 3/4 暗褐色 粘質土
⑱ 10YR 3/2 黒褐色 粘質土
⑲ 10YR 3/4 暗褐色 砂質土 遺構が崩れて風化したものか？
⑳ 10YR 2/2 黒褐色 粘質土 遺構が崩れて風化したものか？

第48図　SD12　遺構実測図　1/40



第49図　　SD12　遺物出土状況　1/30



1	10YR	2/2	黒褐色	シルト	白色粒含む		
2	10YR	2/3	黒褐色	砂質	1～2㎜の石含む		
3	7.5YR	2/1	黒色	粘質			
4	10YR	2/2	黒褐色	粘質			
5	10YR	2/2	黒褐色	粘質			
6	10YR	2/3	黒褐色	粘質	わずかに白色炭化物含む		
7	10YR	3/2	黒褐色	粘質	しまりなし		
8	10YR	2/2	黒褐色	粘質			
9	10YR	2/3*	黒褐色	粘質			
10	10YR	3/2	黒褐色	シルト			
11	10YR	3/3	暗褐色	粘質	炭化物含む		
12	10YR	4/2	灰黄褐色	砂質	しまりなし		
13	10YR	3/3	暗褐色	シルト	しまりなし	鼓形器出土	
14	10YR	3/2	黒褐色	砂質	しまっている	遺物出土	
15	10YR	3/3	暗褐色	砂質			
16	10YR	3/2	黒褐色	粘質			
17	15と同じだがしまっていない						
18	10YR	4/2	灰黄褐色	砂質	しまりなし		
19	10YR	3/3	粘質	しまりなし			
20	10YR	4/3	にぶい黄褐色	砂質	しまりなし		
21-1	2.5Y	3/2	黒褐色	粘質			
21-2	2.5Y	3/3	暗オリーブ褐色	粘質			
22	2.5Y	3/1	黒褐色	粘質			
23	10YR	3/2	黒褐色	粘質	不純物含む		
24	10YR	3/3	暗褐色	砂質	黒色ブロック含む		
25	10YR	3/2	黒褐色	砂質	白色の細石含む		
26	25とよく似るが暗い						
27	2.5Y	3/2	黒褐色	粘質			

第50図　SD14　遺構実測図　1/40

第51図　　SD14　遺物出土状況　1/30

ＳＤ１４　（第５０図）

規模・形態

幅３．１ｍ、深さ１．０ｍを測る、断面形がＶ字形をした大溝である。完全なＶ字というわけではなく、底面は０．９ｍほど平らになっているため逆台形といっても良いような形態である。方向は南北を向き、底面レベルは５．６～５．７ｍと北側に向かって若干低く傾斜する傾向が認められる。なお、遺構肩のレベルは東側が西側に比べ低くなっているが、西側が盛土であることから本来の遺構面の高さは東側の６．８ｍ程度と考えられる。

土層堆積状況

溝内における土層の堆積では掘り返しなどの人為的な不整合面は特に確認できず、非常に整然としている。大きく暗褐色土層と黒褐色土層の２層に分けることができるが、その出土土器に明確な時期差は確認できない。

遺物出土状況　（第５１図）

溝内より多くの弥生土器・土師器が出土した。完形になるものは少ないものの、弥生時代終末期から古墳時代初頭に属する草田５～７期の土器が多く出土している。器種は甕、壺、低脚坏、高坏、鼓形器台とバラエティーに富んでいるが、壺を主体としているようである。

ほぼ完形で出土したものは遺構南半分に集中している。この遺構につながる第７次調査ＳＤ０６では北半分に遺物が集中しており、これらと併せて１つの土器群を形成しているものと考えられる[5]。

また、弥生時代中期の土器も出土した。遺物群の中心を成すものではないが、これらは遺構縁辺部及び遺構最下層からの出土が多いことが特徴である。

出土遺物　（第５２図～第５７図）

弥生土器

壺（１～３・６・８・９・１５・２２）

１・２は口縁部である。１の端部拡張部には貝殻斜線文を施している。２は１に比べ器壁が比較的薄く、端部拡張部にはハケ目で山形文が施されている。ハケ目の１単位は５本で構成される。

３・９・１５は頸部である。３は最小径部分に２条の突帯が貼り付けられ、９は３条の刻目突帯を巡らせていることが特徴である。また、１５も指頭圧痕文帯を巡らせる。

６は直口壺である。

８は２条の突帯を巡らし口縁端部には刻目を施している。これらはいずれも弥生時代中期中葉（松本Ⅲ様式）の中で捉えられるものである。

２２の頸部内面には指頭圧痕が顕著に認められた。

時期としては１～３・６・８・９が弥生時代中期（松本Ⅲ～Ⅳ様式）、２２が弥生時代終末期（草田５期）が考えられる。

甕（４・７・１０～１４・１６・１７・１９～２１）

４・７・１１～１３・２１は複合口縁を持たないものであり、弥生時代中期中葉（松本Ⅲ様式）の様相を示している。

１０は口縁端部が拡張し、４条の凹線を施していることからも弥生時代中期後葉（松本Ⅳ様式）に当たるものであろう。

１６は頸・肩部である。外面に貝殻斜線文が施されている。

１４・１７・１９・２０は口縁拡張部がしっかりと上方に延び、先端を薄くのばすことから弥生時代終末期（草田５期）に当たるものと考えられる。

鉢（５・１８）

５・１８は指頭圧痕文帯を貼り付けている。

５の指頭圧痕文帯の直下には三日月状の刻目が施されている。

底部（４０～４６）

全てしっかりとした平底を呈しており、弥生時代中期～弥生時代終末期と考えられるが、古墳時代前期初頭に属するものも含まれている可能性がある。

土師器

甕（２３～２７・２９～３１・６６～６９）

２３・２５・２６は口縁端部を若干外方に引き延ばしていることから草田６期に当たるものであろう。２５は肩部に径４㎜穿孔があることが特徴的である。

２９～３１は口縁端部に平坦面が明確に認められることからも草田７期に該当する。

これらは形式差はあるものの古墳時代前期初頭の様相を示している。

２４・６５～６８は単純口縁を持つものである。畿内系の遺物であると考えられるが、その胎土や焼成の状況より在地で作られたものと考えられる

壺（２８・３２～３７・３９・４０）

２８は頸部である。外面には貝殻で施文された羽状文がみられる。山持川川岸遺跡ＳＩ０１に類例[6]が見られる。

３２～３５はほぼ完形に復元できた遺物である。

３２は口縁拡張部がほぼ垂直に立ち上がる。胴部から底にかけてゆがみが大きく、底部で自立させるには非常にバランスが悪くなる。また、底はほぼ丸底化の傾向を示すが、若干平底の痕跡を残している。肩部にはハケで波状文が施される。

３３～３５は３２に比べ口縁拡張部が外反し、頸部内面にユビオサエの痕跡が顕著である。

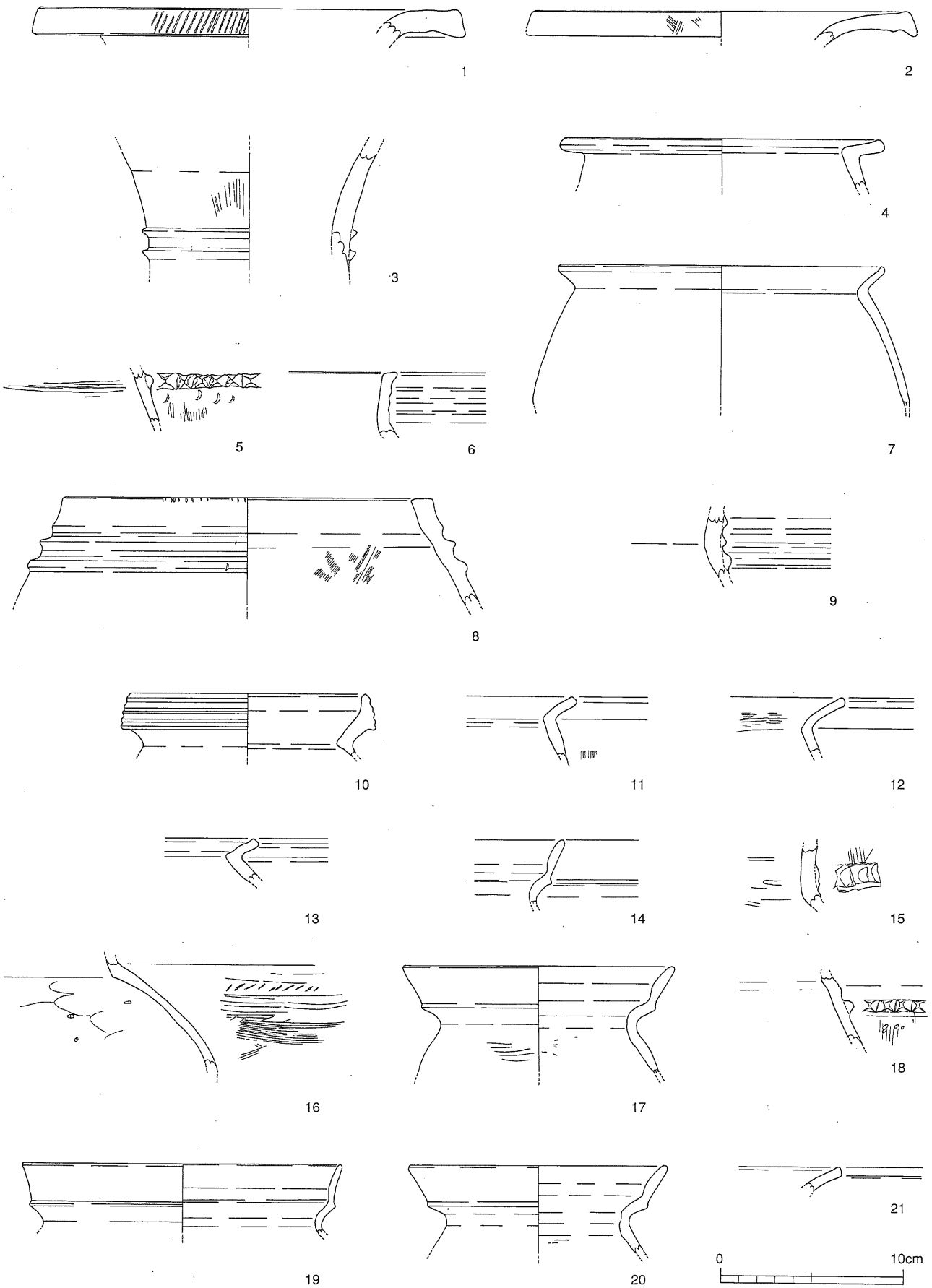
３３の肩部には非常に緩やかなハケ目の波状文が施されている。

３５の胴部には径１．３㎝の穿孔が認められた[7]。

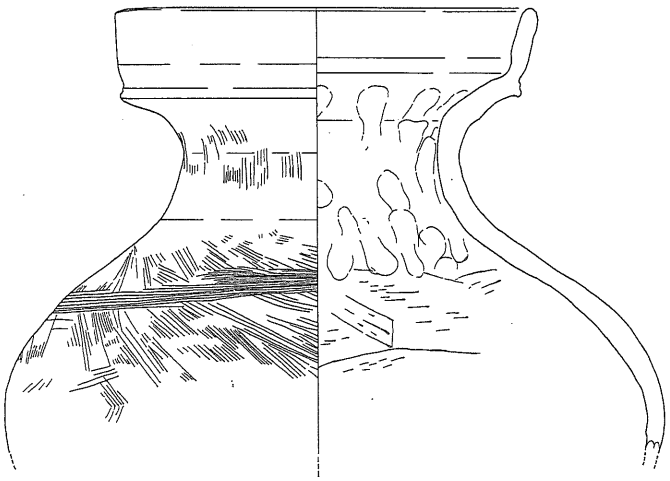
２８・３２～３５はその形態から古墳時代前期初頭（草田６～７期）に該当する。

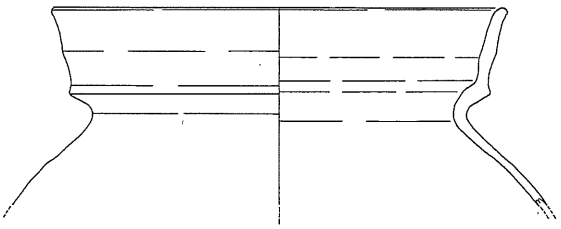
３６は楕円形の体部をもち、口縁は大きく外へと開き、端部は若干下垂する。頸部には１条の突帯文、肩部には貝殻斜線文を巡らせている。出雲地方にはあまり見ることのできない形態である[8]。風化が激しいためにどこが欠損しているのかわかりにくいため、口縁部については上方にも拡張し複合口縁となる可能性もある。

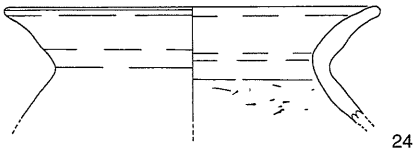
３７・４０は肩部のみが残存していた。どちらも肩が張るタイプの壺であり、外面の肩部には横ハ

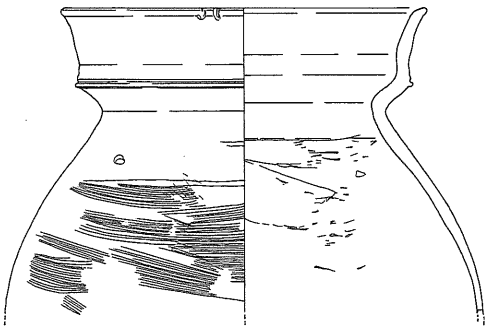


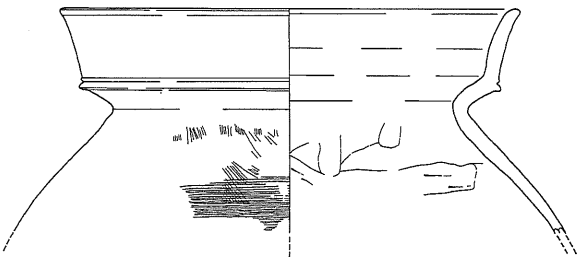
第52図　　SD14　出土遺物①　1/3

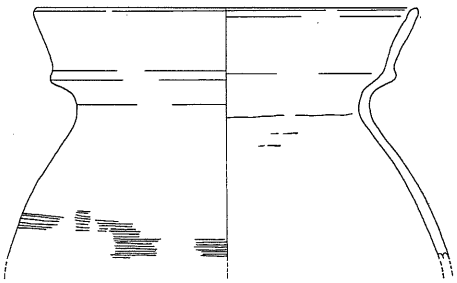


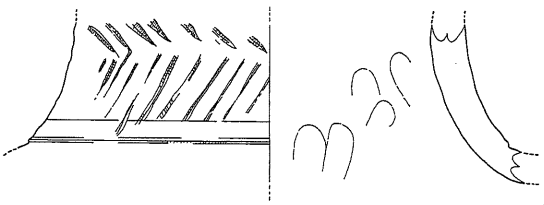


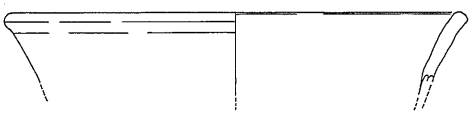


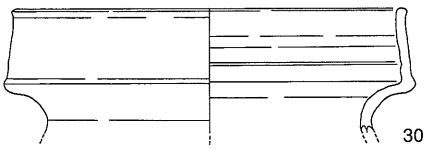


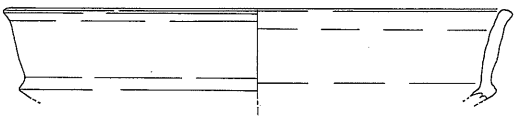


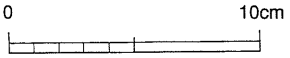




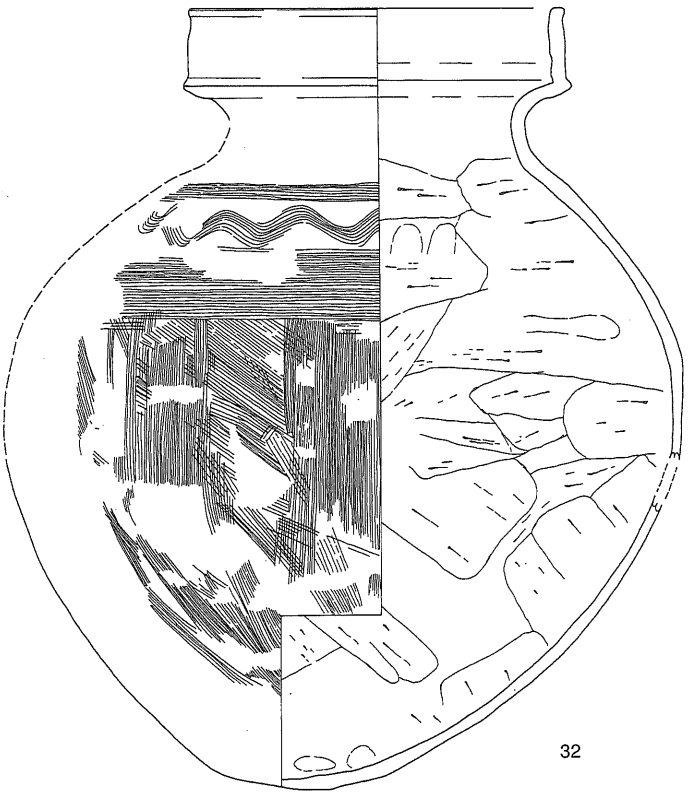


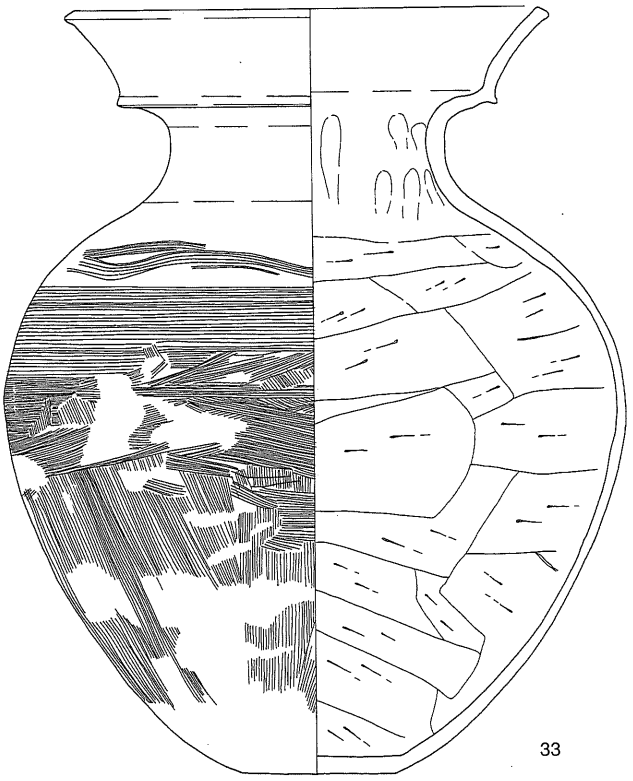


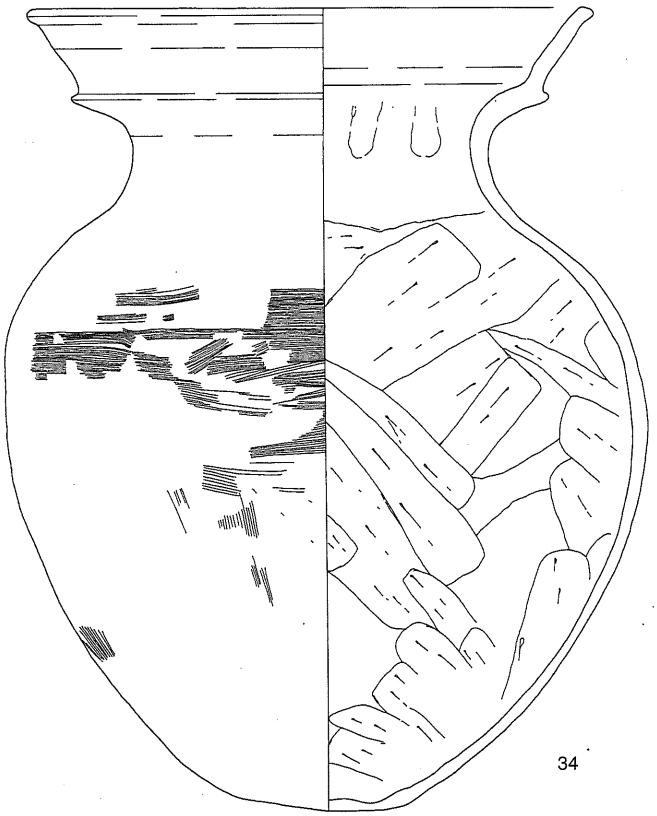


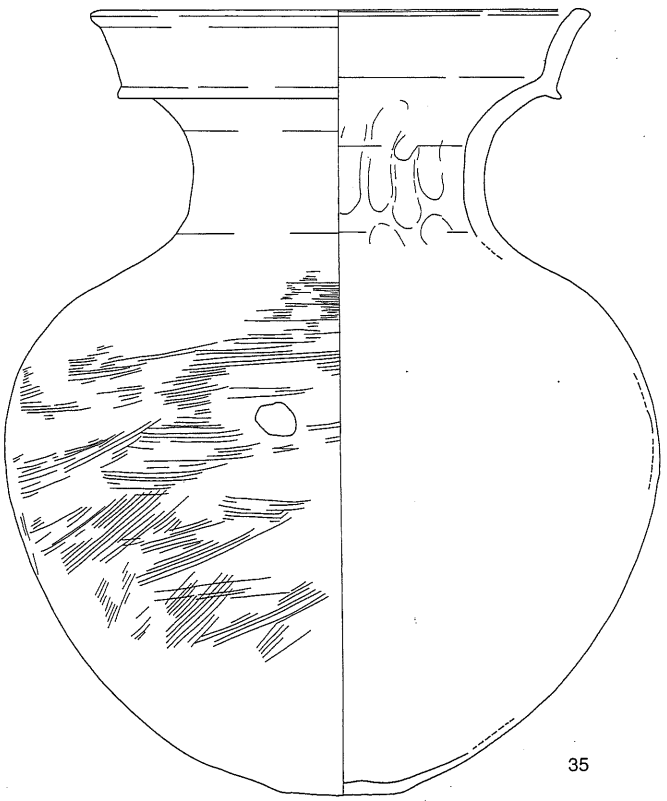


第53図　　SD14　出土遺物②　1/3



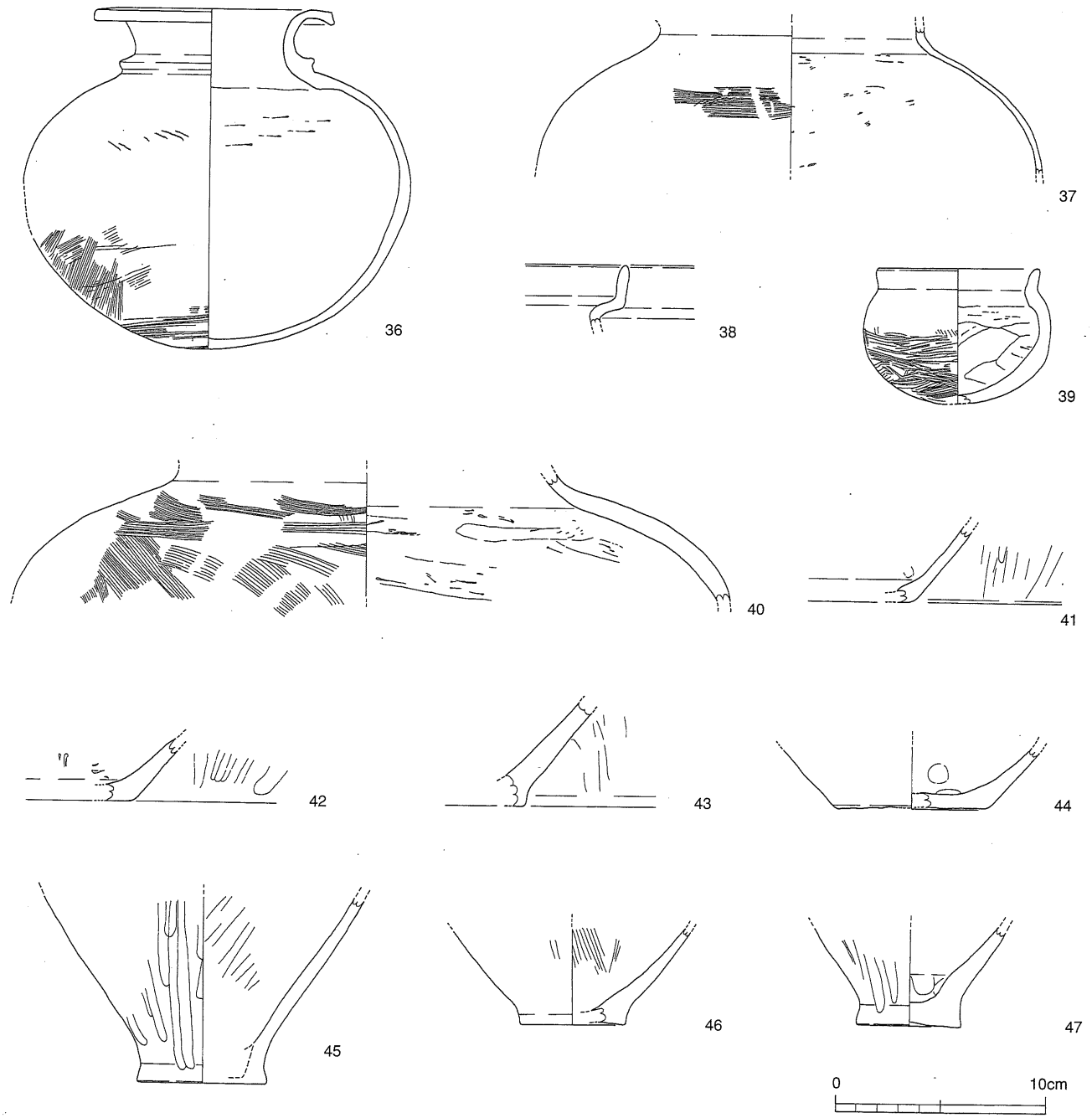






0 10cm

第54図　SD14　出土遺物③　1/3



第55図　　SD14　出土遺物④　1/3

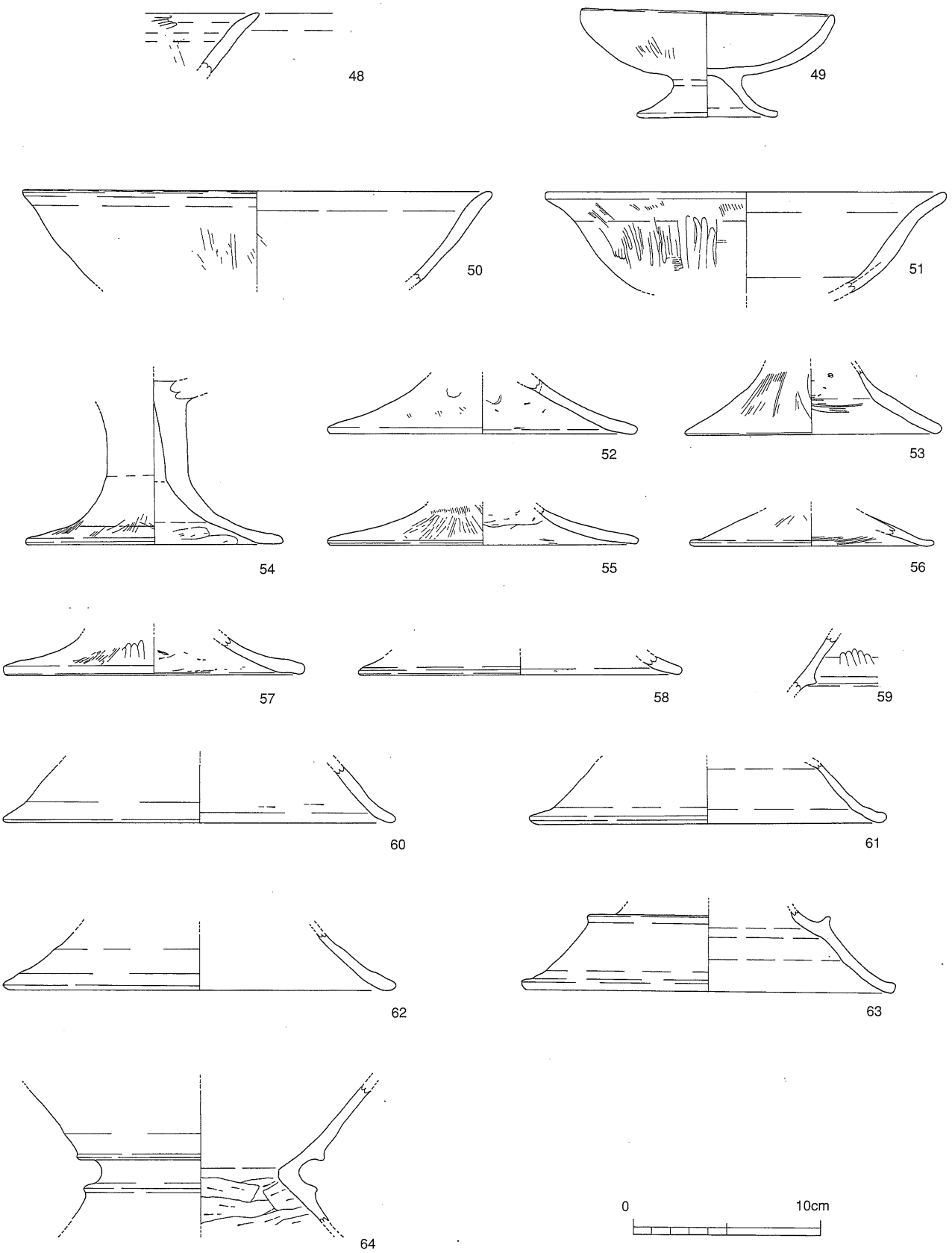
ケ目の調整が顕著である。

３９は小型丸底壺である。外面にハケ目、内面にヘラケズリが認められるが、全体的に粗雑な印象が残る。

高坏（４８・５０～５８）

４８・５０・５１は坏部である。４８は小片のため全体像が把握できないが、５０・５１は口縁部の付近で外反することが特徴である。また、５０の内面には丹彩の痕跡が認められた。古墳時代前期初頭（草田６～７期）に該当する。

５２～５８は脚部である。５４は筒部まで残存していたが、その他は脚端部のみの出土であるため、はっきりとはわからないが、脚裾径が広いため高坏のものと考えられる。弥生時代終末期～古墳時代前期初頭（草田５～７期）の様相を示す。



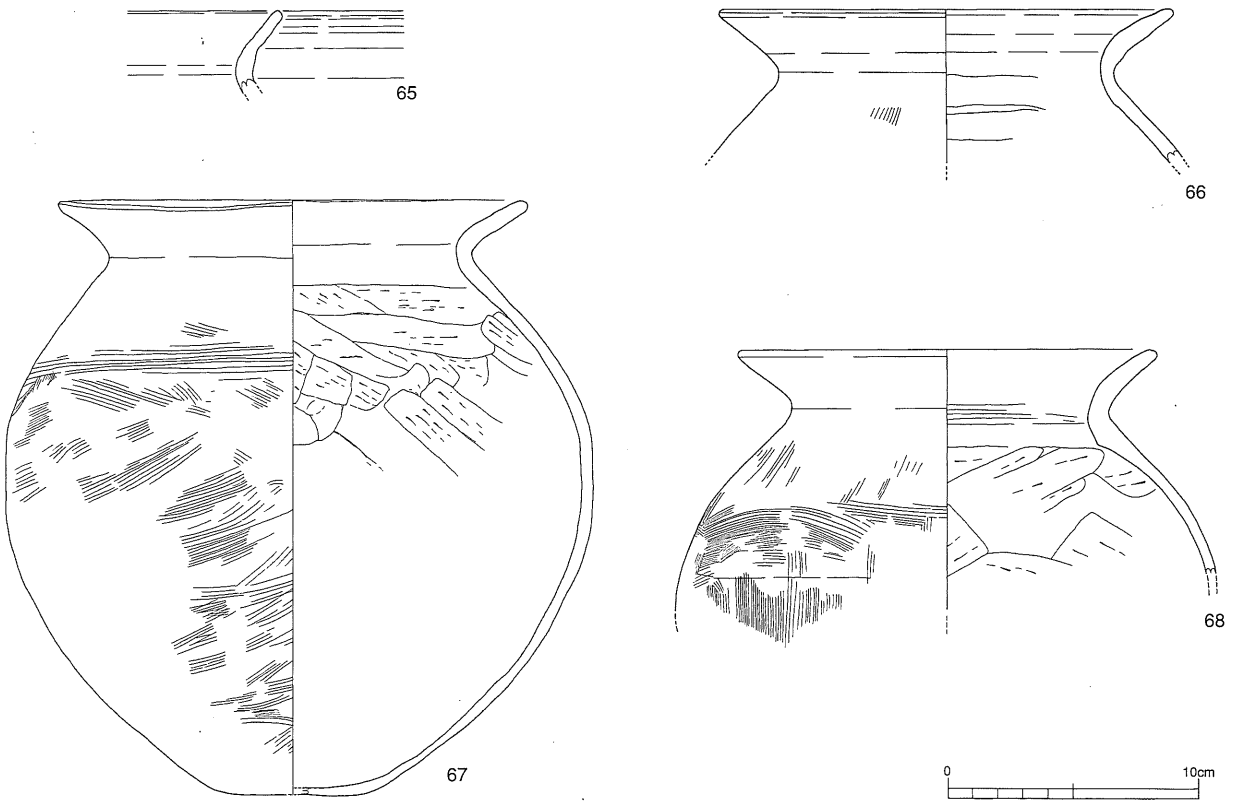
第56図　　SD14　出土遺物⑤　1/3

低脚坏（４９）

古墳時代前期初頭（草田６期）に該当するものと思われる。

鼓形器台（５９～６４）

５９は受部の破片である。また、６４は口縁部及び脚端部が欠損しているものの、筒部とその上下が残存していた。その他は脚部と考えられる。いずれも古墳時代前期初頭（草田６～７期）のものと考えられる。



第57図　　SD14　出土遺物⑥　1/3

遺構の性格・時期

遺構の規模・形態より考えると集落を区画するための溝であった可能性がある。

ここで特筆すべきは、今回出土した遺物と第７次調査でまとまって出土した遺物とは同じ土器群を形成すると考えられることである。今回出土した遺物は甕よりも壺が主体を占めるが、第７次調査時では甕が主体であり、北側に「壺」・南側に「甕」と器種ごとにまとめて配置していたものと考えられる。鼓形器台・低脚坏・高坏は壺・甕に比べ数が少ないものの、第７・１０次の両方から出土しており、壺と甕との間に置かれていた可能性も考えられよう。このことからも、土器を廃棄したというよりも、何らかの祭祀（溝の廃棄？）のために意図的に配置された可能性がある。

こういった器種ごとに配置される様子は天神遺跡よりも南西に位置する古志本郷遺跡[9]でも確認されている。

溝が廃棄された時期としてはその出土遺物より古墳時代前期初頭が妥当であるが、弥生時代中期の土器が遺構縁辺部及び最下層から出土することから、弥生時代中期より既にあった溝を掘りなおして

使用したか、若しくは継続して使用していた可能性が高いと考えられる。

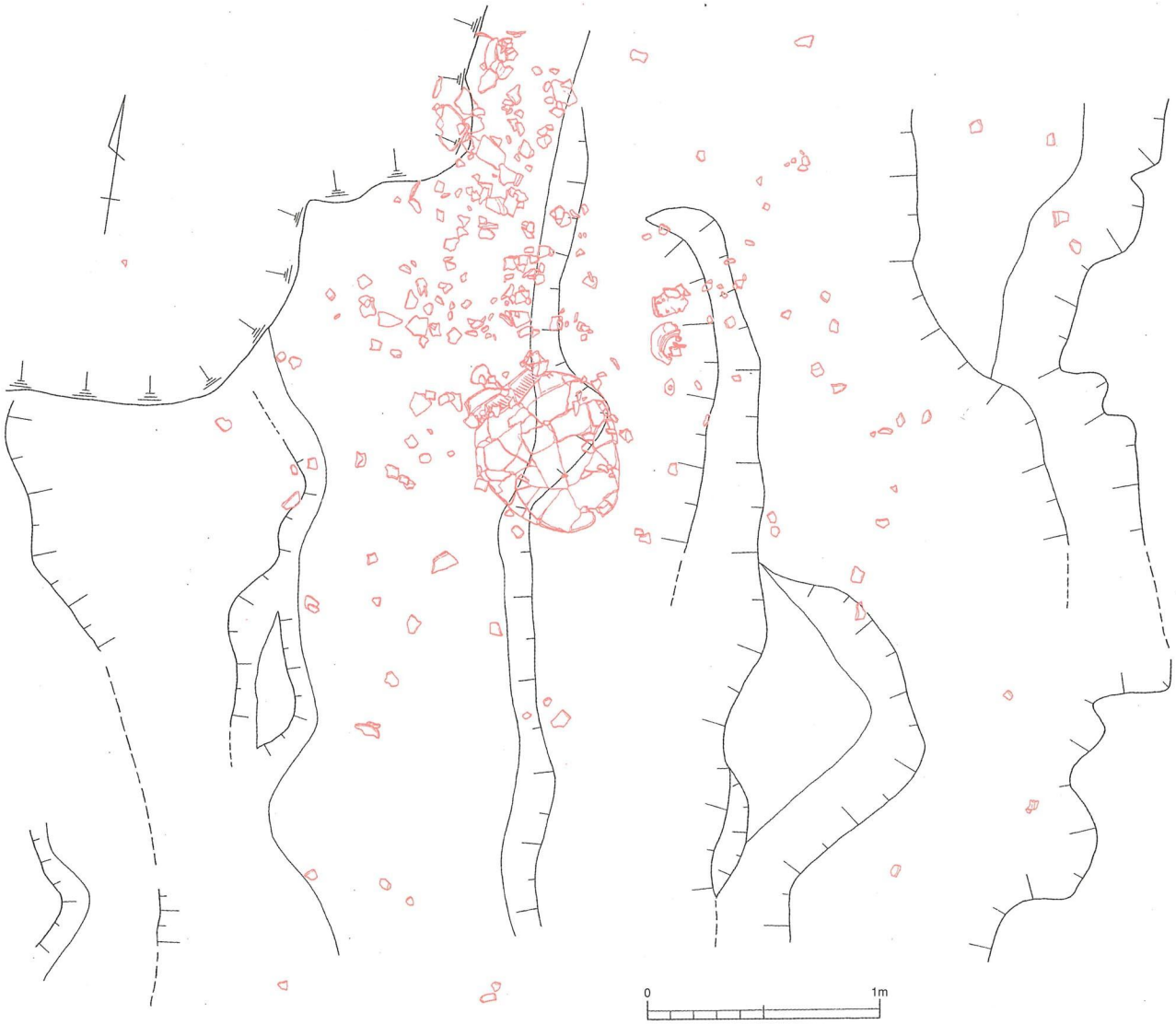
第７次調査Ｂ区ＳＤ０６に対応する遺構である。

ＳＤ２２　（第５９図）

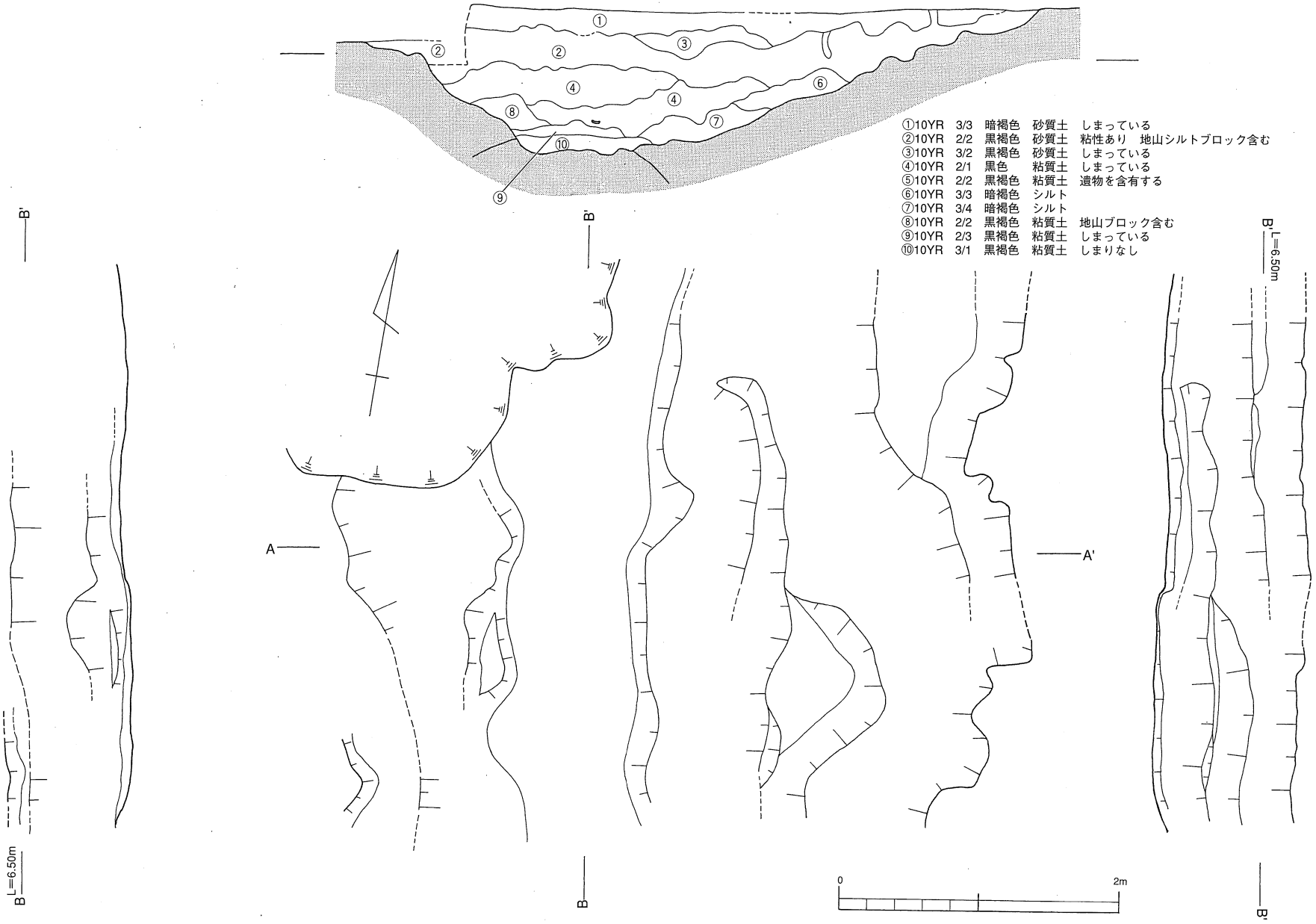
規模・形態

幅３．７～５．０ｍ、深さ０．９ｍを測る溝状遺構であり、他の環壕と考えられる遺構と同様、南北に延びる遺構である。断面形状は舟型を呈しているが西側は傾斜がきつく、その反面、東側はなだらかである。遺構の両端のレベルは西側の方が低くなっている。

第７次調査においては今回検出した規模と異なり、遺構が幅２．８ｍと狭くなっている。これは第７次調査時において東側が低くなってしまっており（削平か？）東側の遺構肩が残存していないためである。今回の調査においては西側と同様のレベルで東側遺構肩を検出しており、これが本来の遺構規模に近いと考えられる。



第58図　　SD22　遺物出土状況　1/30



第59図　SD22　遺構実測図　1/40

土層堆積状況

土層の堆積状況として特に目立った人的要因は認められず、ほぼ自然に堆積したものであると考えられる。

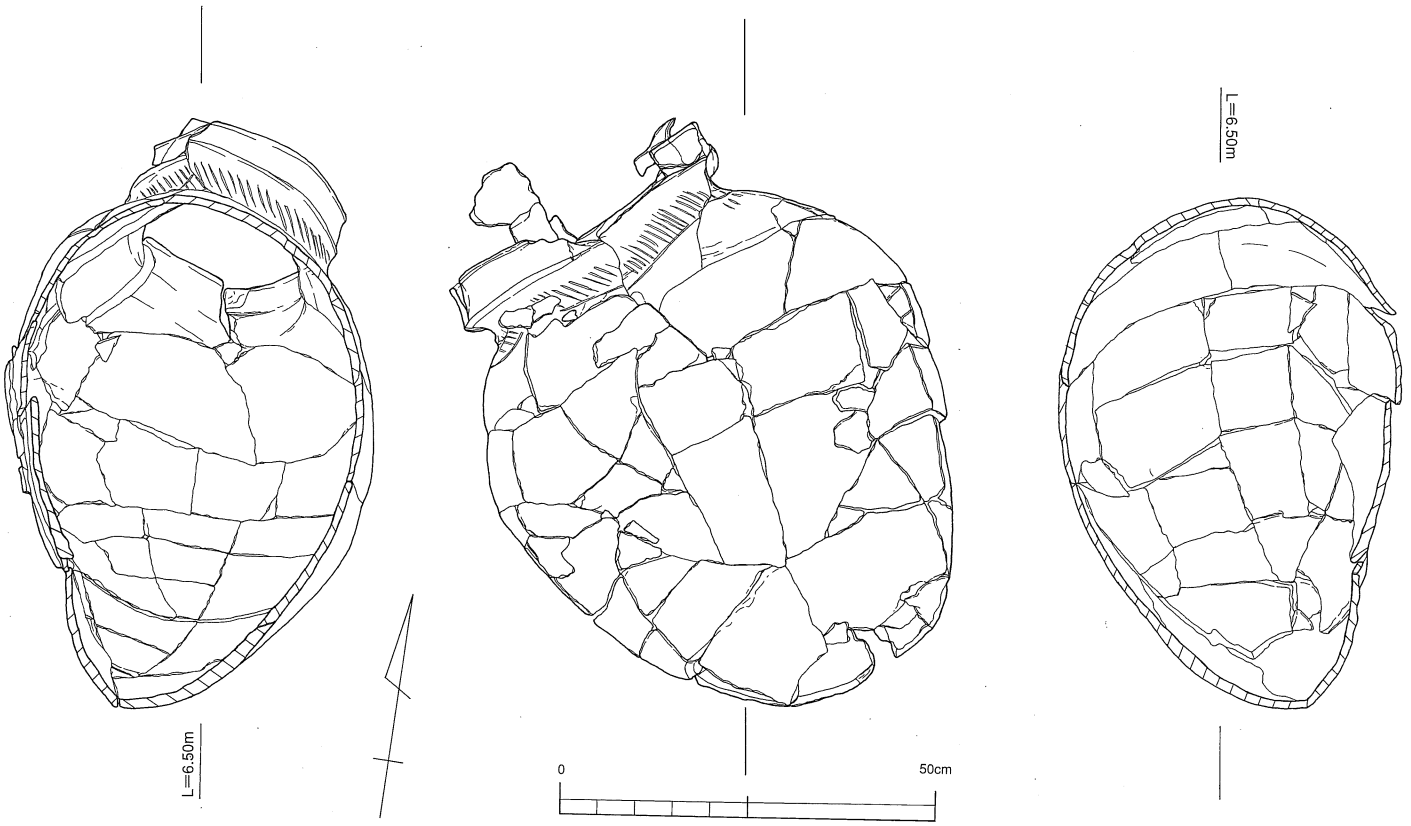
横断の土層堆積状況では遺構底の東側から暗褐色シルト（⑥⑦）が堆積しているのがわかる。これは遺構面の風化土層であるが、遺構東側の肩は溝が掘り込まれた当初よりも崩れているものと考えられ、当初の遺構断面形はほぼ左右対称な舟底形を呈していたであろう。なお、この風化土層は下層に堆積しているため、溝は埋まりはじめてまもなく崩壊したと考えられる。

また、遺構面の状況としては基本的には褐色シルト層であるが、遺構の底では砂層が出現する。

遺物出土状況　（第５８・６０図）

遺構内の上層からは弥生時代終末期から古墳時代初頭にかけての土器が破片で多く出土している。また、遺構底からは大甕が口縁部を南西に向けて横たわった状況で出土した。当初検出した際には土壙墓（甕棺）の可能性も考え調査したが、大甕周辺の土層堆積状況[10]や大甕内からの遺物の出土は認められなかったことなどを考えあわせると、土壙墓ではなくＳＤ２２に伴うものであると考えられる。なお、遺物内に堆積していた土は、その堆積状況から外側より流入したと考えられる。

また、大甕は底部が欠落していることから、直立させていた可能性が考えられる。普通サイズの甕も口縁部を上に向け正位置で出土していることからみても、大甕も同様に正位置であったであろう。



第60図　　SD22　大壺出土状況　1/10

出土遺物　（第６１図～第６５図）

弥生土器

壺（1）

口縁拡張部は外方へ大きく引き延ばされ、口径よりも頸部径の方が圧倒的に小さくなるため壺とした。弥生時代終末期（草田５～６期前半）と考えられる。

２は口縁拡張部が比較的垂直気味に立ち上がるものであり、古墳時代前期初頭（草田７期）と考えられる。

３～６は頸部のみの残存であった。

７は単純口縁であり小型壺と考えられる。形態は畿内系のものと思われるが、山陰の土器と同様の胎土である。

甕（８～１４・４３・４４）

８～１１は単純口縁のものであり、いずれも口縁端部が肥厚しており内面にヘラケズリはみられない。おおむね弥生時代中期中葉（松本Ⅲ様式）と考えられる。１２・１３は弥生時代終末期（草田５～６期）、１４は口縁下部の稜が斜め下へ突出することから、弥生時代後期後半（草田４期）、４４は弥生時代中期（松本Ⅲ～Ⅳ様式）に比定できよう。

底部（４８～５３）

４８・５０・５２・５３はしっかりとした平底を持ち、急な角度で立ち上がっていく。また、それらとは逆に４９・５１は非常に緩やかに立ち上がっていくのが特徴である。いずれも弥生土器としたが、４９・５１については古墳時代前期初頭まで下る可能性がある。

器種不明品（３８～４０・４５）

３８～４０は甕または壺の胴部である。３８・４０は外面に貝殻斜線文が、３９は１単位３点の列点文が施されている。３８・３９は胴部中位に位置することから弥生時代中期と推定でき、４０については肩部であることから弥生時代後期の可能性が考えられる。

４５は甕または鉢の頸・肩部である。頸部には指頭圧痕文帯を巡らせており、弥生時代中期中葉（松本Ⅲ様式）に当たるものである。

土師器

甕（１５～３７・４１・４２・４６・４７・６８）

大半が古墳時代前期初頭（草田６～７期）に該当するものである。

１５は頸部に貝殻斜線文をもつ。

４６は底部を欠損しているが、ほぼ完形に復元できた。外面体部はハケ目、内面はヘラケズリが施され、口縁端部は平坦面が明確である。

４７は体部のみ残存していた。外面の調整はハケ目であるが、体部最大径から上部については横方向のハケ目、それ以下については不定方向のハケ目と明確に区別している。底部径は非常に大きく、どっしりとした印象を受ける。

６８は土師器　大甕　である。外面はハケメで丁寧に調整されている。その後、肩部に巡る１本の線を設け、その上下に貝殻で斜線文を施しているが、頸部に施される上段の斜線文は１周巡っている

のに対して、下段の斜線文は半周しかしない上、一部では斜格子となっていることが特徴的である。

なお、出土状況の項でも述べたが、ほぼ完形で出土している。しかし、接合をしてみると底の部分だけが欠損しているために甕棺としての用途とは考えにくい。

高坏（５４～５６）

弥生土器または土師器

坏（５７・５８）

５７は底部が平らなタイプのものである。一方、５８は底部が丸底のタイプであり、外面に粗いヘラケズリを施されている。

鼓形器台（５９～６２・６５・６６）

すべて古墳時代前期初頭（草田６～７期）に該当するものである。

５９・６０は受部、６１・６２・６５・６６は脚部である。

脚部（６３・６４）

６３は小片であるためにはっきりとしたことはわからないが、その形態より脚部であると想定した。端部に平坦面があるのが明確にわかる。

６４は低脚坏の脚部であろう。直径８㎜のスカシが認められ、２方向であることが想定できる。

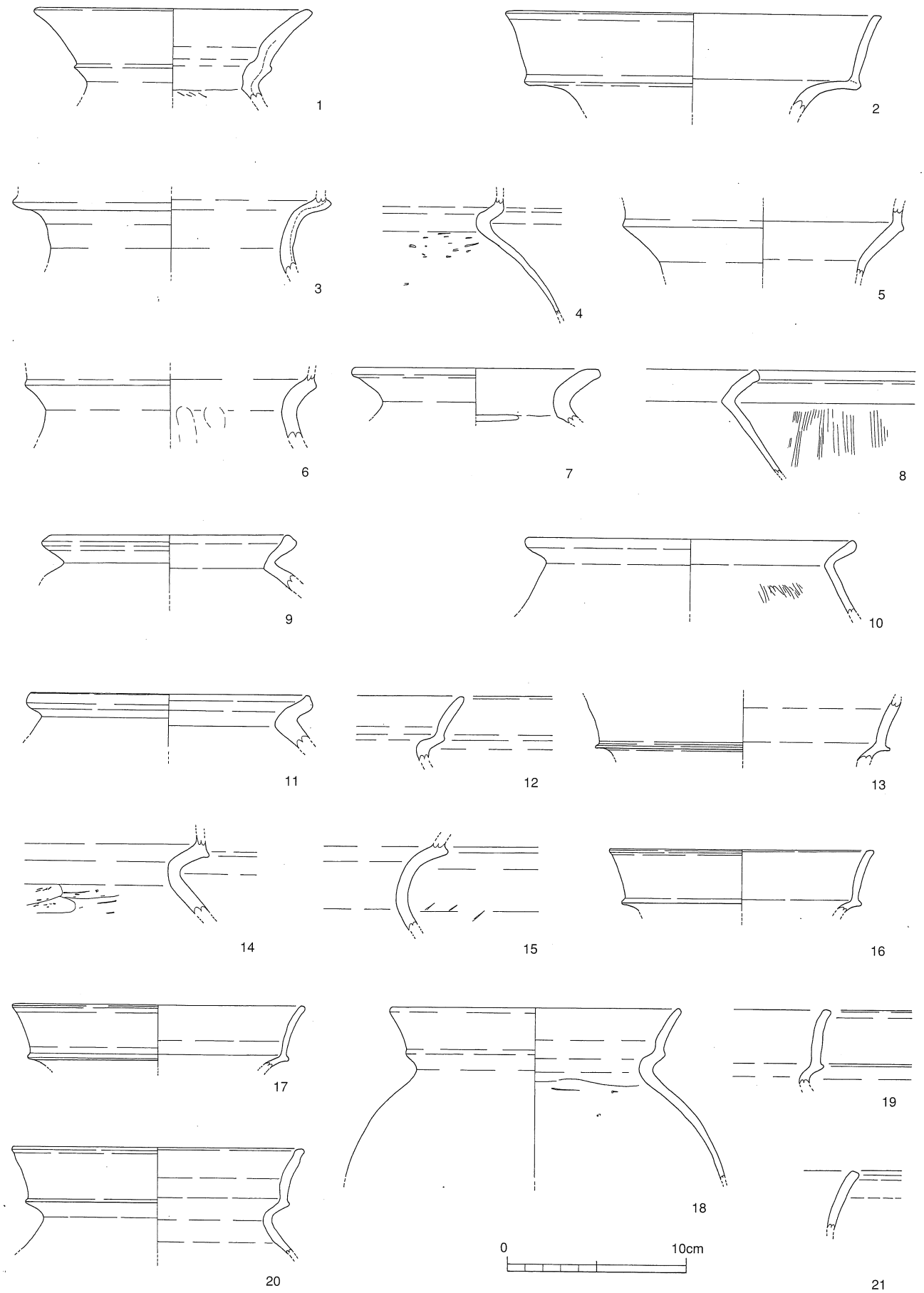
皿（６７）

坏よりも器高が低いことから皿としたものである。内外面には丹彩の痕跡が認められている。

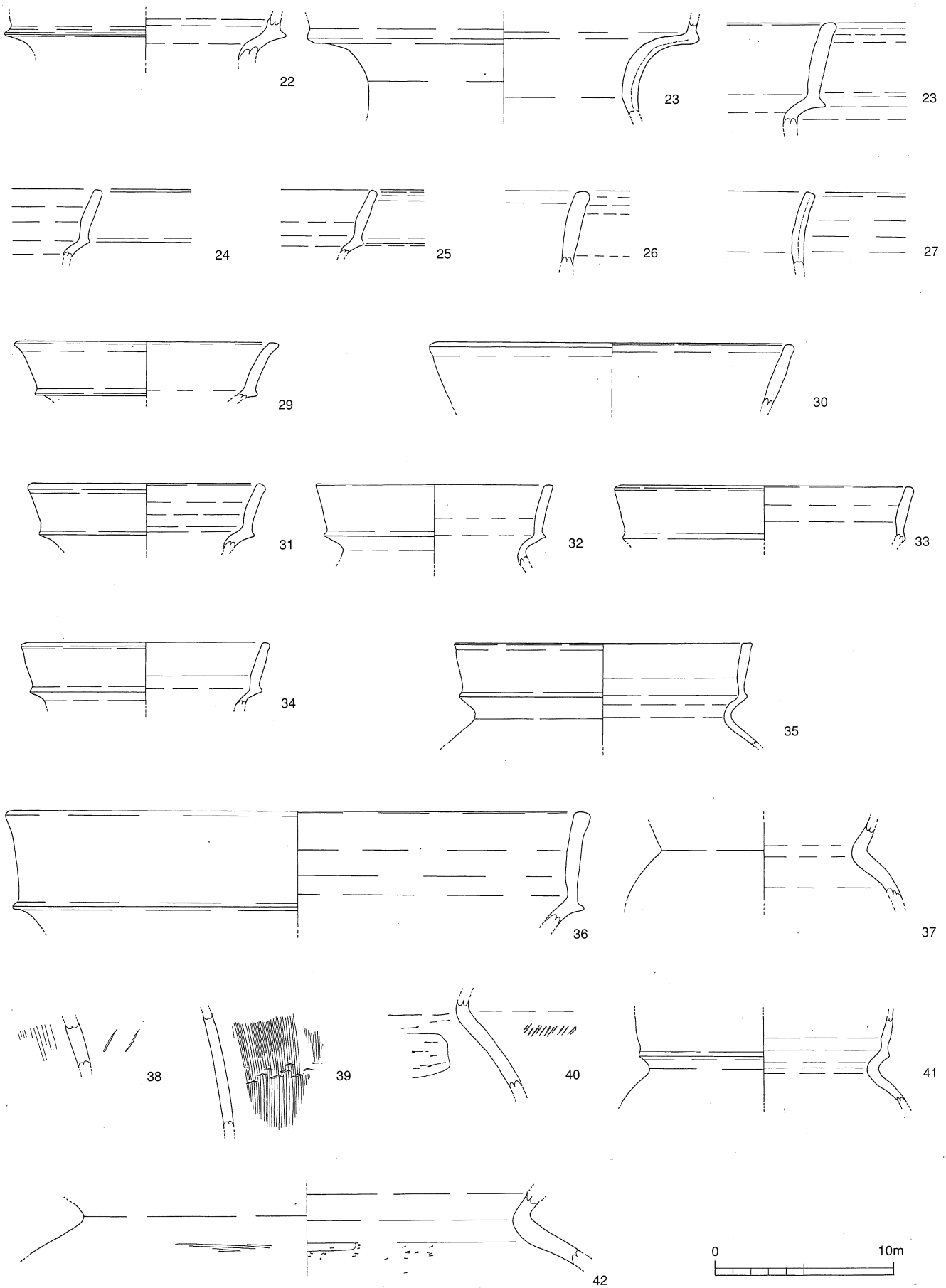
遺構の性格

遺構の規模・形態から考えて、集落を区画する溝の可能性がある。大甕や普通サイズの甕が正位置で置かれていたとすれば、溝内で何らかの祭祀を執り行った可能性もでてくるが、ＳＤ１４のように多くの土器が置かれているような状況とは異なっている。

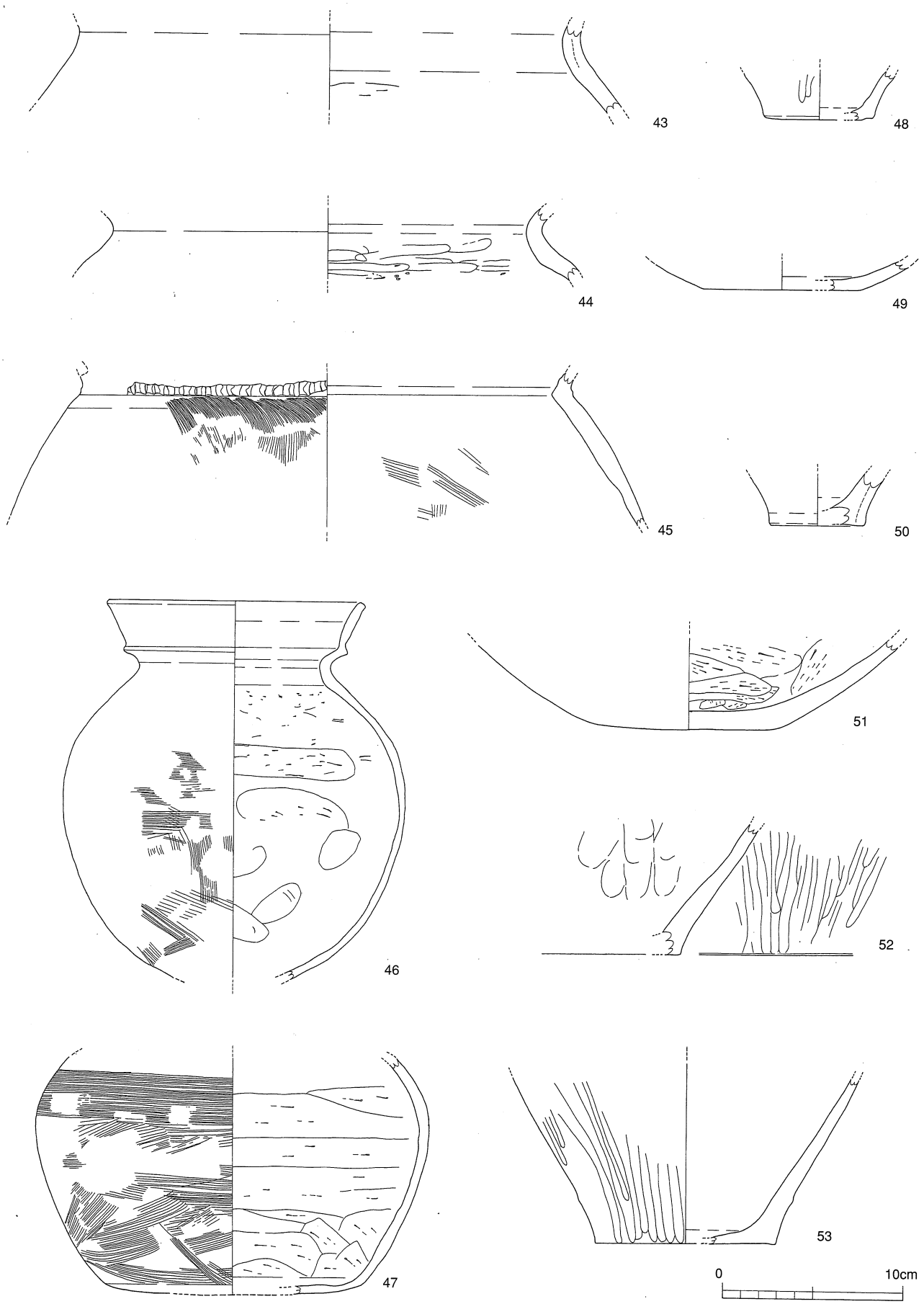
この遺構は第７次調査のＳＤ０４に対応する。



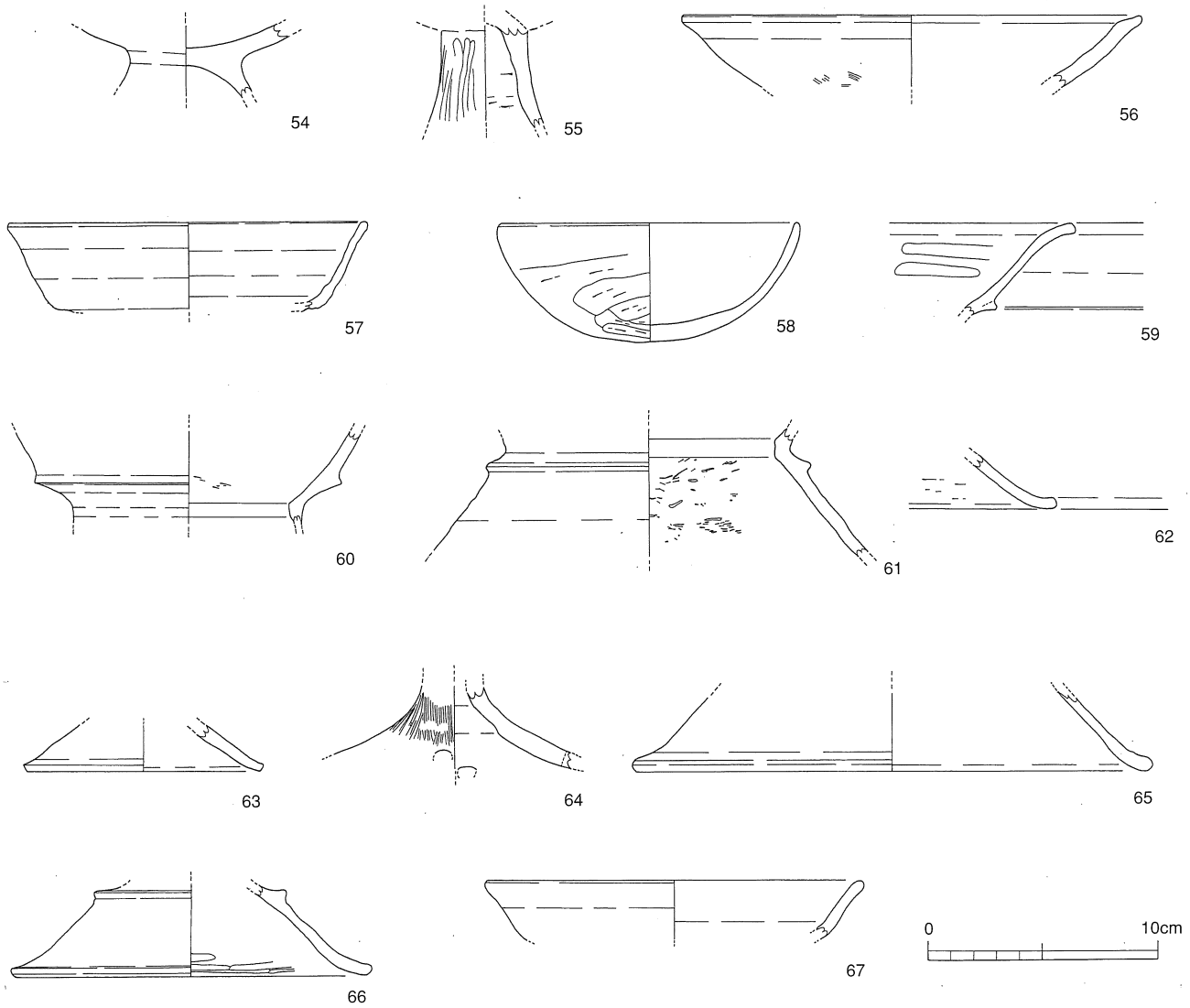
第61図　　SD22　出土遺物①　1/3



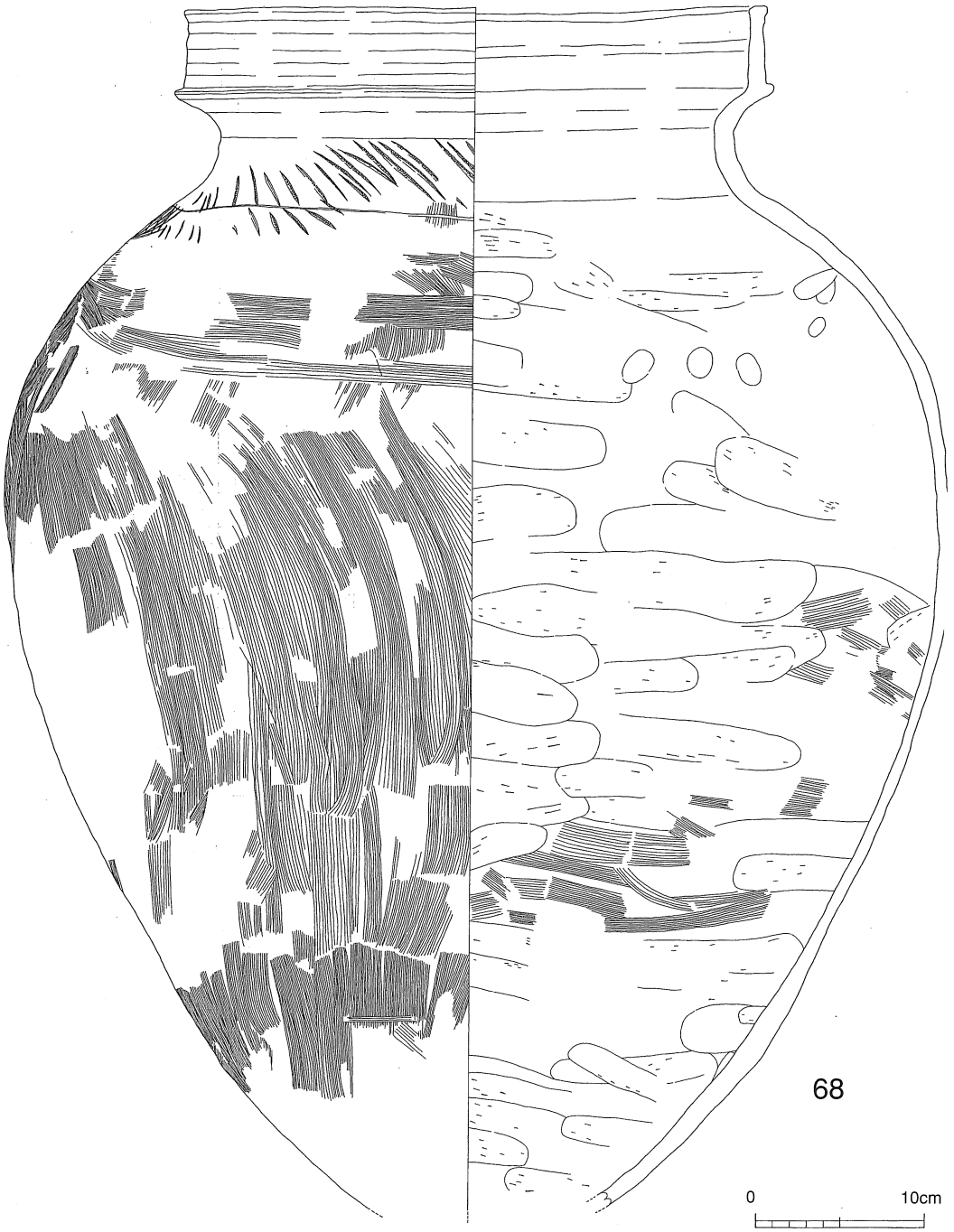
第62図　　SD22　出土遺物②　1/3



第63図　　SD22　出土遺物③　1/3



第64図　　SD22　出土遺物④　1/3



第65図　　SD22　出土遺物⑤　1/4

【竪穴住居】

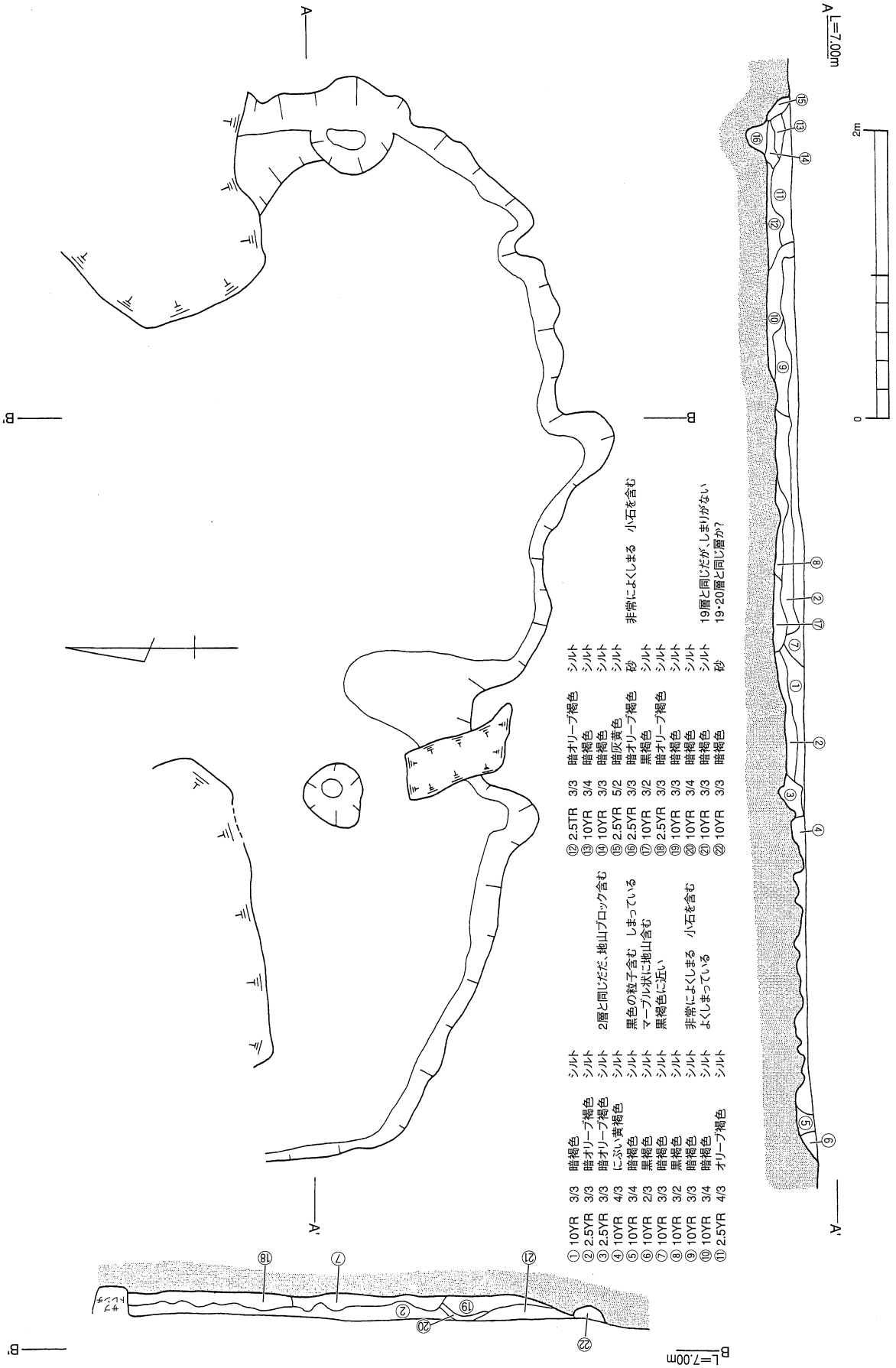
ＳＩ０１　（第６６図）

規模・形態

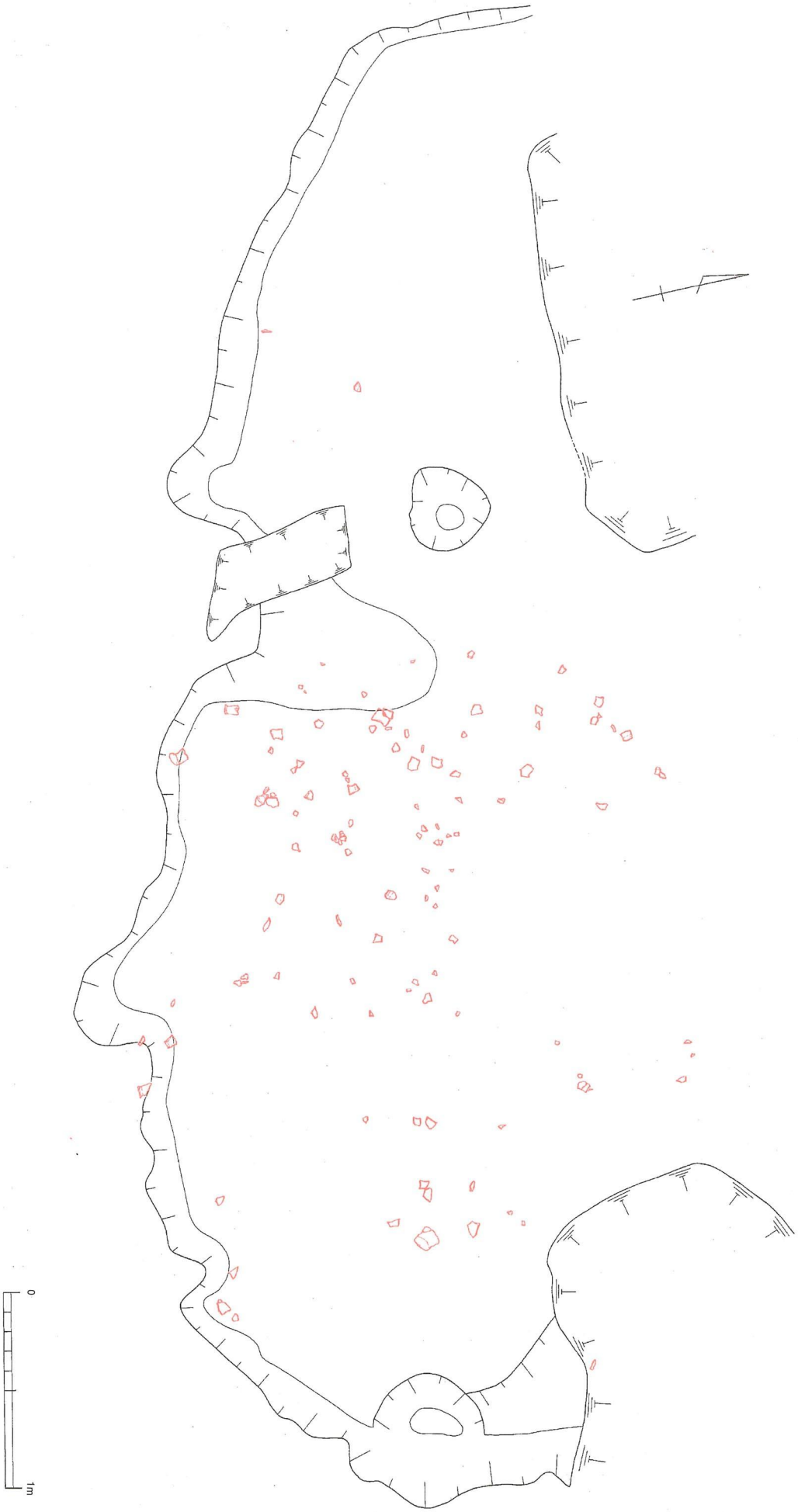
検出最大幅７．５ｍ、深さ２０cmの隅丸長方形を呈する遺構であり、遺構底は非常に凸凹が激しいが２つのピットが認められている。遺構内より弥生土器の出土がみられた。しかしＳＩ０１の立地する遺構地山層は褐色砂層であるために遺構が崩れやすいと考えられ、整然とした形態として検出することは難しかった。なお、この遺構以西は遺構地山層がシルト層であるが、明確に砂層との境を捉えることは難しい。

また、現状では隅丸長方形を呈しているが、土層堆積状況や遺物出土状況より考えると西側ピット

よりも東側についてが本遺構であった可能性がある。その場合は平面形が１辺５．２ｍの隅丸正方形となろう。



第66図　SI01　遺構実測図　1/40



第67図　SI01　遺物出土状況　1/30

土層堆積状況

埋没に人の手が加わった形跡ははっきりとはわからない。遺構の西半分については東側に比べ浅くなっており土層堆積状況からも後世の削平によるものである可能性もある。

遺物出土状況

（第６６図）

遺物はまとまっておらず、破片が散乱した状況で出土した。床面直上で検出される遺物はなく、全てが埋土内からの出土である。その分布は遺構東側半分に集中している。

出土遺物

（第６８図～第６９図）

弥生土器

甕（4～9･14～16）

口縁部の小片ばかりである。4～6・9は弥生時代中期中葉（松本Ⅲ様式）のものと考えられる。

１４～１６は口縁端部が自然に収められており、弥生時代終末期（草田５期）のものと考えられる。

土師器

壺（1・2）

1は小型丸底壺であ

る。非常に丁寧に作られており口縁拡張部は大きく延びる。内面には炭化物が付着していた。

２は内外面ともナデ調整のため口縁部としたものだが、その形態より脚部である可能性もある。

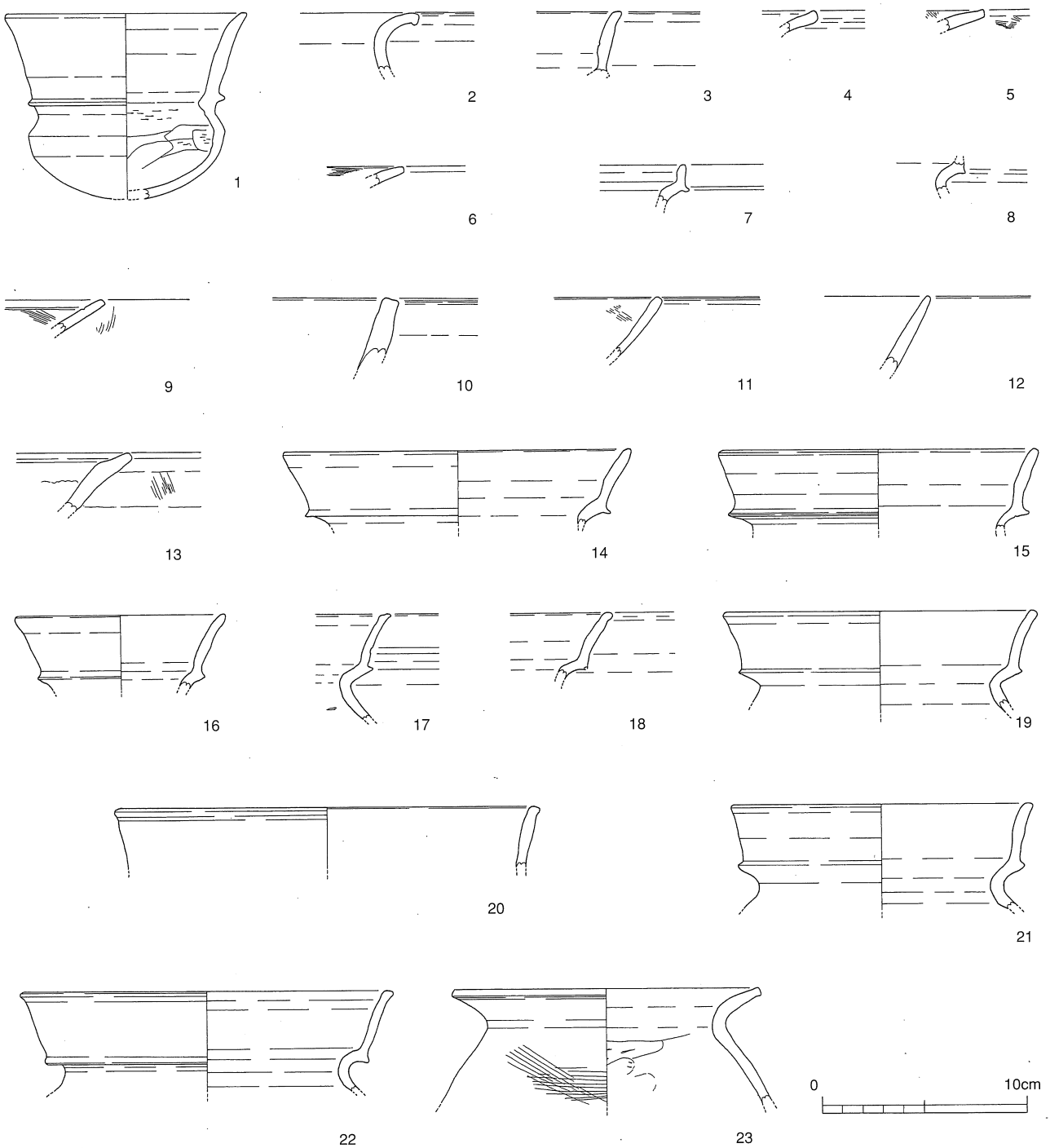
甕（３・１０・１７～２３）

古墳時代前期初頭（草田６～７期）に該当するものである。

２３は単純口縁のものであり、外面を単位の大きいハケ目（１単位６条）で調整し、内面はヘラケズリを施している。これは畿内系の甕であり、胎土が山陰のものと異なることから搬入品である可能性が高い。

高坏（２６～３２）

２６～３０は坏部である。２６・２７・２９はいずれも外反しながら立ち上がるタイプのものであ



第68図　SI01　出土遺物①　1/3

る。２６・２７は古墳時代前期後半（松山Ⅱ期）[11]、２９も同様の時期であろう。３０は坏部が碗形を呈すると思われ、古墳時代中期前半（松山Ⅲ期）と考えられる。

３１は坏脚接合部であり、３２は脚の筒部である。３２の坏底部中央には直径３㎜程度の小さな穴が２つ並んでいる。

坏または碗（３３）

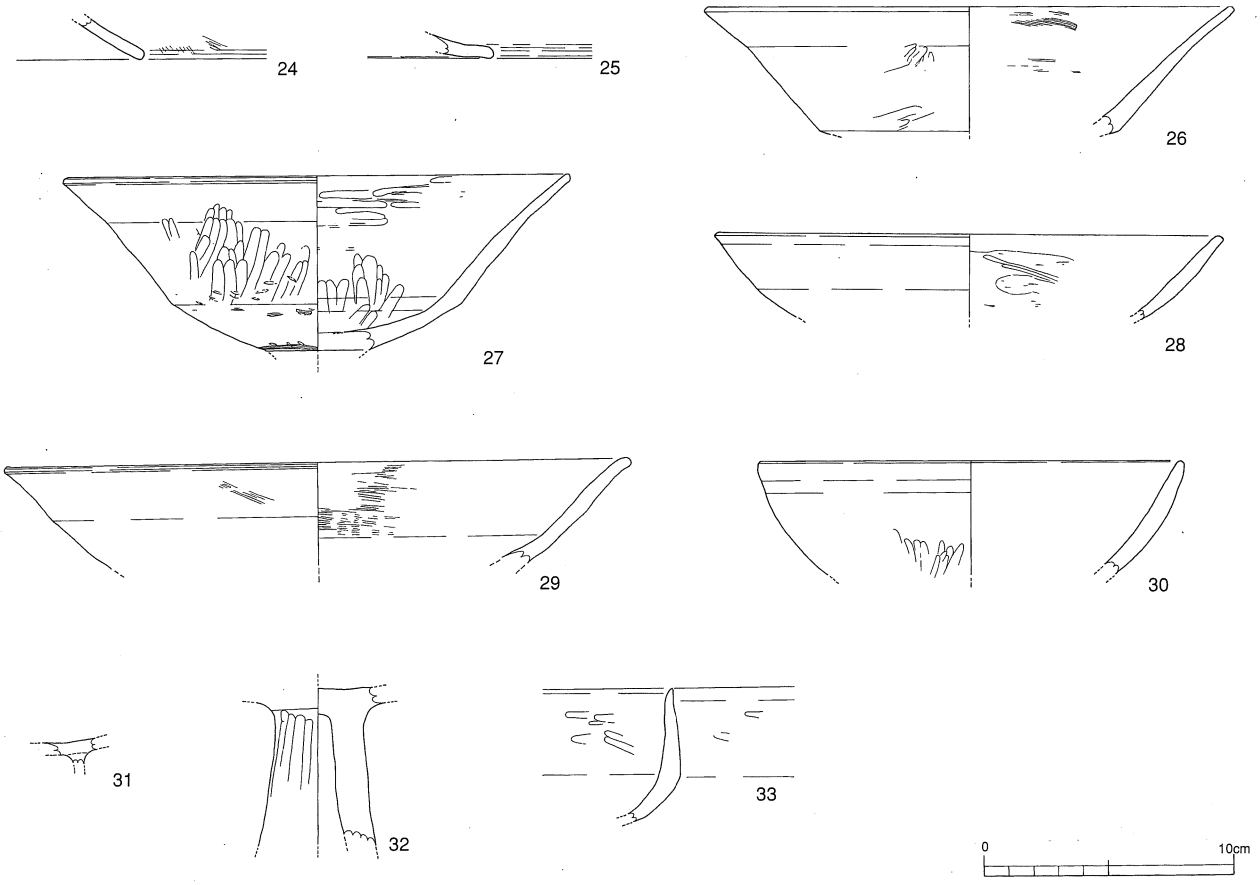
口縁は若干内湾しながら立ち上がり、最後は上方へと口縁端部を薄く引き出している。内外面はヘラミガキを施されている。

脚部（２４・２５）

小片であるため詳細は不明であるが、高坏もしくは低脚坏の脚部であると考えられる。

器種不明品（１１～１３）

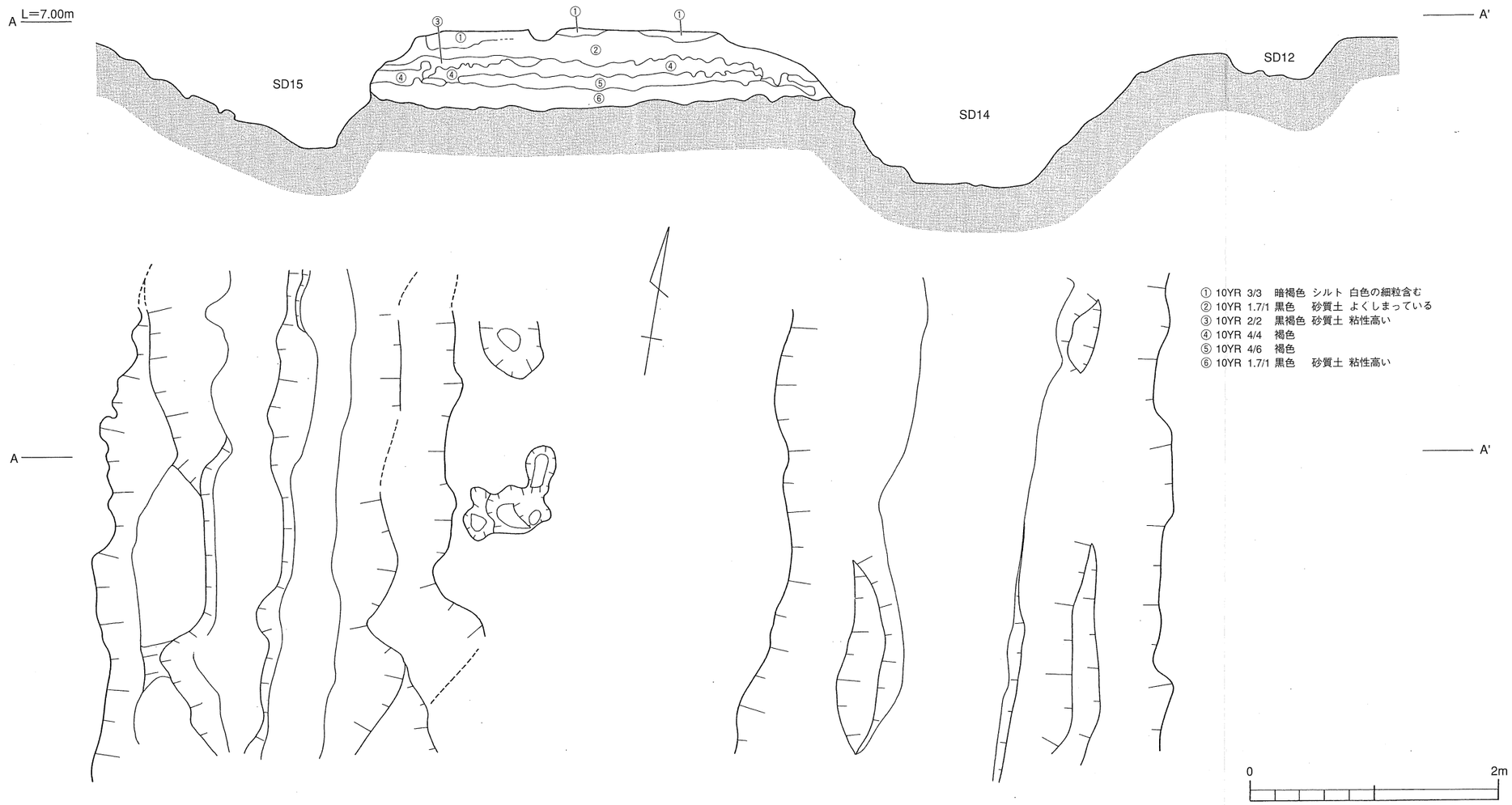
１１・１２は高坏の口縁部のようではあるが小片であるため判断できなかった。また、１３は口縁端部に広い平坦面が設けられているが、詳細は不明である。



第69図　SI01　出土遺物②　1/3

遺構の性格

調査区の狭さゆえこの遺構の性格を決定づけるような成果は少ないが、その規模、形状より竪穴住居の可能性も考えられよう。ただし、柱穴の可能性があるピットは２つしか検出できていないため、その配置に竪穴住居としての規則性があるか判断しかねることもあり、積極的にこの可能性を主張することはできないが、竪穴住居という可能性も大いに残されているものと考える。



第70図　SD14・15間　盛土検出状況　1/40

【土塁状遺構】　（第７０図）

規模・形態

ＳＤ１４・ＳＤ１５の間で土塁状遺構を確認することができた。これは黒色粘質土と黄褐色砂質土を交互に積み土塁状にしたものであり大溝のどちらかに伴うものと考えられるが、そのことについては、上部が削平されているために土層堆積状況からはうかがうことはできない。

土塁状遺構のベースとなる層はＳＤ１４西端及びＳＤ１５東端（標高６．９～６．８ｍ）に比べ標高６．３ｍと低く、その低い場所を埋めるために土塁を築いたと考えられる。

現在では、なぜこの部分だけが低いのか知る術はないが、推測を入れて考えるならば、この場所には弥生時代中期以前に大溝等があり、それが完全に埋められないままＳＤ１４若しくはＳＤ１５が構築された結果であろう。

＜古墳時代以降の遺構＞

【溝状遺構】　（第３１図～第３２図）

ＳＤ０２

規模・形態

幅０．６ｍ、深さ１０cmの溝状遺構である。調査区南側を東西に長く延びており、延長は２６．９ｍを測る。

土層堆積状況

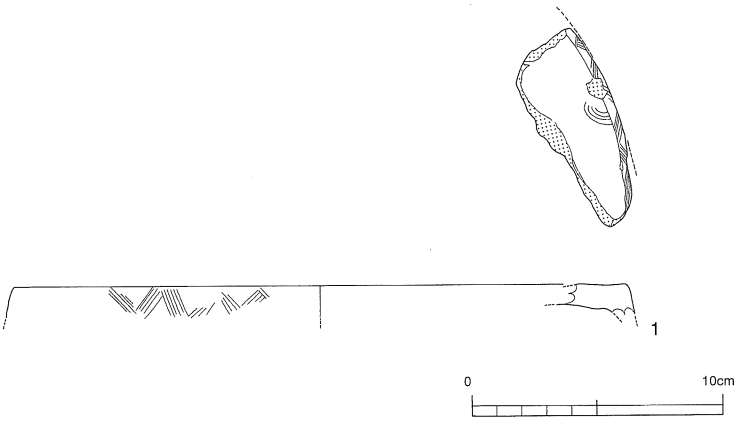
基本的には灰黄褐色砂質土１層で構成される。この層は攪乱土の直下に堆積している土層である。

出土遺物　（第７１図）

弥生土器

壺（１）

広口壺　口縁部である。クシ状工具で口縁端部拡張部に山形文、口縁上面に半円形文を施しており、弥生時代中期中葉（松本Ⅲ－１～２様式）に当たるものである。ただし、この遺物は混入品と考えられる。



第71図　　SD02　出土遺物　1/3

遺構の時期

この遺構はＳＤ１４・１５を切っているため古墳時代前期初頭以降と考えられるが、弥生土器以外の遺物の出土がなく、時期を決定することができない。

ＳＤ１１　（第７５図）

規模・形態

調査区の南側に東西に延びる溝状遺構である。検出最大幅１．３ｍ、長さ８．８ｍを測り、深さは場所によってまちまちであるが０．５～０．９ｍと部分的に非常に深くなる場所もあった。

土層堆積状況

非常に整然とした土層堆積である。しかし、遺構内部に鉄道敷設時の盛土は流入していない。

遺物出土状況　（第７４図）

この遺構内からはほとんど遺物が出土していないが全て埋土よりの出土である。

出土遺物　（第７６図）

弥生土器

壺（１）

広口壺　口縁部である。口縁端部には貝殻斜線文が施されている。弥生時代中期中葉（松本Ⅲ－１）のものであろう。

底部（２・３）

どちらも平底を呈している。

これら弥生土器は混入したものと考えられる。

遺構の時期・性格

弥生土器が出土しているが、弥生時代終末期から古墳時代初頭の遺構を切っているため古墳時代初頭以降の遺構である。また、鉄道敷設時の盛土は遺構内に流入していないことから、上限を近代、下限を古墳時代以降という非常に広い範囲でしか時期を設定できない。

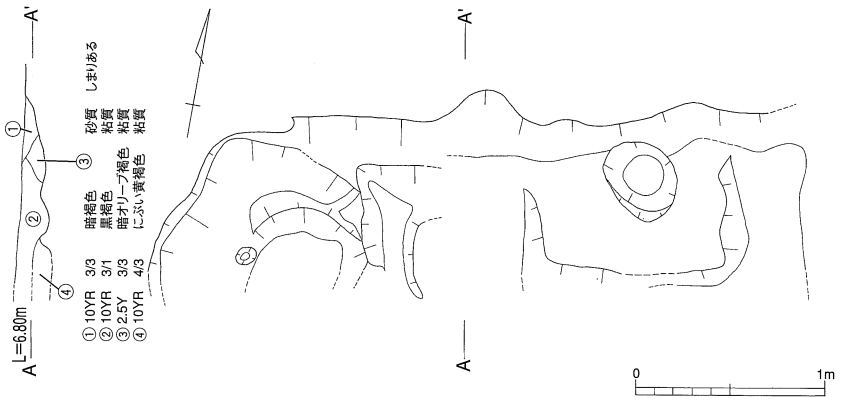
ＳＤ１６　（第７２図）

規模・形態

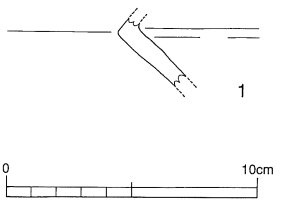
東西３．４ｍ以上、南北０．８ｍ以上の遺構である。東西が長いために溝状遺構としたが、東側をＳＤ２１に、南側を矢板に切られているために本来の形状は不明である。

土層堆積状況

大きくは黒褐色系と褐色系の２色の土層で構成されており、いずれもしまりがあり不純物が少ない。床面断面形は非常に凸凹している。



第72図　SD16　遺構実測図　1/40



第73図　SD16　出土遺物　1/3

出土遺物　（第７３図）

弥生土器

甕（1）

頸部である。風化が激しく時期が特定できないが、内面にヘラケズリ痕が確認できず滑らかであるため、弥生時代中期に属すると推測できる。

遺構の時期

ＳＤ１４を切っているために古墳時代初頭以降の遺構であると考えられる。弥生時代中期の遺物を１点出土しているが、混入品であろう。

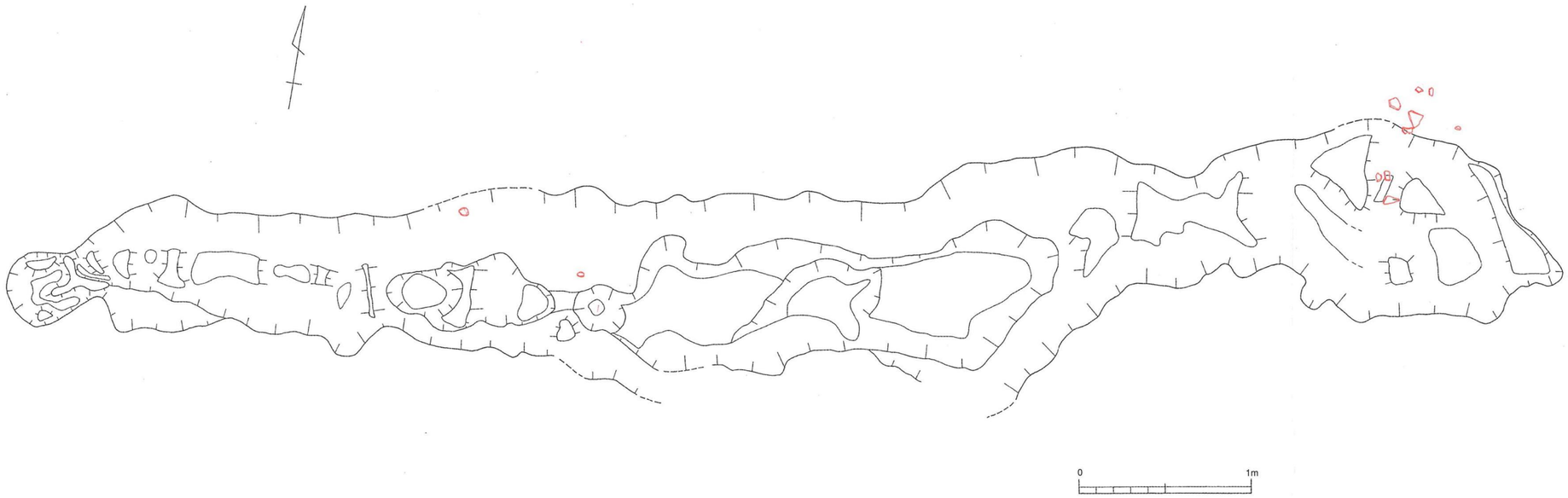
ＳＤ１８　（第７７図）

規模・形態

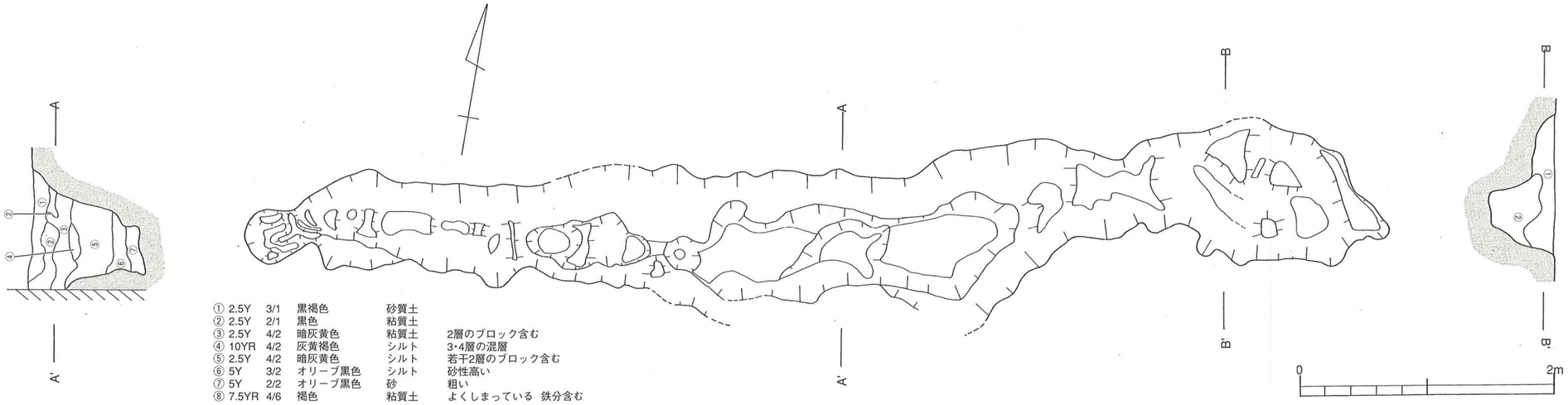
ＳＤ１５の西側に位置し、西側の遺構肩は「Ｌ」字状に検出できた。東側はＳＤ１５を切っているものの東側の肩は検出できなかった。そのため溝状遺構ではない可能性も考えられる。

土層堆積状況

土層は黒褐色土層１層で構成されている。これは攪乱土層直下の堆積層であるが、これより東側に

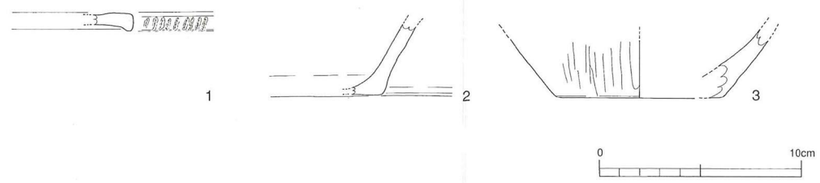


第74図　　SD11　遺物出土状況　1/30



① 2.5Y	3/1	黒褐色	砂質土	
② 2.5Y	2/1	黒色	粘質土	
③ 2.5Y	4/2	暗灰黄色	粘質土	2層のブロック含む
④ 10YR	4/2	灰黄褐色	シルト	3･4層の混層
⑤ 2.5Y	4/2	暗灰黄色	シルト	若干2層のブロック含む
⑥ 5Y	3/2	オリーブ黒色	シルト	砂性高い
⑦ 5Y	2/2	オリーブ黒色	砂	粗い
⑧ 7.5YR	4/6	褐色	粘質土	よくしまっている　鉄分含む

第75図　　SD11　遺構実測図　1/40

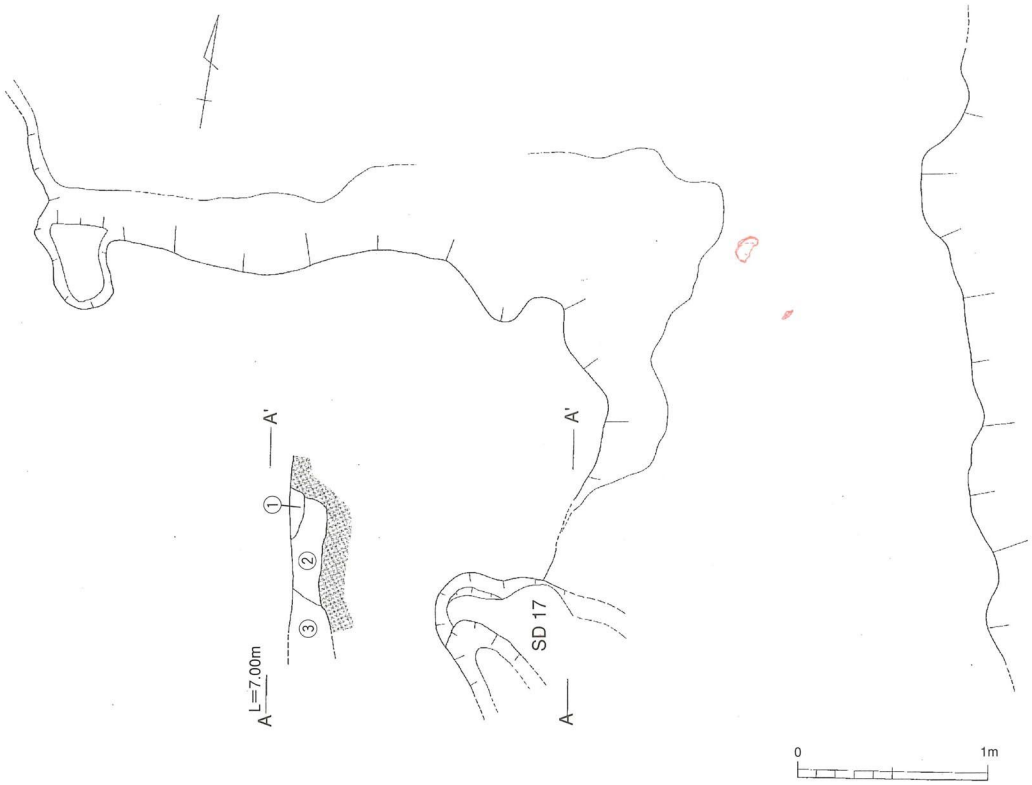


第76図　　SD11　出土遺物　1/3

おいては攪乱層除去後に遺構面が露出しているため、ＳＤ１８の東側肩は既に攪乱されていたものと考えられる。

遺物出土状況

弥生土器底部１点・土師器底部１点・須恵器坏２点が出土した。そのうち弥生土器・土師器については遺構上面からの出土であり、混入したものと考えられる。３は埋土内より、４は遺構床面直上からの出土であった。



第77図　　SD18　遺構実測図・遺物出土状況　1/40

出土遺物　（第７８図）

弥生土器

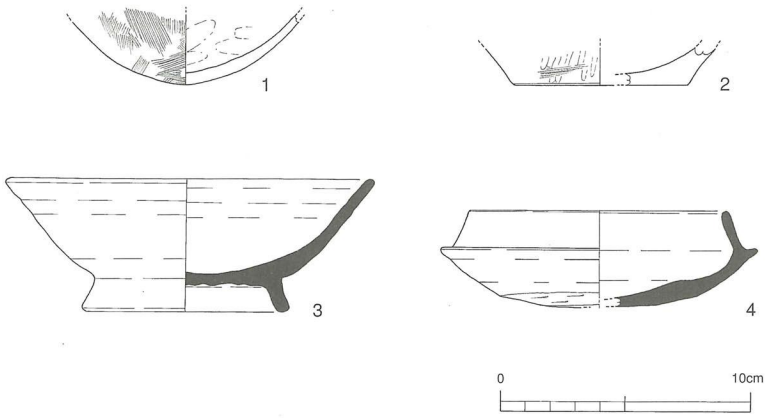
底部（２）

しっかりとした平底を呈しており、弥生時代中期から後期前半までのものと考えられる。

土師器

底部（１）

外面には細かいハケ目、内面に指頭圧痕を顕著に残している。時期については不明である。



第78図　　SD18　出土遺物　1/3

須恵器

高台付坏（３）

比較的長い高台部を持つ。古墳時代終末期（出雲７期）[12]の様相を示している。

坏身（４）

受け部が長く延びるタイプのものである。時期は古墳時代後期前半（出雲２～３期）と考えられる。

遺構の時期・性格

１・２・３は混入品と考えられ、遺構の時期は遺構床面から出土した４の示す古墳時代後期前半と考えられる。なお、遺構の性格についての詳細は不明である。